

# イスラームと社会主義

ムハンマド・イブラーヒーム・ハズマ

黒 田 壽 郎 訳

昭和60—63年度文部省科学研究費補助金(一般研究A)

研究課題番号 60400012

研究成果報告書・VI(昭和61年度第4分冊)

国 際 大 学

中 東 地 域 研 究 科

本冊子は、昭和60—63年度文部省科学研究費補助金による一般研究（A）として行なわれた「現代イスラーム社会の変容の総合的研究——思想的背景と現状」の成果の一部を報告するために作成された報告書の第Ⅵ分冊であり、昭和61年度文部省科学研究費補助金の一部を用いて作成された。

#### 記

昭和60—63年度文部省科学研究費補助金一般研究（A）

研究成果報告書・Ⅵ（昭和61年度第4分冊）

課題番号 60400012

研究課題 現代イスラーム社会の変容の総合的研究  
——思想的背景と現状——

研究代表者 黒田壽郎（国際大学教授）

研究分担者 石田 進（国際大学教授）

丸山直起（国際大学教授）

松本耿郎（国際大学準教授）

小杉 泰（国際大学講師）

# イスラームと社会主義

ムハンマド・イブラーヒーム・ハズマ

黒 田 壽 郎 訳

## は　じ　め　に

ここに訳出するムハンマド・イブラーヒーム・ハズマの「イスラームと社会主義」は、昭和60～63年度文部省科学研究費補助金にもとづく、「現代イスラーム社会の変容の総合的研究——思想的背景と現状」という研究テーマの成果の一部である。

本書の原題は、正確には「イスラーム社会主義と西欧の社会主義」であるが、アラビア語ではおさまりが良いが、日本語では語呂が悪いので、著者の主旨をくんでタイトルを簡略化した。これまでこの研究プロジェクトは、イラン革命に顕在化していく現代12イマーム・シーア派の政治思想と、ムスリム同胞団の動きに連なるスンニー派の政治思想の2つの流れを追ってきた。これらの潮流は、両派のもっとも伝統的な部分を代表しているので、十分な検討がなされるべきであることはいうまでもない。ただしそれらのみでは、現代のイスラーム政治思想の拡がりを捉えきれないことも明らかなのである。ナセル主義の台頭期から現在に至るまで、社会主義という枠組は、依然として中東の広汎な民衆の間で向上、発展のための重要な基礎と認められつづけている。したがって今回は、アラブ社会主義華やかなりし時代に、＜イスラーム社会主義＞を主張したスンニー派の思想家の著作をとりあげて訳出した。本書は小著ながら、この流れの理解には簡便、要をえたものとして評価の高いものである。

翻訳にあたっては黒田美代子氏、鈴木絃司氏の協力をいただいた。心から謝意を表する次第である。

1987. 2. 1

## 目 次

はじめに .....	iii
序 章 .....	1
第 1 章 資本主義 .....	7
第 2 章 社会主義 .....	17
第 3 章 イスラームの社会主義 .....	49
第 4 章 イスラーム社会主義の歴史的背景 .....	91
第 5 章 結 論 .....	115

序

章

慈悲ふかく、慈愛あまねきアッラーの御名において

それゆえお前たちは、正しき宗教につき従え。アッラーが人間を創りたもうたとき、神はこれを人間の本性となさったのだから。アッラーの創造には改変がない。それは正しい宗教だが、多くの人々が知らないのだ。

クルアーン

## 序 論

この世の主にして、慈愛あまねく、慈悲ふかきアッラーよ讃えあれ。また最初の社会主義者にして、この世に祝福をもたらさんがために遣わされ、人々を美徳に誘なわれ人々もその使者の価値を信じてその呼びかけに応えたような、最高の預言者に平安のあらんことを。

本書の目的とするところは、われわれが自分たちの国家に適用しようと望んでいる社会主義が、西欧的なものではなく、またある種の人々、特に西欧精神の産物以外は何の可能性も、長所もないと考えている人々が信じたがるものと対立するものだ、ということを明らかにすることである。筆者はこれらの人々にむかって、西欧と西欧の人々が深い眠りにおちいていた14世紀も昔に、イスラームがすでに社会主義をもたらしていたということを指摘したいのである。西欧は当時あってなきがごときものであり、世界は彼らについて何の注意も払っていなかった。

イスラームのもたらした社会主義は、人間の魂の本性にかなったものであ

る。それはまた人間の感情、感覚を抑圧するものでもなく、また一方の人々を滅ぼし、これらの同胞の損失をもとにして他の人々が生存し、社会主義を享受しうるといった人々の間の闘争に基礎をおくものでもない。イスラーム社会主義は公正そのものであり、人間性と魂の要求を考慮し、愛情と同胞意識に訴えかけるものなのである。クルアーンはいつている。

「信者はみな兄弟なのだ。」

またある伝承によれば、自分が好むものを自分の兄弟にも与えたいと思わぬ者は、信者といわれる資格がないのである。それはまた各個人が、その庇護の下で愛情と同胞意識に支えられながら、平和で安全な生活を営みうる機会を与えられるような社会主義なのである。

イスラーム社会主義は、ムスリムたちが心の中でその実現を夢みているような、非現実的なユートピアではなく、ムスリムたちがかつて実際に彼らの社会の中で適用した制度なのである。そしてこの利点は、ムスリムのみではなく、イスラーム世界に住む非ムスリムによっても大いに享受されたのであった。クルアーンはいつている。

「アッラーは、宗教の問題でお前たちに戦いを挑んだり、お前たちをお前たちの土地から追いだしたりしないような人々にたいしてまでも、彼らに親切なふるまいをし、彼らを公正にとり扱ってやることを拒んでいる訳ではない。」

この目的をはたすため筆者は、社会主義者の数ほどもある多くの社会主義理論から、いくつかの西欧理論をとりあげ、その最も重要なものについて論及することにした。また社会主義は資本主義の1つの結果である関係上、後者についても若干論及した。かくすることによって筆者は、イスラーム社会主義と西欧社会主義の比較を行なったが、この双方について熟知しないかぎり、真の比較は成就されえないだろう。

またこれらの理論について言及した他の目的は、これらについて名のみ知り、内容を知らずに賛成、反対論を唱えている人々に、これらの何たるかを



知ってもらうためである。筆者は主題をもっぱら経済的側面にのみ限ったが、これは経済的要因が、政治的、社会的状況に最も大きな影響を与えるという通念に従ったまでのことである。時おり筆者は経済的要因から遠ざかり、話題を他に移しているが、これはその問題を明白にする必要がある場合のことである。

以上が筆者の意図の概略である。「私の試みたものは、私に可能な限りの改革である。おのがすべてをあげて信ずる全能の神よ、私を嘉し成功を与えたまえ。」

著者

# 第 1 章

## 資 本 主 義

資本主義とは1つの政治経済理論であり、生産における個人資本の利用を意味するものである。この制度の下においては、労働者は資本の分け前にあずかるのではなく、給料を得るために労働に従事する。資本はその利益を所有したり、損失を補なう1人もしくはそれ以上の個人に属している。この2つの場合、いずれにおいても労働者の賃金には影響がない。

## 資本主義の発達

ヨーロッパに封建制度があらわれたのは、紀元5世紀に西ローマ帝国が崩壊し、ヨーロッパの政治的、経済的統一が崩れさった後のことである。封建主義者のグループは、周囲を農地にし、独立して自給自足の生活を営んでいた。これらのグループは、彼ら独自の法律と伝統をもっていたが、その富の規準は農地の所有にあった。封建制度は、永久に従属的性格を保持しつづけるという明瞭な特色を持った生産方式からなりたっていたのである。そしてこれは、直接生産者が労働もしくは現金あるいは現物によって、彼の領主あるいは主人にある一定の経済的負担を支払わねばならぬ制度として知られている。

封建制度の根本的基盤は、

- (1)農民の土地所有者にたいする永久的従属性。
- (2)農民の所有者にたいする、以下のごとき債務。
  - ①領主の土地における1週1日の自由を得るための強制的労働。
  - ②一定の期間の自由を得るための強制的労働。
  - ③慶祝時、祭日等に農民から領主に贈られる贈答品。
  - ④領主の挽臼で穀物をひき、彼の搾り機でぶどうをしぼること。
- (3)領主は、農奴達が耕すべき土地の面積、彼らに要求される労働量、税金額を決定した。
- (4)領主は、法律が存在しなかったため、自分の気紛れに裁判を行なった。

以上が12世紀の終りまで続いた封建制度の基本的柱である。この制度の発生と終焉の時を規定することはできないが、これは人間社会の発展の一時期を代表しているものである。

この制度は、自ら封建制度を実施し広大な領地を所有していた教会に、全面的な支持をうけていた。教会は、この制度にたいする非難、その効用、価値にたいする疑惑を、すべて宗教にたいする攻撃、教会の権威にたいする脅威とみなしていたのである。

しかし封建制度を終らせるために、きわめて重要な役割を演じた、1つの要因が存在した。それは商業の高揚と発展であり、とりわけそれが非常に重要な地位を占めるにいたったことである。その後にはやってきたものが十字軍であるが、これは西洋と東洋とを結ぶ掛け橋となったのである。東洋はその頃一層進歩していたので、西洋はこの結びつきにより利益を得、資本は増加しはじめた。そして商人、投機家、銀行家たちが近世の開拓者となったのである。ついで地理上の発見、発明がこれにつづいたが、これらは変化の傾向をより速やかに、またより強める役割を演じた。その結果商業によって利潤をあげた新興の中産階級と、絶対的、専制的君主政体を作りあげていた封建主義者たちの間に衝突が生じたのである。しかし激しい闘争の後にブルジョワ階級（中産階級）は権力を掌握することができ、近代国家を創設していたのである。

## 商 業 理 論

16世紀になると国家が形成されるようになった。1492年スペインはアメリカ大陸を発見し、アメリカからスペインに金が流出しはじめて、スペインの栄光はその頂点に達したのである。それとちょうど同じ時期に経済的分野では、商業理論として知られる新しい政治政策の最初の徴候が姿を現している。それは国家の真の富がそれによって測られる2つの金属、つまり金と銀の価

値を認知することに基礎をもつものである。すべての国家は、これら2つの金属の最大量を所有しようとしてたがいに抗争をはじめ、またこれらの輸出を禁止する法律を制定した。同時に彼らは、彼らの海外貿易とその発展にそれまで以上の注意を払うようになり、また輸出入の価格差を金貨でうけとるために、輸入よりも輸出に重きをおくように努力した。この制度の維持のために、輸入品にたいしては高い関税が課せられたのである。諸国家はまた工業を重視し、自国が自給自足でき、余剰生産品を他国に輸出できるように、工業の発展をうながすよう努力したのである。このように商業理論の最も重要な目的の中には、国家貿易の進展、貿易バランスの改善、外国貿易における独占体制の確立の努力、そして自国商業の海外進出のための商業船隊の建造といったことが含まれている。

商業理論は、外国市場における貿易特権を獲得し、また種々の原料を確保するために、商人たちが海外事業を保護する必要があった関係上、国家の介入を容認しているのである。

この商業的傾向は、原料産出国を搾取、領有することをいささかも躊躇しなかったし、最低価格で買い、最高価格で売ることを奨励した。

この商業理論は、富の蓄積を手段として、国家を強力にすることを狙っていた。だがそれは、まず何よりも商人階級の利益を優先させていたのである。

この商業政策は17世紀末近くに頂点に達している。しかしヴォルテールやルソー等が登場して自由を唱え、それを賞讃した時に、この政策は傾きはじめてのである。彼らの呼びかけは経済学者たちにも影響を与えた。イギリスのアダム・スミスやフランスの重農主義者達は、この商業理論に反対の声をあげ、自由貿易と関税障壁の全廃をよびかけたのである。彼らのスローガンは、“働かせよ、通過させよ”あるいは、個人の確立のために“万人をして働かしめよ”であった。

## 自由の理論、あるいは個人の理論

この理論の基礎は、あらゆることがらにおいて個人に全面的自由を認め、個人の問題に関して国家の干渉を制限する点にあった。この学派は、国家の機能というものが内政、外政上の安全を保障することに限られるべきであると確信していた。この学説の提唱者は、教会、国家、社会といえども、個人が進歩し、利益を求めるための道をとぎすことはできないし、完全かつ十分な自由は、個人をして彼の性向に応じ、彼の力、技量、能力を発揮せしめる点において、あらゆる人間にたいして有効であると主張した。この理論は、あらゆる個人にたいして、彼が望むところの生産、消費、処置を可能ならしめる財源の所有権を認めている。この理論は、生産、資本、資本金管理とその投資、生産品の販売、プランニング、行動の自由といった問題に関する、個人の経済的自由の増大の必要性に基礎をおいているのである。

この理論の支持者達によれば、個人は、もしも彼が生活のあらゆる分野において、労働のあらゆる局面において完全な自由を享受し、同時にあらゆる公式的、宗教的、道徳的、法律的、社会的制約からの自由を享樂しない限り、社会に最高度の奉仕を行ない、最高の利益をもたらすことはできないと考えているのである。

この理論は、個人的問題にたいする専制的政府の過度の干渉の反動として、18世紀にひろく拡まったのである。

イギリスの哲学者ハーバート・スペンサーを含む数人の著作家たちはこの理論を擁護している。スペンサーはいつている。

「国家は、利己主義と搾取に限界を設ける必要がある場合以外に、個人の問題に干渉すべきではない。これ以外の干渉は自由を侵害するものである。」

政治経済学の祖であるアダム・スミスも、この理論を擁護していつている。

「この理論は、生産を高め、需要と供給の法則に従って価格を定着させるのに役立つものである。」

このことは、商業理論の支持者達が国家に依存し、その干渉を容認しているのに反し、自由理論の信奉者達は個人的問題にたいする国家の干渉をうけ入れず、個人をあくまでも神聖視したことを明らかにしている。そして資本主義の基礎となっているのは、この後者の理論なのである。自由の理論は、資本主義を支える多くの柱の1つなのである。

## 資本主義の出現

商業は、16世紀から18世紀にかけて、ヨーロッパの新興国家の経済的パターンであった。ただし資本主義は、商人階級がより多くの利潤、占有、ならびにより強力な社会的影響を達成する道だと判断して、商業における完全な自由の原則を採用するにいたった19世紀中葉の、産業革命到来までは優勢とはなりえなかった。その後19世紀中葉に、ヨーロッパ全土にひろがった産業革命が到来した。これはブルジョワジーの力を強める一助となった以外に、資本主義をして圧倒的な（帝国主義的な）力をもつもの、地上の全支配権を握るために国境をも破壊してしまうものに発展せしめることに寄与したのである。

資本主義制度は、18世紀に経済学者によって詰められた自由理論の原理の結果として、19世紀前半に姿を現した。産業革命は、一般に生産手段に関して著しい進歩をもたらし、家内で労働し、その生産品を自分の村や隣り村で捌いていた手工業者をなくしていった。小さな、隔離された工場の所有者、わずかな資本しか持たぬ商人の生活は、次第に困難なものになっていった。村に住んでいた職人達は町に移住し、大工場所有者の賃金労働者とならざるをえなかったのである。同様に僅かな資本しか持たぬ商人は、代理店主あるいは産業資本家の雇い人になる以外に道はなかったのである。このようにし

てブルジョワ階級は、産業革命がもたらしたすべてのものを独占し、その影響力と力を拡げていったのである。その結果外国市場が要求する生産物の生産が増加し、彼らは利潤をほしいままにあげうようになった一方、彼らが外国から得ようと望んでいた生産のための原料を大量に入手することができたのである。かくしてさまざまな国の手により、海外市場独占の組織化がはじまったのである。これと原料産出地の独占は、ただちに植民地主義に通ずるものであり、結局は第1次世界大戦勃発にまでつながっていった。

## 資本主義制度の原理

資本主義制度は、自由経済の一般理論に基礎づけられている。資本主義制度がその権威を強めたさいに、その顕著な特徴はつぎのような事実となって現れたのである。つまりそれは、競争の場において利潤追求のため独自の企業を持つ人々にとって、完全な自由を許す経済組織だということである。資本主義は、以下に要約するような一定の原則を採用している。

### (1)個人的所有権

私有権には2種類ある。第1は、個人的使用のための生活必需品、もしくは衣類、家財道具といった消費物資の所有権。第2に、機械、土地、原料といった生産手段の所有権。資本主義制度は、個人がこの2つの範疇に入るものは何でも所有しうると認めている。私有権は資本主義の礎石なのである。

### (2)企業施行権

1人、それ以上の個人は、彼らが望むいかなる分野においても、自分達が所有するあらゆる生産手段を行使しうる権利をもつ。損得の結果は、ただ彼ら個人に関係するのみなのである。



### (3)生産を促す利潤

人間は、彼自身の利益が確信できた時働き、生産する。つまり、生産を促すものは個人の利益であって、一般的利益ではない。

### (4)個人間の競争

資本主義の支持者達は、生産者間の競争が商品の価格を引き下げ、同時に生産を改良する原因となっていると信じている。各生産者は、自分の製品が大量に売れることを望んでいるが、これは他の同種の製品と比較して、価格が廉価で品質が優れた場合にのみ可能になることである。このように、競争によってはじめて平衡と廉価が達成される。

### (5)実業家と労働者

資本主義下で商業活動にたずさわっている人々は、すべて次の2つの範疇に入る。

⑧商業もしくは工業を設立し、その監督にあたり、その責任をとる実業家。

⑨固定給で働くが、企業体の販売低下とは無関係の賃金労働者。

いかなる労働者も損失による影響はうけないのだから、売上高が上っても賃金値上げを要求する権利はない。公正さは、商、工業の利潤が、損失を負担し、危険に身を曝している者に帰すべきであると要求している。

(6)資本主義は、経済の自然な法則の力に依存して、不確定な経済的欲望を社会の利益に適合させるものである。資本主義機構は、競争の場におけるあらゆる制約から免れた資本家の努力を基盤にしている。つまり資本主義とは、目標として一定の社会的目的を持ってはいないのである。

(7)資本主義は、商業、工業問題に関する国家の干渉を認めない。これによれば、国家の任務はただ国の内外の安全を保障し、個人の自由を維持するためのものではない。

## 第 2 章

# 社 会 主 義

## そ の 発 生

社会主義理論の完全な歴史を書こうとするならば、まったく性格を異にし、時間的にもさまざまな時代の多くの思想家たちについて言及しなければなるまい。われわれは中国の孔子の中にも社会主義を見出しうるし、ギリシャのプラトンやクセノフォンの中にもこれを見ることができる。さらに初期キリスト教会の司祭たちの経済論、あるいは弾圧下の、もしくは中世のキリスト教1分派の共産主義的生活の中にもわれわれは社会主義を見出しうるだろう。社会主義の歴史は、中世に作られたキリスト教会の私有権に関する理論までをも含むことになるのである。

この歴史は、近世の初頭、16世紀にあらわれた政治哲学に関するユートピア的研究までも実例として提出することになるだろう。

経済思想史家たちは、マルクス以前の社会主義を“空想的社会主義”と呼んでいるが、それはこの理論が、正確な科学的分析に依拠せず、労働者階級を貧困化し、抑圧していた、当時の経済制度の害悪を一掃しようという欲望に端を発していたからである。社会主義の理念は、これらの思想家たちの苦悩の叫び声であり、それを媒介にして社会の大多数の者が苦しめられている社会悪が浮き彫りにされたのである。これらの古い社会主義的理念は、すべて理論と想像に依存しているのである。哲学者は空想的社会、理想都市を想像し、そこに彼の社会主義的理念を適用したのである。

社会主義的理念は最も古い時代にまで遡られうるのだが、それが科学的基盤のもとに研究されるようになったのは、19世紀に入ってからのことである。この世紀に入って初めて、社会主義の原理はカール・マルクスの手により、世界の人々の知識の対象となった。実際科学的社会主義というものは、産業革命がおこり、それが資本家階級と労働者階級の対立を決定的なものとし、これまでに述べてきたような生産手段の私有を前提として、私的利益が経済

活動ならびに自由競争の刺激剤であるとみなし、国家の干渉を拒んでいる完全自由理論の諸悪を明らかにして後に、はじめて登場しえたものなのである。

科学、工業の分野で諸国民により達成された進歩は、古い経済体制の中に深刻なともいえる発展をもたらしたのである。商工業の急速な発達、諸国民に安息と満足を与える余地を残さず、むしろ彼らを他国民の憎悪と反感の対象としたのである。工業の偉大な進歩の結果、工業資本家たちは巨万の富と、巨大な権威を手中に収めることができたのである。しかし消費物資の生産高は著しく増加したにもかかわらず、多くの人々は相変わらず低い水準のきびしい生活をつづけ、めぐりあわせの悪さを嘆かなければならなかった。なぜならば工業資本家は、その注意をもっぱら貧しい労働者の搾取にむけ、自分たちの直接の利益しか考えなかったからである。こうした状態がつづき、中小企業が危機に直面し、ついに小企業主たちは破産して雇用労働者の列に入ってしまった。これに反して大企業は、より一層集中化の傾向を深めていったのである。資本はひとにぎりの人々の手中に握られ、人々の間には不満が増大していった。いたるところに嫉視羨望が見られ、種々の関係は悪化して、大変な悶着がもちあがる気配が明らかになってきたのである。

政治思想家たちは、こうした状況は資本家たちが資本を作るさいに犯した愚かなあやまちによるものであり、こうした難問の解決は以下のような政策をとらぬ限り不可能だと考えたのである。

(1)資本の総合的管理。

(2)私有権の範囲の限定。

(3)個々の関係、特に資本家と労働者の関係を混乱、不統一から守るため国家が直接介入する。

かくして社会主義的傾向が強まり、その影響は拡まって、支持者も多くなり、党派の数も多くなっていく。政治的指導者の考えによれば、国家のとるべき決定的、積極的行動は、生産、分配の源を押さえ、それを直接統制することであった。

以上のことはすべて、資本主義体制の軸である資本は、個人的な力であってはならず、社会のすべてがその創造と発展に参加しているのだから、全体的な力とならねばならぬことを明らかにしている。資本の所有は、幸運にもそれを手中に収め、統制している少数の人々に限られてはならず、国家の統制下に入るべきであり、個人的所有の代りに国家的所有が行なわれる必要がある。なぜならば国家は、社会全体の利益について考慮するさいには、より有能であるからである。

労働者階級についていうならば、彼らは19世紀初頭まで選挙権もなければ、労働組合を作る権利も与えられていなかった。当時の賃金はかなり低く、労働条件は最悪であった。事態は、彼らが直面しなければならなかった非雇用の期間にはさらに悪化し、富を掌握し、何不自由なくぜいたくな暮らしをしている実業家にたいする不満は一層強まった。労働者はこういう事実を観察し、この富を作ったのは自分達であるが、彼らはこの富を奪われているということをはっきりと知ってしまったのである。

産業革命初期のイギリスの労働者階級の実態を生き生きと描写している、ジャワハラル・ネルーの言葉は、おそらくこれを示すのに最適のように思われる。彼はいっている。

「一般の人々は、工業の発展にいたく心をうたれ、農地を離れて工場に赴いた。そこでは産業労働者階級が誕生したが、労働者たちは何の衛生施設もない、たいていは炭坑の近くにある汚ない町々に群らがり住むことになった。これら労働者達は急速に変貌した。彼らは新しく、進んだ知性を身につけた。彼らは、飢えにかられ、工場に群をなして転がりこんできた農民たちとは、格段の差異があったのである。イギリスはこのような工場を最初に作りあげた国であり、したがってこの国はまた、産業労働者階級を持った最初の国なのである。」

これら工場の設備は驚異的にといってよいほど汚なかった。そして労働者住宅といえばそれ以上だったのである。工場においても、家庭においても、

労働者の生活を見舞ったものは最悪の貧困、最大の悲惨であった。女、子供は想像を絶する長時間労働を強いられていた。こうした事柄にもかかわらず、こうした労働者住宅、工場を特別の法令を適用して改善しようという企ては、すべて工場所有者たちの強力な反対に出あったのである。

所有者たちはいったものである。

「これは所有権にたいする、恥ずべき干渉ではないか。」

彼らはまたこれを理由にして、すべての所有者に労働者住宅に衛生施設を完備させることを要求した法律にまで反対したのである。

哀れなイギリスの労働者達は、栄養失調と限界以上の重労働により徐々に死へと押しやられていった。ナポレオン戦争の後この国は極度に疲弊し、労働者がとりわけ苦しんだところの経済危機に見舞われたのである。労働者達が自らを守り、自分達の状態を改善するために、労働組合やシンジケートを作りたいと願ったのは至極当然のことである。しかし彼らはそれらを結成することを禁じられていた。イギリスの支配階級はフランス革命に非常なおそれをなし、法律を作ってあわれな労働者たちが集会を催して自分達の諸問題を討議することを禁じたのである。法律も行政も、この悲惨な労働者をないがしろにし、権力、影響力を握った者の利益に奉仕していたのである。

しかし労働者の集会権を奪った法律は、彼らの状態を少しも改善せず、むしろ彼らの怒りをかき立て、彼らを不屈にした。労働者たちは秘密結社を作り、人目につかぬところに集まって自分たちの闘争を最後まで遂行することを誓ったのである。彼らの活動が露見すると、彼らは法律を犯した罰として重刑に処せられているのである。しかし時おり激昂したさいには、労働者たちは機械を破壊し、工場に火をかけ、主人を殺したりした。

そしてついに1825年、労働者の集会を制限した法律は一部破棄され、ふたたび労働組合が結成されることになったのである。これらの労働組合を結成したのは、高給を得ていた熟練工であり、大部分の未熟練工は長らく未組織のままであった。このようにして労働者の運動は、団体交渉によって彼らの

状態を改善するために組織された、企業別労働組合を形成するようになっていった。

労働者の唯一の効果的な武器は、ストライキ権であった。これが強力な武器であったことは否めない。しかし工場所有者はさらに破壊的な武器をもっていたのである。つまり彼らは、労働者が降伏するまで彼らを飢えさせることができたのである。したがって労働者階級の闘争は、労働者側のおびたましい犠牲を前提に戦われ、勝利はすぐにはやってこなかった。投票権すら持っていなかった彼らは、議会には直接の影響力を及ぼしえなかった。非常な反対をうけて通過した1832年の大改革法案は、ただ豊かな中産階級に投票権を与えたのみなのである。投票権を奪われていたのは労働者ばかりではなく、中産、下層階級もしかりであった。この時マンチェスターの工場所有者の中に、1人の人間性あふれる人物があらわれたが、彼は労働者階級の窮状を見てたいへん心をいためたのである。この人物こそ自分の工場において大きな改革を取り入れ、また労働者の状態を改善したロバート・オーエンなのである。彼の行為は工場所有者の間に物議をかもした。だが彼は論理的に彼らを説得し、工場主たちが自分の政策を採用するよう極力努力した。イギリス国会が、労働者を貪欲で利己的な使用者から守る最初の法律を発布したさいには、彼の尽力少なからざるものがあつたのである。この法律ははじめて9才以下の子供に、1日12時間以上働かせることを禁じている。この法律が通過したのは1819年のことであるが、この法律自体が時の労働者階級の怖るべき状態について明瞭な知識を与えてくれるのである。

“<sup>ソシアリズム</sup>社会主義”という言葉を最初に用いたのはロバート・オーエンであり、1830年頃のことだということである。

イギリスの労働者の状態は、ちょうどシュリー・ネールが書いているようなものであつた。それにもかかわらず労働者階級が、イギリスにおいて独立の、重要な政治的力となつたのは1848年の革命の時代からのことである。

このような状況の下では、反対の声があらわれ、抵抗が明瞭な姿をとるこ

とは避けがたいことであつた。反対は種々さまざまな方面からなされた。経済学者たちは経済情勢の呼び起こす悪を指摘し、これを軽減することを望んだ。同様に人道主義者たちは労働者の貧困による苦しみを軽減するため、なんらかの措置をとることを要求しているのである。こうした事柄は、イギリスのカーライル、ジョン・ラスキンの著作、ならびに諸外国の他の著作に明らかである。この思想的運動は、手段を選ばぬ富の蓄積のための闘争を、自由なキリスト教の理念、信仰に反するものだと考えていた宗教者たちの支持を得たのである。さらに地主階級は、すべての影響力は工業資本家に奪われたと感じていたし、社会学者は個人の利益、あるいは特定の階級の利益よりも先に社会の利益が優先すべきであると考えていたのである。

かくして資本主義が自分の地位を強めようとしているその時に、近代社会主義が登場し、発展することになったのである。近代社会主義と資本主義はたがいに相対立するものではあるが、それらは産業革命の共通の落し子だといえるのである。これら両主義が発展し、近代の社会的、政治的生活の最重要事となる原因には、この産業革命があげられるのである。

近代社会主義は一夜にして生じたものでもなく、また無から姿を現わしたものでもない。それは以前から理想的な形でではあつたが、理念として存在していたからである。空想的社会主義理論家たちこそは、彼らの後継者たちがふまえて立つ理論的基礎を置いた、社会主義の真の開拓者なのである。これらの空想的社会主義者たちは転換期にあられ、したがって新しい社会体制を作りあげるためのはっきりとした方法論をもっていなかった。彼らは人間性一般に呼びかけ、彼らの論理的教説によってそれが啓発されることを望んでいたのである。彼らは支配階級が自らその權威を放棄することなどありえないということに思い至らなかった。むしろ彼らは人類が、その教説を受け入れることによって全体的な繁栄、幸福を達成することができるよう、新しい、再編成された社会の必要を提唱する新しいタイプの人間の出現を必要としていると考えたのである。



問題は空想的社会主義理論のところでは足踏みしているのみではなかった。いく人かの先駆者たちは、実際に社会主義的精神がゆきわたっているような新しい社会を作る試みを行なっている。こうした人々は、実際社会主義者といえるだろう。彼らは空想主義的な机上の空論、理念ではあきたらず、これらの理念は実際に応用できると考え、それを実践しようと試みたのである。彼らはその企てに失敗こそしたが、自分達の社会に対する彼らの善意を十分に吐露しているのである。このようにして彼らは、社会主義の運動をたしかに一步前進させたのである。

しかし1つの勢力として認められ、脅威感を与えるような組織的社会主義運動がもたらされたのは、カール・マルクスとその友フリードリッヒ・エンゲルスの登場によってであった。彼らの思想は資本主義体制の体系的批判の基礎を作り、同時に歴史をその趨勢にうまく適応した新しい方法で説明してみせたのである。それは資本主義が必ず崩壊すると宣言し、労働者階級こそは社会主義への移行達成の担い手であるという評価を下して、彼らに希望の灯を与えたのである。

社会主義は、この歴史的段階に止まらず、なおもその活動と発展をつづけていった。そして現代においては、その学説、流派はさまざまに分かれているのである。しかしこうした多様性にもかかわらず、すべての社会主義学派は社会主義理論の本質を保持している。その差異は、理論の適用方法の差によって生じるのである。これらの学説のあるものは過激派となり、社会主義時代への移行は労働者と資本家が激しい闘争をおこない、前者が後者を完全に絶滅した後にしか実現されえず、このためにはあらゆるテロリズムも辞さないと考えている。これがマルクシズムであり、革命的社會主義である。

しかし中には、政府、議会によって行なわれる法的改良によって、徐々に社会を社会主義に移行させうると考える穏健社会主義もある。これら穏健派は数多くの流派に分かれるのである。

## 一 般 理 論

社会主義の発生、成長の歴史を簡単にのべた後に、いよいよすべての社会主義学派によって論議された社会主義理論の本質について検討してみよう。これら諸学派は、つぎの諸点において他と自らを異にしている。

- (1)各個人間の事実上の平等の実現。社会主義者たちの意味するところは、政治的もしくは法的権利の平等ではなく、経済的、あるいは所得手段の平等に他ならないのである。
- (2)全体的もしくは部分的私有権の破棄。社会主義によれば、所有権のシステムこそは病の根源であり、そこから退廃が発生し国全体に及ぶいまわしき中心なのである。したがって国家が個人の肩代りをし、その行政、管理はその社会主義国家固有の制度にもとづき、全国民を代表する委員会、もしくは各地方、州に委ねるという条件の下で、あらゆる私有権を廃棄させる必要が生じてくるのである。私有権の廃止はたんに経済機構の問題であるばかりではなく、政治機構の問題でもある。なぜならば現在まで人間を虐げてきた政治的、道徳的、知的奴隷化の原因のほとんどが、すべてこの私有制度に起因するものであるからなのである。
- (3)生産、分配の国家統制。この意味は、国家が個人の努力の肩代りをし、数人の個人の手に集中され個人的な力に属している資本を、国家によって統制され、公共善のために利用される集団的力に譲渡するということなのである。
- (4)人類にたいし、多くの奉仕、援助を行なう。この実例には文盲の一掃、教

育の普及と授業料の廃止、医療の国営化と障害者、病人、老人への奉仕、保健制度の確立と社会的連帯の強化等があげられるが、貧民の貧困、疾病による被害を軽減し、その苦しみを除去するために行なわれることは、すべてこの範疇に入るのである。

- (5)社会主義国家の建設。これこそ社会主義理論の政治的目標なのであり、かくして社会主義国家は、土地、森林、鉱山、工場、その他のあらゆる公共物といった、富と呼ばれるすべてのものの唯一の所有者になるのである。国家はまたその利用、管理にさいしても種々の統制を行なう。ただしこれを達成するには労働者階級に依存し、それが権力を掌握することを可能ならしめるために政治的に組織しなければならないのである。

## 社会主義の諸流派

すべての社会主義流派は上述の原理に同意している。しかし他の問題に関しては、彼らは大いに意見を異にしているのである。このような小著においてわれわれが知るべきことは、これら諸流派の考え方がそれぞれその実現が望まれる経済的平等の問題、ならびに私有権廃止の重要性にたいする認識の仕方、あるいは社会主義社会達成のための方法論の問題について、意見を異にしているということであろう。平等に関してはさまざまな社会主義的学説がある。たとえばある一派は“数学的平等”といわれるものを標榜するが、これはすなわち、社会内の個人に平等な基礎の上にたちながら利益の獲得手段を数学的に分割するということなのである。

他の一派は“努力の平等”、つまり各個人が社会に必要な利潤をあげるため、他と同じ努力を払うべきであるという主張を行なっている。第3の派は“共產主義的平等”を唱えているが、これは“各個人がその能力に応じて生産を行なう”という重要な原理にもとづいている。第4の流派は“生産手段

の平等”を信条としているが、これは各個人が技術的、科学的のいかんを問わず平等に生産手段を利用する機会を与えられているということなのである。この流派は社会主義の根本理論に最も近いといえるであろう。なぜならばこの派は分配にさいして、有名な原理“労働に応じた報酬を”にのっとっているのだから。これは生産が、すべての個人の需要に追いつかぬという認識から出ているのである。そしてこの点が社会主義者と共産主義者を分かつ根本的な相異点なのである。共産主義理論は個人の要求に応じて分配の問題を考えているが、一方社会主義理論は、あらゆる個人にたいして一般的利益の中から、彼の労働、努力に応じて分け前を取ることを許しているのである。

いいかえるならば、生産の分配において共産主義が主張するのは生きる権利であり、社会主義の場合には、怠惰を寄せつけぬため個人の努力、労働量の理論にのっとっているのである。

社会主義者たちは私有権廃止の問題についても、意見を異にしている。ある者は生産に利用されている資本、たとえば土地、工場、鉱山、輸送手段等のみの私有を禁じ、個人は個人の消費財を私有しようと主張しているが、彼らは資本の社会化説の支持者と呼ばれている。また他は農地の私有のみを禁ずる立場をとっているが、彼らは農業社会主義者と呼ばれている。第3の立場は農地と建造物の私有を禁じているが、これは国民社会主義者の立場である。またサン・シモンの信奉者たちは、相続権の廃止のみを主張している。また公共善の立場に抵触するものの私有のみを否定している社会主義者もいる。

社会主義者がその目標を達成するためにとる手段としては、おおむね原理的に2つに区分することができるであろう。つまり穏健派と急進派である。ついでわれわれはこの問題を検討することにしよう。ただし現代の初期に登場した空想的社会主義が現在の社会主義の基礎となっている関係上、われわれは本論文を完成するためにこの社会主義から論じていく必要がある。

## 空想的社会主义

空想的社会主义は、古代哲学者の間ですでに姿をあらわしている。しかしここでわれわれが問題とすべきものは、現代の初期に登場し、発展をつづけて社会主义を招来せしめたものなのである。16世紀以降、あらゆる分野において改革を意図する哲学的思索が行なわれた。しかしこれらの理論の提唱者たちは、その研究が禁止され、あるいは自分たち自身が重く罰せられることを避けるために、声を大にして彼らの見解をのべることができなかった。そこでこれらの人々は、彼らの研究において自身の意見をのべるために架空の人物を用いているのである。その結果政治、社会、経済問題に関して卓抜な理論、理念を含む研究があらわれてきたのである。これらの研究のほとんどは、キリスト教がその初期に作りあげた共産主義的、社会主义的理論に基礎をおく社会主义者、共産主義者たちの見解をめぐるものであった。こうした理論を祖述した人々の中で、最も傑出した人物はトーマス・モア卿であったということは、ほとんどすべての歴史家、思想家が認めているところである。1516年に出版された彼の“理想郷”は、社会主义者の最大の夢と評価されている。彼につづく他の思想家については、のちに若干しるすことにしよう。

### トーマス・モア

彼は16世紀初頭のイギリス王顧問官であった。彼はカトリックを信じていたために処刑されたといわれている。彼は1516年にラテン語で“De Optimo Statu, deque Nova Insula Utopia”（新ユートピア共和国の行政）という本を書き、その中で彼は、ラファエル・ヒスロデイというあるポルトガルの冒険家の口を通じて、理想郷が作られている島の話をした。だが著者は

ここで中世経済が崩壊しはじめ、多くの難問がもちあがっていた16世紀初頭のイギリスの描写に、多くの紙数をさいているのである。羊毛貿易によって巨大な富が蓄積され、農民たちは多くの利益を産み出す羊の群れに席をゆずるため、農地からおい出されはじめたのであった。モーアは彼の研究の中で、イギリスにおいては個人の私有権と、少数者の利益のために多数から生活手段を奪い取ることが病弊の源泉となっている、とのべているのである。ヒスロデイの口を通してモーアはいつている。

「所有権が私有であり、富がすべてのことがらの尺度である場合、社会が公正な政府をもち、繁栄を享受することは難しい、いや、ほとんど不可能のことである。」

モーアは彼の“理想郷”の中で、労働は強制的であり、何人といえども肉体的に不可能か、あるいは病気の場合を除いてはそれを免れることはできないと主張している。労働は日に6時間、医療費は無料、教育はすべての人間に強制的に行なうということも彼の主張である。彼の社会においては宗教的寛容がゆきわたり、男女は平等にとり扱われている。彼はまた犯罪防止、犯罪人の矯正、監獄の改良といった新しい提案をしている。農業に関しては、彼は島をすべての人が働ける等しい面積の耕作地に分割し、穀物は共通の倉庫に貯えて、一般の人々の必要とする量を取り出し、その余は不慮のさいに貯えるのである。

### アンリ・ド・サン・シモン

アンリ・ド・サン・シモンは貴族であった。彼はアメリカの独立戦争に参加し、自分の眼で貿易商や農民達が努力して新しい民主的な共和国を作りあげたのを目撃したのである。彼の考えによれば、人々はすでに歴史的に役割を果たしおえた伝統的キリスト教の代りに新しい宗教をうけ入れ、同胞愛の精神をもって行動し、すべての努力を「一般の人々のために道徳的、物質的環境

を直接的に改善すること、しかも可能な限り速やかにこれを行なうこと」に向けるべきである。もちろん彼は近代的な意味における社会主義者ではなく、特権的な社会的地位、あるいは富というものは社会にたいする個人の真摯な努力の報酬であるから、諸特権、私有権はあくまでも留保されるべきであると考えていた。しかしサン・シモンの政治思想への重要な寄与は、彼がその理論において、国家の真の仕事は人民のための繁栄を達成することであると述べている点にある。彼はひとみな誰もが、生活にさいして機会を均等に持つべきであると考えていた。しかし資本家たる者は、自分の所有が社会的諸責任に抵触する場合には、その利益を放棄すべきであると考えていたのである。要するに彼の理論によれば、彼がキリスト教的封建制度と呼んでいる古い経済的、社会的体制は崩壊の一途を辿り、新しい産業国家に席をゆずりかけていたというのである。そしてこの新国家は、人生にとって有用なものを作りあげてことを社会的目標としているような、科学者達の手によって行政が行なわれるようになるのである。サン・シモンは、新しい産業の生産能力を眼のあたりにして深く感動したのである。彼の計画は経済的要因を人間的環境の下に従属させることでしかなかった。彼は持たざる者を奮い立たせようとはせず、他の階級を理性で説得することに努めたのである。

マルクシズムは、生産、分配の有能な管理はいつの日にか政治的政府の存在の肩代りをするだろうという、サン・シモン理論を借りうけている。しかしこれを実行に移す時期については、マルクスはサン・シモンと意見を異にした。

サン・シモンは科学の発達と、それが作りあげた実際的な変革についてのべ、諸時代を通じて人類、社会の歴史を一貫して説明しようのような、独自の歴史的発展の法則を作りあげようとしている。このような点において、彼はすでにマルクス、エンゲルスの存在を予想していたのである。

## シャルル・フーリエ

彼はフランスの空想家である。彼の職業は巡回商人であったが、彼はその著作の中で、ある種の人々が退廃と瞞着に身を委ね、貪欲と嫉妬からものごとを行なっているといい、そして社会にみちあふれる諸悪、貧困は現行の社会制度に起因するといっている。フーリエは、もしも人間が本来の性向に従うことができたならば性善なのだが、現行の諸制度が彼らを犯していると考えていた。彼はいつている。

「貿易は善を勧めるよりも悪を勧める。個人の富を求める者は誰しも、他人の利益を攻撃するのだ。この全く必要のない対立は、ただ越権と追従を産むばかりなのである。」

こうした考えは、フランスにおいて激しい反響を呼んだ。フーリエは、人類が繁栄していくためには、協力的な社会が作られることが先決条件であると唱えたのである。この社会において人々是一方において彼自身の利益をあげ、他方において彼自身の創造的表現の道を見出せるような労働の機会を等しく与えられるべきなのである。彼の意味するところは、もしも富が協力的な手段で獲得された場合、それは悪ではありえず、また万人が生活のための最低の必需品をいつでも手に入れうる保証が与えられるべきだということなのである。そして彼の提唱する協同社会の一々の人数は1,800人を超えてはならず、労働者と技術者から構成されるべきであった。フーリエはさらに、農業、天然資源の開発にも科学的技術が用いられるべきであると提言している。彼はまた仲買業、仲介業のような非生産的職業の廃止を唱えているのである。

フーリエの考え方に影響をうけた一群のアメリカの作家達は、彼の教条を基礎にしてコロニーを作りあげている。しかしこれらのコロニーの運命は、道徳的教訓によって社会を作りあげようとすることの無益さを証明する以外



の何ものでもなかったのである。

## ロバート・オーエン

オーエンは1771年に生れた。そして10才の時に繊維商人の許に働きに出て、20才の時に紡織工場の支配人になった。彼は当時の最も有能な産業資本家の1人であり、大きな富を貯えたのである。彼は宗教については自由な意見をもっており、また人格を規定するさいに環境の力を重要視するといった点で一家言をもっていたのである。19世紀初頭に、人間の性格の健全な発達に基本的に必要なものは文化、教育、賃金、労働条件であると主張した彼の考えは特異なものであった。ナポレオン戦争につづく不景気の時代にオーエンは、彼が労働者の雇用に関して取り入れた数多くの改革のおかげで、巨大な利益をあげていたニュー・ラナークの有名な彼の工場を基礎に、協同社会の設立を提唱したのである。彼は人々のために衛生施設を立て、必要な品物を安く買えるために特別な店を作り、子供達の面倒も見る看護婦学校を建てた。さらに彼は、労働者の間にひろまっている飲酒、不節制といったさまざまな悪を一掃することに努力を集中し、また特に基金を作って病人の治療、老人もしくはは就業中事故にあったり身体障害を起こしたりした人々の面倒を見るようにしたのである。1819年の工場法の通過には、彼の教説が大いにあずかって力があつたのである。オーエンはまた労働者に年金を与え、失業補償金を与えた最初の人でもあつた。彼は協同体制の完全な規約を編み出し、それを適用してみせたのである。彼は300人から500人の労働者を選んで、居住に相応しい新しい建物に住ませた。彼らは協力して労働、生産に当たることになるが、そのさいの協力の動機の中には利得、利益という考えが一切入ってはいないのである。彼は自分の協同理論をアメリカで実験するために、1825年ある1州に1単位の協力社会を創設したが、この実験は失敗し、1829年彼は貧しい身なりでイギリスに戻ったのである。

当初オーエンは、イギリス政府から若干の援助をうけていた。シドモス卿は彼の書『新しい社会への視野』を多くのヨーロッパ支配者達に送付し、この書に関する彼らの意見を求めている。しかし彼は、彼を危険な煽動家とみなした支配階級にすぐに攻撃され、一方彼を反動と評価する改革者に非難されたのである。しかし彼の教えは労働者の間に拡まっていった。オーエンは、もしも人々が共通の利益のために協力し、私有権と私的利得を廃して自治的な農・工業社会を作りあげるならば、彼らは巨大な工業生産力から能うかぎり多くの利益を獲得しうることを知っていたのである。

オーエンは、工業における機械使用の結果生ずる問題に関して、最初に理解を示した存在であった。彼はこれが失業を産み、危機を呼び起こすことを知っており、さらにこれら失業労働者に、何か仕事を与える必要についてもすでに考えていたのである。

オーエンは政治、社会、経済思想史上重要な存在であるが、それは彼が問題の性質を工業生産と結びつけて考えたからである。機械の使用による過剰生産は一方では過剰供給を、他方では失業を産むということを、彼はつとに気づいていた。この唯一の解決法は具体的に市場を拡大する以外になく、このための最良の道は労働者の賃金を上げるに限る。オーエンは、この賃金値上げは不可能であり、また自由競争の中ではこの重要性は決して理解されないであろうと考えていたのである。彼はもしも生産の拡大が繁栄の手段であるならば、是非とも社会主義が採用されるべきであると感じていた。

オーエンの著作は偉大な果実を宿していた。彼は首尾一貫した社会主義哲学を作りあげたのである。そして実際、“社会主義”という言葉を初めて用いたのは彼であるといっても過言ではない。彼は永くこそ続かなかったが、非常に大きな運動を起こした人物だった。彼の考えは、1844年に端を発した消費者協同組合という現代的運動の根拠ともなっているのである。

## マルクス主義

マルクス主義もしくは革命的社会主義は、社会主義を科学的な基礎の上に打ち建てようと試みたカール・マルクスに帰せられる急進的社會主義の1派である。彼は人間間の諸関係を、経済的な基盤から説明したのである。

カール・マルクスは1818年ドイツのトリエーヴェで、キリスト教を信ずるユダヤ系の家庭に生れた。彼はリヨンとベルリンの大学で教育を受け、哲学、歴史、経済、法律学を学んだ。彼はヘーゲルの哲学に強く影響を受けている。1841年哲学の博士号をとると彼は、ポーランドで広く読者を持っていた民主的新聞“ライン紙”の編集者となった。しかしこの新聞はすぐにロシア政府の弾圧を受けてしまったが、それは1842年のことであつた。それから彼はパリに赴き、そこで歴史学、経済学に専念した。パリでは彼はサン・シモン、無政府主義の提唱者プルードン等と知りあつた。彼はまたドイツの詩人ハインリッヒ・ハイネの知己をもえている。後に彼はフリードリッヒ・エンゲルスと知りあつたが、彼はマルクスの親しい、生涯の友となり、マルクスと共にいわゆるマルクス理論の提唱者となつたのである。1845年マルクスはパリを追われた。彼はブリュッセルに赴き、そこに3年留まつたが、その間彼はドイツ国籍を放棄し、終生無国籍で過ごした。ブリュッセルでは友人エンゲルスが彼と合流し、2人は社会主義新聞に関係し、世界各地の社会主義者、特にロンドンの弁護士組合との文書交換を行なう巨大な機関の管理にたずさわつた。1848年の革命のさいに、彼はこれに加わるためドイツに帰つた。しかし彼はまたも追放され、1849年ロンドンに亡命したが、ここで彼は家族の者と極貧のうちに余生を送つたのである。彼は1883年3月14日ロンドンで客死した。

若年のころよりマルクスは、政治的、社会的病弊は単なる理論、もしくは空想主義的理想では解決できるものではなく、真の問題解決は現行の社会制

度の本性を分析し、その経済的基礎の発展を追究することのうちに見出される、という基本的な考え方を身につけていた。マルクスにとって退廃の基礎は、社会を相容れがたい2つの階級に分割してしまう現行の資本主義制度にあったのである。この対立こそ社会契約を解消させ、混沌と無秩序の源となるものなのである。マルクスは多くの著作の中で、彼の社会主義哲学と革命的命題について語っている。1848年にマルクスとエンゲルスは、共産主義連盟の費用で『共産主義宣言』を書きあげた。この書は最も多くの人に読まれた書であり、また最も一般的な共産主義文献である。この宣言は共産主義理念の宣伝というニュアンスは少しもないのだが、このさい“共産主義”という言葉が用いられたのは、エンゲルスの指摘によれば、彼らの理論を他の社会主義理論と区別するためのものに他ならなかったのである。この宣言はマルクスの社会主義の主要点を要約し、同時に労働者が協力して行なうべきプログラム、事態の推移する経過を略述している。マルクスの研究の主要な、しかも明瞭な傾向は、既存の政治的、経済的体制を攻撃し、一方労働者階級の感情を高揚させて彼らの意志統一をはかり、既存の体制を破壊させようということにあった。かくして社会主義、あるいは共産主義国家が誕生する機会が与えられたのである。

マルクスの哲学は2つの重要な理論にのっとっているが、それは剰余価値説と歴史的唯物論である。

剰余価値説は、マルクスの経済哲学の中心理論である。この理論は、人間の労働が事物の価値の根源である、つまり一商品の交換価値はそれを生産するために費やされた努力の総量に依存する、という原理を基礎にしている。原料は、もしも労働者がそれを有用なものとするために手を加えなければ、価値も有用性ももたない。例えば木綿という原料は、繰綿、紡織といった工程をへて布になるまでは何の価値もないのである。木綿が価値をもち、有用になるのは、この最後の段階においてなのである。この綿を有用にしたのはそれを原料から布に変えた労働者の労働である。したがってその価格は、原

料の価格を上まわることになる。これこそマルクスが、人間の努力は価値を生産しうる1つの力である、といている真意なのである。富を生産するのは労働である。マルクスは彼の価値理論を効用理論と結びつけている。彼によれば、事物の効用は、それが必要とする労働量によって決定されるのである。事物は、それにたいして人間の努力が払われて初めて有用になるのである。労働なしには原料は原料に止まり、有用なものへと変形されることはないであろう。それゆえ価値の上昇ということもありえないのである。

富を生産するものが労働である限り、労働者は労働によって生産されたすべての富を統制する権利をもつ。しかしこうしたことは起こりはしない。労働者は、商品の価値の生産者に相応しい報酬をえてはいないのである。資本主義体制において産業資本家は、労働者から労働力を買いとる。ところでこの労働力は他の品目同様に特定の価格があるが、その価値は労働者が生活のために必要とするものと等しいのである。したがって産業資本家は、彼が買い取った労働力で彼の支払った以上の価値を作り出すために、労働者を長時間働かせるのである。そしてこの2つの価格の相違から、資本家は莫大な利益をあげるのである。この相違こそマルクスが剰余価値と呼んでいるものである。この剰余は、資本を利用して労働者を雇用することによってのみ獲得されうるのである。機械、道具、原料に投資された資本は剰余価値を少しも産み出さない。なぜならばこれらのものは、消費された価値の総量において以外はいかなる価値も生産しないからである。産業資本家は機械を交換し、すでに消費されたものに代る原料を購入しなければならない。しかしこれは労働者に関連づけて考えてみた場合、正しい表現ではない。

この問題をさらに究明するために、われわれは次のような例をあげてみよう。例えば1人の給与労働者が、単に生活しうるだけで1日15ピアストル必要であり、この額を彼が雇用者から受け取っていたとする。つまり雇用者はこれにより、労働者の1日分の労働力、例えば8時間分を買いとったことになる。しかし労働者は実際のところ、5時間でこの労働の価値を生産しうるの

である。つまり雇用者は労働者から、3時間の生産分を丸儲けすることができるのである。もしも1時間の労働価値を3ピアストルとすると、労働者の労働価値は24ピアストルであるが、そこから労働者が手にするものは15ピアストルのみであり、その余りの9ピアストルは資本家が完成した仕事からの利益として自分のふところに入れてしまうのである。これがマルクスの考える剰余価値なのである。あらゆる企業における労働者の数のことを考えてみれば、雇用者が巨大な利益をあげていることが容易に理解されるであろう。

資本家は、自分が獲得した剰余価値を消費することができない。それは奢侈品を買うために使われたり、さらに資本に向けられることになる。このような場合資本は増加し、それを生産のために用いる資本家達の手に集中され、したがって生産も増加する。同時に労働者の購買能力は、彼らの芳しくない生活のために低下していくのである。これは過剰生産の危機を産み、労働者の生活条件を悪化させるのである。また資本が増加すると、それは労働者の必要を少なくするために機械の購買に向けられ、失業があちこちに見られ、労働者の生活条件はさらに悪化するのである。

マルクス哲学の基礎となっている第2の理論は、歴史的唯物論である。マルクスは道徳的、宗教的、社会、宗教的体制を決定的に規制するあらゆる諸条件の中に、歴史的発展を司るある種の力が存在していると信じていた。マルクスによれば、人間関係の基礎は生産手段に根底を持つ唯物的なものであった。関係は生産手段の変化とともに変化するのである。人間の発展の歴史は、とりも直さず生産手段の変化の記録に他ならないのである。例えば原始社会において、生産関係は協力的な性質のものであった。道具、原料、人力からなる生産力は、原始社会においては原始的な狩猟の道具であり、獰猛な動物にたいする恐れから人々は皆協力せざるをえなかった。当時はまだ私有制は存在していなかったのである。しかし農業の誕生とともに私有制が登場し、人々の関係が一変したのであった。協力互助の代りに、社会は分割されて主人と奴隷、地主と労働者の2つに対立することになるのである。関係

は、それぞれが自分の利益を追究する階級間の関係になったのである。人間はその兄弟から搾取し始めたのである。人間関係を墮落させるこうした傾向を産んだ原因は、生産手段における私有制の登場に他ならない。人間の歴史はかくのごとく発展して現在の資本主義体制にまでいたったのである。さらに的確な表現を用いるならば、生産手段は発展しついに現在の資本家階級、プロレタリアート階級の上に基礎をおく産業体制を作るにいたったのである。生産関係は、たがいに敵対する2つの階級間のものとなった。マルクスが共産党宣言の中でいっているように、「すべての既存の社会の歴史は、階級闘争の歴史に他ならない。」

彼によれば、歴史はすでに闘争の最後の段階、つまりブルジョワジーとプロレタリア間の闘争の段階に入っているのである。

マルクス理論によれば、社会の経済体制はその社会内の個人間の関係の基礎である。宗教、道徳、法律その他の諸体制は1つの基礎、つまり経済体制の上部構造なのである。体制が階級体制であるとき、支配階級は宗教、道徳、政治、文化、法律の諸体制を規制する。当然のことながら支配階級は、おのれの利益にかなない、奉仕するものしか認めようとしないのである。政府、法律の諸システム、その他あらゆる政治的、社会的システム、ならびに関係を専断的に規制するものは支配階級の利益なのである。マルクスの考えでは、歴史の流れの中で国家は公正であったためしはなく、つねに支配階級に味方してきているのである。彼はいう。

「支配階級の見解は、歴史のいかなる時期においてもつねに指導的な考え方であった。」

彼は社会の一段階から他に至る発展は、新たな知的原理、新たな信条によってはもたらされないと考えていた。なぜならばそれらは根本的な要素ではないのである。一段階から他への移転はある生産手段、つまり生産体制から経済体制までをも変えてしまう新発明、新発見がなされたときに起こることである。こうした場合にのみ新段階への移行のプロセスが現われるのである。

しかしこの変化は容易には成就しない。生産体制の変化は、自身の影響力と権威を強化しようとする新階級を登場させるが、一方旧階級はまた自分の利益を守り、その政治的影響力を放棄することを拒んで新階級と戦うのである。その結果階級闘争は激化し、両者はたがいに支配権をうるため自分たちの勝利、優位、生存につながるあらゆる手段を用いることを辞さないのである。新階級は権力を掌握し、新経済体制に相応しく、またその要求にかなうような政府を作りあげるために暴力を用いることになるのである。マルクスによれば、社会の歴史とはこうした階級闘争の歴史なのである。そして歴史の示すところによれば、前述のような闘争はつねに数において勝る貧しい階級が、少数者である富んだ階級に勝利することになっている。こうした闘争のあらわれとしては、古い昔の自由人と奴隷の闘争、ついで貴族と平民の闘争、部族社会における首長と長老たちの闘争、そして近くはフランス革命後のブルジョワジーと労働者階級のそれがあげられるのである。ブルジョワジーは経済的諸企画の施行者となったが、それは産業革命以来、労働者階級が事実上は生産にたいして最も大きな貢献をしていたにもかかわらず、肉体労働しかなしえなかったのに反して、ブルジョワジーが富と政治的影響力とを独占することができたからなのである。労働者階級の主要な利益は、彼らを搾取し、彼らにようやくその日暮らしできる程度の給料しか支払わぬブルジョワ階級の手の中にあつたのである。労働者はこうした事態に甘んじなければならなかったが、それは彼が生計をたてるために売るものといえは自分の労働力しか持っていなかったからである。労働者がただ自分の労働しか所有していない場合、彼は飢えのおそれから、就業を拒否したり、交渉を行なったりすることができない。彼は自分自身と家族の生計をたてるため、最低の価格で自分の労働力を売り渡すことを余儀なくされるのである。彼の労働はあたかも他の商品と同様、需要と供給の法則の支配下に入り、商品の値段をその生産価格にまで引き下げる競争の法則の影響をうけいれることになるのである。商品としての労働の最低価格は、労働者の生活の支えとはならない。かくして



労働者間の競争は、彼らの賃金を最低線に近づけることになるのである。

労働者を悩ませたこのような異様な状態、搾取、圧迫はついに彼らの怒りを喚起し、彼らをして決死の戦いに立ち向わせたのである。なぜならば富の真の生産者は、彼ら自身に他ならなかったからである。そして社会発展の法則にしたがって、この闘争は労働者階級の勝利に終るのである。なぜならば最悪の生活を甘んじていたのは彼らであり、しかも最多数者であるのは彼らなのだから。この闘争は一定の結末に至るであろう。それは資本主義の崩壊である。この点についてマルクスは、彼の有名な言葉の中でいっている。

「資本主義は、それ自身の崩壊の種子を育んでいる。現在の経済生活は、それ自体のうちに未来の生活の種子を宿している。資本主義は、それを支配する経済法則からみてすでに消滅する運命にある。」

マルクスは剰余価値説から多くの法則を引き出したが、これによれば階級間の闘争はより増大し、不可避なものとなり、結局は資本主義が倒れて労働者が主権を握ることになる。マルクスによれば、競争は資本家の資本蓄積を促し、資本家はこの資本をさらに増やすために機械をとりつけ、生産の拡大を計るのである。これは大多数の労働者の失業を促し、労働者間に失業状態が蔓延することになる。こうなると資本家の利益は、剰余価値の法則に従って減少する。つまり剰余を産み出すのは労働のみであるが、労働者の数が減少すれば、それだけ剰余、つまり利益も少なくなるからである。こうなると資本家はその余の労働者と長期雇用契約を結び、彼らを一層抑圧するのである。そして労働者は生活のためには、資本家の申しいでに甘んずる以外はないのである。競争は資本家の数を減少させるが、それは強者との競争にたえられぬ弱者が資本家たりえず、賃金労働者の中に加わっていくからである。したがって労働者の数が増加し、資本家の数は減少することになる。マルクスはいっている。

「1人の資本家は多数を殺すことができる。」

資本主義は、その産みだす危機と対処するため、諸会社のユニオン、ある

いはそれに類似する機構といった形態の下に、必然的に独占へと向かっていくのである。このように資本主義体制は地方集中化、つまり数千の労働者を一定の地区に集合させる傾向をもつのである。一方この集中化は、労働者がたがいに分ち合ひの問題を研究し、意見を交換し、その望むことを確認し合う機会を彼らに提供することになる。こうした事態は彼らの連帯を強化し、彼らが自分たちの利益を守るため一致団結して直接行動に出ることを容易ならしめたのであった。海外市場を求めての拡張は、種々の地域の産業部門を結びつける交通手段を進歩させたが、これは同時に労働者たちの連絡、意見の交換を容易にし、彼らが練った策略、革命を実施する上でも大いに力になったのである。過剰生産のおかげで危機は次々と訪れた。労働者の賃金は減り、購買能力は低下し、失業状態が蔓延する一方では労働者階級成員の数が増えて、彼らの悲惨な状態はいやますばかりであった。資本主義体制を根本からくつがえすような、労働者たちの革命が成就する日がいつか必ずや来なければならないのである。資本主義が倒れ、その廃墟の上に社会主義体制が築かれるような日が。

こうした必要を満たすかのように資本主義は、資本主義そのものを倒し、私有権も階級の差異も、また個人間の競争や社会的階級までもが消滅してしまふような社会主義社会をうちたてるため、労働者たちが直接行動をとる準備を促す諸条件を作りあげているのである。これについてマルクスは、つぎのようにいっている。

「社会主義体制の確立は、歴史的発展と階級闘争のあらわれの最終の段階である。私有権と階級差が廃止された後には、社会階級間に競争、闘争が生起する余地はない。」

しかしブルジョワジーを崩壊させようとする労働者の革命が、社会内の諸階級の消滅という目的を達することが可能なのであろうか。

マルクスによればプロレタリア革命即階級の消滅ということはあるまい。そこには労働者革命にたいして反革命を企てるブルジョワ階級を、最終的に

破壊することを任務とする労働者独裁という過渡的段階が必ず存在するのである。この労働者独裁の期間は推定不可能であるが、その理由は社会主義体制が確立され、ブルジョワジーのあらゆる残滓が一掃されるまでそれは存続しつづけるからである。その任務を完遂したさいには、これは解消されるであろう。そしてそれと共に国家の残滓も消え去るのである。なぜならば国家とは、マルクスが『共産党宣言』の中でいっているように“ブルジョワジーのための実行委員会”以外の何ものでもないからである。またエンゲルスは、それは自然な制度ではなく、社会が敵対し対立する集団に分かれ、状況にたいする主導性をもちえない時に現われる制度にすぎない、と主張している。国家は階級闘争の産物でしかないのであるから、階級の無い社会が実現されることによって姿を消すのは当然のことである。1873年、エンゲルスは無政府主義者たちに反対して論文を書いているが、その中で彼はいっている。

「すべての社会主義者が納得しているように、国家の消滅とは一般的機能がその政治色を失い、社会の真の利益を監視するということを任務とする、たんなる行政的職能に変貌することをさしているのである。」

これによれば、労働者の独裁が終りをつげた時にこそ、社会は共産主義に、つまり全体的平等と階級からの完全なる解放を保障された社会に移行するのである。この全体のスローガンはつぎのようなものになるであろう。

「各人から能力に応じ、各人へ必要に応じ」

ここで重要な点は、マルクスの理論の中には、社会の構成員にひとしく富を分配するという原理のひとかけらも見出せぬことであろう。彼によれば分配の法則は、社会がその歴史的発展段階の中において到達した状況の諸条件の相違により、あるいは国家内の一般的生産機構の相異により異なる。平等の問題については、マルクスもエンゲルスも、階級の廃止こそが労働者の要求する平等の真の保障であるといっているのである。

## 穩健社会主義

すでに見てきたように、マルクス主義的社会主義は階級闘争の不可避性と、資本主義を倒し社会主義社会を建設するための労働者革命を基礎としているのである。マルクス主義者によれば、革命と暴力による以外には社会主義への道はないのである。しかし社会主義社会建設のためには革命は不必要であり、社会主義者は議会闘争ならびに政府の圧力によって社会的、政治的改革を行なうことにより、社会を社会主義へと発展させうると考えている社会主義者もいるのである。

フランスの作家ルイ・ブランは、政府はたんに一階級による他の統制機関であるべきではなく、むしろ改革の手段として利用されるべきであると主張した最初の1人であった。この考えは、自由な改革とは偽善以外の何ものでもなく、労働者階級の真の自由は反抗と、それにつづく富者にたいする専断的支配を経過せぬ限り成就されえない、と主張していたブランキイの考えに対立している。ブランは、民主的政府が人々の不幸を軽減し、競争に基礎をおく資本主義体制を除々に工場、諸事業内の協力主義体制に切り換えうるという観点から、一般選挙権を要求して、フランスで盛んになった運動を支持したのである。1839年にブランは著書『労働の組織』を出版したが、その中で彼は政府が社会主義工場を作することを提唱している。そのさい政府はこの工場に資本、ならびに目的を果たしうるだけの機械を与え、その代りにこの支出に見あうものとして炭坑、銀行、鉄道を政府のものとせよというのである。彼はまた労働者が行政の技術を学び、一方彼らの被雇用権が保証されるべきだと考えていたのである。彼は資本主義者たちを批判し、彼らは工場システムを採るか、あるいは彼らの仕事をより有能な、才能ある人物の手に委ねるべきだといっている。このような考えをもっていたのはルイ・ブランのみではない。穩健社会主義者はフランスのみでなく、いたるところに存在す

る。彼らは多くのグループに分かれるが、例えばつぎのような流派があげられるのである。

## 民主的社會主義者

彼らは、社會主義實現のためには國家が重要な役割を果たすと考えており、社會主義のプログラムを實現するためには、ぜひとも近代的な民主勢力を動員すべきだと信じている。このためには労働者に選挙権を与え、議会において過半数をしめる議席をとるようにさせなければならない。そしてこれは、結局彼らを自分達の目的のために戦わせることになるのである。さきにのべたように、ルイ・ブランはこの中の1人であるが、イギリス労働党を創立したイギリス社會主義者もこの1派に入るといえよう。民主的社會主義者によれば、民主主義は社會主義への手段なのであり、また両者は、個人が社会的正義を享受しうる社會条件を作るという共通の目的をもち、しかも相互に関わりあい、等位に位置する要素なのであるから、結局社會主義も民主主義を強化するものである。彼らにとって社會主義國家は、社會内の一階級に奉仕するものではなく、社會それ自体によって運営されるものなのである。この民主主義の革命的形態は、多くの国々に見られるものであり、社會主義國家とみなされていないような国々でも採用されている。

## 農業社會主義者

農業社會主義者は2つのグループに分かつことができる。その1派は土地の私有を廃止せよと唱えるものであり、他の1派は地主に重税を課すべしと主張している。

農業社會主義は、社會こそ經濟的商品の価値を生産し、それを保護するものであるから、社會はそれら商品にたいして完全な権利を持つという經濟原

理に基礎をおいている。

農業社会主義者の両派は、この原理を農地に適用しているのである。彼らは、政治社会が形成される以前には、各個人が土地にたいして同等の権利を持っていたと主張しているのである。土地の利用度、ならびに地価の値上りを規制するものは人間の力のみではなく、この問題には社会が非常な影響を与えている。そうだとすると貴族階級は彼らの土地所有権がないことになるのである。なぜならば土地は、水、空気、太陽と同じように人間の存在によって基本的要素なのであるから。そうはいうものの、ある個人による広大な領土の所有は、労働者階級が甘んじなければならないさまざまなタイプの卑しい貧困の主要な原因に他ならないのである。この解決策としてある者は、政府がすべての農地の所有権を掌握し、この土地の地代による収入を、一般国家予算の主要な財源とするという条件の下に、これら農地を適正価格で貸付けばよいと主張している。国家は土地所有者に長期分割払いで補償を行なうという条件で、土地を所有者から回収し、種々の地代を設定して例えばいまだに土地をもっている者には重税を課し、社会主義のプログラムを遂行して得られた収入によって国費を賄っていくのである。アメリカの経済学者ヘンリー・ジョージによれば、地価は社会によって作られるのであり、社会の進歩、発展とともに地価も上昇するのである。彼によれば社会悪の原因は、不注意な少数者たちが土地の生む利益をもっぱら享受し、そこからえられる諸資源を統制する一方、多数者が彼らの権威に屈していることにある。そこで彼は、土地の所有権が確立している地域においてこの問題を解決する一手段として、貿易、工業もしくはその生産品には税を課さず、その代りに総額が地代と同額になるという条件で、地価に税金を課すことを提唱している。

### ファビアン社会主義者

ファビアン協会は、一群の社会主義思想家の力により、1884年イギリスに

創設された。ジョージ・バーナード・ショーは、そのメンバーの1人である。この協会員たちの目指すところは、個人的、組織的のあらゆる手段を通して社会的改革を行なうことにあった。彼らはイギリス中産階級に呼びかけ、彼らの共通の利益を目指す段階として、その成員のすべてが一致協力して産業資本の、運用、投資に参画する必要があることを説いた。その後彼らの見解はさらに発展したが、それは1884年9月ジョージ・バーナード・ショーがファビアン協会に加わった際に出された宣言に明らかである。彼は土地の国有化を訴え、政府があらゆる生産分野で干渉する機能を持つべきであると主張した。ファビアン協会は、その価値理論によって彼らの社会主義的教条を正当化しているのである。彼らは価値を、労働者のそればかりでなく、社会全体の創造の基礎として捕えたのである。彼らの考えによれば、社会主義の目的は、社会が階級間の差別なくその成員のために作りだした価値のすべてを、各人が共通に享受しうるようにすることにあったのである。この目的を達成するための最も簡単な道は、土地ならびに産業資本の所有権を、政府が社会を代表するという形で社会に返すことであつた。つまり一般的所有権は、労働者階級といった特定の階級にではなく、道徳的主体としての社会に帰属すべきだというのである。ファビアン協会は、社会主義プログラムを遂行するにあたってアメリカ、イギリスに存在する民主政府の力に絶大な信頼を抱いていたのである。

ファビアン協会によれば、社会は緩慢な変化によってというよりは、民主国家における革命的な盛り上がりにより、着実に社会主義へ移行しつつある。彼らによれば所有権、監督権を一般化するためのあらゆる改革は、究極的にそれを可能にする社会主義の適用以外にないというのである。彼らは目下のところ、早急に資本主義を社会主義へ移行させる必要はないという。むしろ彼らは、資本主義社会と社会主義社会の間には明確な一線は存在せず、一方が行政的手段を通じて他方に変貌しうると考えているのである。国家は完全に中立であるべきであり、その権威、機能は議会の多数勢力の手に委ねられ、

権威、力はいかなる特定グループの手にも掌握されるべきではないというのが彼らの考え方なのである。

## 共 産 主 義

共産主義はソ連で適用されているような、マルクス主義的社会主義に冠された呼称である。ただしソ連社会主義にたいするこの呼称は、実際学問的には正確だとはいえないのである。なぜならば共産主義とは、階級、所有権、国家機構、人為的な法律、その他個人、社会の自由を束縛するようなあらゆる因襲的諸規制から解放された段階をさしているからである。共産主義とは、原始人が生活していたようなあらゆる制約から解放され、完全に自由を享受しうる状態を指すのであり、そこでは自然法が支配し、繁栄と幸福が満ちあふれている。要するにそれは、彼らもいうとおり地上の楽園なのである。こうした段階が社会の共産主義的段階なのである。

マルクスによればこの段階は、労働者階級が革命を行ない、主権をにぎって資本主義社会のあらゆる残滓を完全に一掃したのちに、つまり資本主義社会の廃墟に登場する社会主義が、これだけの任務を完遂した後に現れる段階なのである。この任務が終るとこの主権は、国家体制とともに消滅し、彼が歴史的発展の最終段階と呼ぶ共産主義の段階が生ずるのである。このことはとりも直さず、ソ連に現在共産主義が存在していないという事実を立証するものであろう。その代りに存在しているのは、小規模の所有権はいまだ存続を許されているが、農、工業部門における大規模な所有権の廃止によって、社会がすべての生産部門を統制している一種の集団社会主義であるということが出来る。集団社会主義は、個人がその労働に応じ、またその努力に応じて所得をえられるように、個人の生産を社会の生産と結合させたものなのである。



## 第 3 章

### イスラームの社会主義

イスラーム社会主義は、自由、公正、平等、同胞的連帯に基礎をおくものである。これらの目的を達成するために、イスラームは圧力、テロ、脅迫といった手段を弄さず、むしろその方法は、これらの諸原理が現世において平和をもたらし、来世においてアッラーの祝福をもたらすと説得することにある。このことは端的に、イスラーム社会主義が、事物をしか信じない唯物的なものではなく、物心両面を信ずるものであることを示している。したがって個人に社会主義の諸原理を認識するよう要請するにあたって、イスラームは、彼を内心からこれらに向かって駆り立て、彼の良心を彼の監督者とさせるのである。しかしイスラームは、人間を彼の良心もしくは彼自身に委ねきってしまう訳ではない。良心は道を踏み迷うこともあり、人間は他の影響に負けてしまうこともある。イスラーム社会主義は、すでに独自の原理をうちたて、法を制定し、勧善懲惡の具体例を提出しているのである。そしてその後は人々をして自分自身、もしくは自分の精神に問いかけさせ、彼にとって最上のものを選ばせるようにするのである。

「アッラーはクルアーンが禁じなかったことをも、その權威により禁じ給うのである。」

イスラーム社会主義は、公共善を確保するために個人を蔑ろにし、その本質を破棄させるようなことをしない。むしろそれは個人の唯一性、重要性を尊重し、個人に信条、労働、思想、言論の自由を認めているのである。

個人にたいして、理想的生活において自由があたえうるもののすべてを提供している一方、イスラームはまたこれこそ社会的自由への道だと考えていた。各人に所有の権利を与えると同時にイスラームは、これを全社会繁栄の手段としているのである。イスラーム社会主義は人間の本来的性向、傾向を考慮に入れ、人間が自己の欲望にしたがって行動することを知っている。この点についてクルアーンはいつている。

「まことに人間は吝嗇にして富を追い求める者。」

イスラーム社会主義は人間に労働の目的を教えるが、これこそ全社会の福

祉につながるものだと考えているのである。ひとは労働し、しかもその労働の結果を自らのものとしうると考えれば、彼の仕事ぶりは活気を運び、技術も上達するであろう。こうしたことのうちにこそ、社会のための最大の利益が存在するのである。

イスラーム社会主義の下には、個人に関するあらゆる問題の完全な平等が存在する。しかし労働の能力、努力の多寡に差が存在する以上、報酬に差異が生ずるのも当然のことであろう。この場合完全な平等は、自然の法則に合致しないのである。クルアーンはいつている。

「知る者、知らざる者が等しいといえるだろうか。」「ひとはおのれの努めたものを手にしうのみ。」

ただしある人々は、イスラームは社会主義ではなく、資本主義的なものであるといっている。なぜならばそれは私有制を認め、相続法を存続させ、しかも財産の自由な処分権を許しているのだから。しかしこういう考えは誤っているであろう。イスラームはその秩序正しい法律により、疑いの余地を残さぬほどの確かさをもって社会主義を指向しているのである。

筆者は皮膚の色、人種、宗教の差を問わず全人類の社会的連帯を達成するために、イスラーム社会主義が定めている法制、それが要求している要請、義務の基盤について後に明白にしていくことにしよう。

## 私 有 権

イスラームは私有権を、労働と報酬の原理の上においている。労働し、努力を払った者は誰でもその報酬をうることができる。これを基礎にしてイスラームは、圧制、偽瞞という手段を除外したすべての所有権獲得の手段を含んだ、法的な所有を通じての所有権を確立しているのである。イスラームにおいては、この権利の確立は疑いをさしはさむ余地がない。クルアーンはいつている。

「男には彼等が稼ぎえた利益があり、女には彼女等が稼ぎえた利益がある。」

あるいは、

「そして孤児たちにはその財産を分けてやれ。そして（良い物）と悪しき（物）をとりかえてしまうようなことをしてはならぬ。」

また聖なる伝承<sup>ハディース</sup>は伝えている。

「自分の財産を守って殺された者は、誰しも殉教者である。」

これらの原典はすべて私有権について語っているのである。イスラームはこの権利から、それを悪人から守り保持するための定めを引き出している。この権利を守るためイスラームは、みせしめの刑罰を定めている。クルアーンにつぎのような1節がある。

「窃盗を常とする男女については、彼らが稼ぎえたもののために彼らの手を切り落とせ。アッラーからのみせしめの刑罰として。」

これらのみせしめの刑罰の他にイスラームは、個人の行為、態度を見守るものとして人間の良心を重要視している。

それは他人の財産をうかがうことを禁じているのである。預言者はいつている。

「土地に関して悪をなしたものは、厳しい天の刑罰をうけるであろう。」

「誰しも他のムスリムの財産を不法に横取りした者は、来世においてアッラーの怒りをかうであろう。」

ムスリムは絶えず活動を怠らぬ繊細な良心の持主であり、もしも彼が同胞に悪をなせば、アッラーの怒りが彼の上にふりかかるであろうことをよくわきまえているのである。善人は誰しもこのようなことを意図的に行なおとせず、また正常な感受性と繊細な良心の持ち主がこのようなことを行なうことは難しいのである。

私有権を確立したあとでイスラームは、そこから他の結果を引きだしている。つまり買却、貸与、抵当、贈与、遺言といった手段による財産の処分権、

使用权がこれである。このように所有権は実質的なものであり、個人は実際に所有している実感を強く感じることができるのである。

イスラームは自然な本能、動機を抑制せず、むしろその健全なるものを助成していくのである。所有欲は精神の内部に根ざす自然な本能であって、これにさからうことは好ましいことではない。ただしこれが中庸をえた程度で満足されるならば、それは社会にとっても個人にとっても望ましい結果をうることになるだろう。これまで述べてきたように、所有権の確立は自然の理にかない、人間の自然な本能にのっとっているばかりでなく、努力と報酬を正当に結びつけ合うのである。同時にそれは人々をして、よりよい生活のために最大の努力を払うようにしむけ、結局は社会の利益にもかなうものとなるのである。人間は自己の欲望を満たしたいという本能とともに作られているのである。クルアーンはいつている。

「いえ、もしもお前がわが主の恵みの宝を自由にあつかうようになれば、お前はそれを出しおしみするであろう。」

イスラームは一方でこれら本性に即することによって、また他方で他者からいかなる危害も及ばぬことを保証する教訓を与えることによって、高い地位を占めることになったのである。一方で精神の要求をみたし、他方で侵犯からの保証を与えているこの制度以上に高貴な制度があるであろうか。以上のような制度がイスラームなのである。

このようにして人々は、労働の成果を自身享受するという確証をもって仕事をつづけていくことができるのである。自分の技術が洗練され、生産の量が増大するにつれて、彼の利益も増加する。クルアーンはこれについていつている。

「1粒の原子ほどの善をなす者も、必ずやその報奨をうけるであろう。」

人間の努力、労働の最終の結果は、すなわち社会の利益、福祉そのものに他ならないのである。いずれにせよ善は必ず社会に戻ってくるのである。

しかし、イスラームは、私有権をいかなる制限、制定なしに認めている訳

ではない。私有権を認めると同時にイスラームは、それを实际的であるよりはむしろ理論的なものと化せしめるような、他の諸原理を定めている。イスラームは人々に所有を認め、それを享受させ、彼らの自然の欲求を満たすようにしている。しかし所有者が自分の所有物に関して、自分自身を欺かないような種々の規制を設けているのである。なぜならば所有は、しばしば人々の本性をも曲げてしまうことがあるのだから。クルアーンは認めている。

「人間はたしかに矩をこえる者。自らの力を過信する故に。」

人々は所有物を自由に処理することができる。しかしそれを利用する段階になると、そうすることが道徳的に正しい範囲でしか許されない。これらの条件、規制の背後にあるものは、一般社会の利益なのである。

この点に関してイスラームは、個人というものを、社会のために彼が所有する財産を処分しうる、社会の代理人であり、被雇用者にすぎないと考えているのである。すべての財産はアッラーのものであり、社会は万物の所有者アッラーからこれの管理を委ねられているのである。以上のことは、クルアーンの中に明記されていることなのである。

「アッラーとその御使いを信じ、アッラーが汝に与えたものを分け与えよ。」

この問題を明らかにしている文章は、クルアーンの中に数多く見出されるのである。それはまたいっている。

「そしてアッラーが汝に下された富を、人々に分け与えよ。」「アッラーは、お前達のある者の暮らし向きをよくなさった。それゆえこの好運に与った者は、その下僕たちに充分な恵みを施してやり、自分達と暮らしを同じにしてやるよう心掛けねばならぬ。」

この最後の言葉は、アッラーが下された財産については、富める者、貧しき者の差別がないことを明らかに示しているのである。アッラーは、宇宙に存在する万物のまごうかたない所有者である。クルアーンはいっている。

「アッラーは諸天と大地の家居を所有したまう。」

これは疑いもなくアッラーが、鳥、星、太陽、月といった空中にあるものから、植物、動物、人間といった大地の上にあるもの、海川やその中にあるすべてのものの所有者であることを示した言葉なのである。アッラーは万物の所有者である故に、彼はそれらを自ら好む者に与えることができるのである。クルアーンは述べている。

「言え。アッラーよ、よろず世の主よ。貴方はその王国を望む者に与え給う。」

アッラーは人間を創造し、人間を一段と高みにおかれた。クルアーンはいつている。

「たしかにわれわれはアダムの子らを尊重し、彼らを大地に海にと住まわせた。そしてわれらは彼らを、他の被造物より一段と高みにおいたのである。」

人間を尊重してアッラーは、宇宙の中の万物を彼らの使用に供せしめ、人々がその利益に平等にあずかるようにしたのである。クルアーンはいつている。

「人々がたがいに平等であるように。」「アッラーこそは諸天と大地を創り、雲から雨を降らせ、お前たちのために果実をもたらされた方。そしてみこころのままに、海をよぎらせるようお前たちに船を創り与えられ、またお前たちのために河川を創り給うた方。アッラーはまたお前たちに日月を創ってその運行を司り、昼夜を分かたれた御方なのだ。またアッラーこそは、お前たちが望むすべてのものをお前たちに与えられた方なのである。アッラーのみ恵みのかずかずを数えあげようとしても、お前たちにはとても数えきれないのだ。」

服従とは代償を伴わない労働である。そしてこの世に存在するすべてのものは、人間の意思に服従している。なぜならば人間は、アッラーにより特別な名誉を与えられているのだから。そしてこの名誉ゆえにアッラーは、人間を彼の所有物の使用者に任じ給うたのである。

ただし人間の所有権とは絶対的なものではなく、事物を処理し、利用する権利なのである。

「孤児たちには彼らの財産を与えてやれよ。」「人々の財産から喜捨をあつめ、それを使い果たせ。」

以上のようなクルアーンの言葉の中で人間に与えられている所有権は、つまるところ人間が財産、富の究極の所有者ではなく、彼はただそれを利用しうのみだ、という意味での所有権に他ならないのである。

アッラーが彼の財産保管者として任じているのは、一個人ではなく、社会なのである。もしも個人が、彼の財産の処理、利用について誤りを犯したならば、当の社会の支配者は処分権を取り返す権利がある。これはクルアーンが明らかに述べていることなのである。

「お前たちが生計をたてうるよう、アッラーがお前たちに与えられた財産を愚か者に譲り渡してはならない。それで彼らを養ってやり、着物を着せ、良い教育を授けてやることだ。」

社会はアッラーの財産の被信託者である。したがって国家は、相続者を持たぬ者の財産を相続することになる。つまりある個人が相続者を持たずに死んだ場合、彼の財産は社会のものに帰するのである。財産が事実上個人のものではなく社会のものであるという個人的感情から、人々はみずから支配者が財産について定めた諸規制をすべて受け入れるのである。同様に社会は、その利益が第一に重要なものであることを認めたうえで、法律、諸規制、義務を設けるさいには大胆にことにあたり、その所有物を完全に利用するように心掛けるのである。また他方社会の側から見れば、社会がアッラーの被信託者であるという考えは、社会がこの問題についての法制化にさいしては公正を守り、あらゆる措置が公共の利益にもとづいてなされることを要求しているのである。

このようにイスラームにおける私有権は、たんに社会的な機能をもつものなのである。財産はアッラーに帰属するものであり、社会はアッラーの被信



託者なのである。個人は社会の代理人であり、社会は諸規制を設ける権利をもち、所有者が道をあやまり社会を害することがないようにこれを法制化するのである。人民の利益を守り、個人の欲望を満足させることを旨とする支配者は、個人的、集団的のいかに問わず、あらゆる利益を対立なく実現、成就させるために、所有権を限定する権利を持つ。そして対立が存在する場合には、集団が個人の上に立つのである。

## 相 続 の 原 理

イスラームは人間の本性を考慮に入れ、私有権を努力と報酬という原理にもとづいて確立させている一方、相続の原理を損失と利益という基盤の上に打ち建てているのである。この点においてもイスラームは、十分に人間性を考慮に入れているのである。

イスラームにおける相続の原理は、私有権の直接の結果である。個人が私有権をもっている以上、彼が自分の財産を死後に残していく人々に譲り渡す権利を持つのは当然のことである。しかしイスラームは所有の問題に干渉し、個人の誤ちを避けるためにある種の規制を設けていると同様、所有権の譲渡についても、これを無条件に認めている訳ではない。

これは相続と遺言のシステムをみれば明らかになるであろう。その他の問題については、もちろん公共の利益に反さないという条件つきではあるが、個人は彼の財産を自由に処分するのである。もしも所有者が度を過ぎ、所有することにまつわる義務に抵触するようなことがあった場合、彼は禁治産者とされ、彼は所有権を失うことになる。クルアーンは相続法についてつぎのように述べている。

「アッラーは子供たちについてお前たちにつぎのように申されている。

男子は女子の2人分。ただし2人以上の女子がいた場合は、死者の残した3分の2は彼女らのもの。もしも女子が1人の場合は、彼女は半分をとる。

両親に関しては、もしも死者に子供があった場合には、親の1人が各6分の1をとる。しかし彼に子供がなく、相続者が両親のみの場合には母親は3分の1をとる。だがもしも彼に兄弟がある場合は、母は6分の1、ただしこれは死者の形見わけ、借金の返済後の勘定である。以上がアッラーからの命令なのだ。まことにアッラーこそは賢明にして全智におわします方。そしてお前たちは子供がない場合、妻の遺産の半分をとる。だが子供があったときには、形見わけ、借金の返済をしたあとの4分の1をとることになる。また妻たちは、お前らが子供を残さずに死んだ場合は遺産の4分の1をとり、もしも子供があれば、形見わけ、借金の返済をすませたあとの8分の1をとるのだ。」「人々がお前に決めてくれ、と頼んだらいつてやるがよい。アッラーは親も子もない者について規定している。もしも息子、娘を持たぬ男が死んだならば、妻の取り分は彼の遺産の2分の1。そしてもしも女に息子がいない場合、夫が妻の相続人となる。しかしもしも2人の姉妹があった場合、彼女らは彼女の遺産の3分の2をとる。また子供が男1人、女1人の場合、男は女の2人分である。アッラーはお前らが誤たぬよう、これらを明らかにされている。アッラーこそは森羅万象について知り給う方。」

イスラームは所有権が相続者に譲渡される方法、分け前を明確に規定している。さきに引用したクルアーンの1節は遺言（形見分け）について言及している。これは死者との関係から当然遺産分配にあずかれる立場にありながら、他の相続者との関係で遺産をうける資格のなくなってしまう者について、除外例を設けるためのものである。これは一種の慈善であるといえるだろう。伝承が伝えているように、遺言とは相続人たちのためのものではないのである。

「相続人にとっては遺言は無用である。」

これは遺言により利益にあずかる者が、相続と遺言の両方の権利を行使しないために述べられたものなのである。もしもこの両者が可能ならば、この

不正により他の者が少しも遺産相続にあずからぬことになるだろう。さらに遺言は、遺産の総額の3分の1をこえてはならない。これは最高の限度であるが、この規定は相続人たちが彼等の法的権利を奪われぬよう定められたものである。

しかし一体何故に遺産は、相続人たちに平等に分配されないのであろうか。

分け前はクルアーンの規定に従って、権利と同様、責任の段階に応じて分けられるのである。相続人の分け前は、彼の責任の増加に応じて増していくのである。

息子は祖父母の分け前が払われた後の、すべての遺産を受け取る。遺言者は、まず彼の父親の一生の諸必要経費を準備しなければならない。全兄弟は半兄弟の相続権を奪い去ることになるが、それはもしもこの全兄弟が生計をうることが不可能になっても、彼は家族全体を養っていかなばならぬ義務があるからなのである。以上はこのシステムにおいて、権利と義務がいかに正当に分割されているかを示すものである。

イスラームにおける相続システムの背後にある理論的根拠は、一般の利益なのである。私有権を認める一方イスラームは、所有が増大し、持続する場合、例えば富める者の側には専制といった、また貧しい者の側には物質的環境の差異から生ずる圧迫感の増大といった危険が内蔵されている、という事態を等閑視してはいないのである。われわれは相続システムの中に、巨大な所有を小さく分割する、あるいは適当な規模の所有を代々持続させる要素を認めうるのである。遺産がそのまま手つかずで相続されることは、死者が父母、妻、娘をもたず、遺産すべてを相続する1人の息子を残した場合という、ごく稀なケースを除いてはありえないのである。相続は、イスラームにおける家族の連帯の一つのあらわれなのである。個人が相続したものは何にせよ、彼自身あるいは彼が活着している間彼に依存する人々にとっては有用なものであり、遺産授与者の死後、家族の一員を強く結びつける強力な理由となるものであろう。

これは死者の息子たちの間に憎悪や羨望を呼びおこしながらも、家族の由緒ある地位を持続させるため、長子にのみ家督権、全財産を与え、巨大な所有を維持させるイギリスの相続法とは全く異なっているのである。

イスラームの相続システムは、努力と報酬のバランスの公正を計っているのである。父親は自分の努力の結果が、彼の短い生涯の間のみでなく、自分の生命の延長である孫子の代まで利益をもたらさうと感じていた場合、生産をあげ、最高の報酬をうるために全力をつくすであろう。この努力から利益をうけるのは結局社会全体なのであり、こうしたことが進歩と繁栄の基礎となるのである。

息子たちが彼らの父母の努力から利益をうることは正当であろう。なぜならば親子の関係は、物質的相続関係が断たれたとしても切り離されることがないのだから。子供たちは両親から知的、肉体的性質を受けつぎ、それを一生保持しつづけるのである。生物学においては、遺伝の法則において遺伝子が非常に重要視されているが、同様に子供たちが物質的生活に影響を与えるものを相続するというのも、大いに重視されてしかるべきなのである。

相続問題について論じている以上、われわれは女子の相続問題に関するイスラーム社会主義の見解をのべる必要があるだろう。

われわれはしばしばつぎのような質問を耳にする。

「娘は何故彼女の兄弟と同等の分け前をもらわないのか。」

イスラームの敵は、これこそ社会主義のもっとも単純な原理に反する分配の不平等の証拠であるという。この問題を考えるにあたってわれわれは、ぜひとも娘の相続に関するイスラームの立場について考えてみる必要があるだろう。

あるユダヤ人集団は息子達にのみ遺産を与え、娘たちからは完全に相続権を奪っている。また11世紀に至るまで、イギリスでは妻が売りに出されている。また1567年には、イギリス議会は女性があらゆる影響力を持つことを禁じているのである。

アラブは女性があらゆることに能力があるとは考えていない。なぜならば彼らの関心事は闘争、防衛、ならびに名誉を守ることだったのだから。これらすべてを行ないうる者こそ、名誉と繁栄に価したのである。女性は馬にのり、武器をもって敵と戦わなかったため、相続権を与えられていなかった。それゆえ彼らの間での相続は、武器を持ち戦うことのできる男子のうち、戦場において英雄的な態度を示しうる者にのみ限られていたのである。武器を持てぬ子供たちも、女性同様相続権を与えられていなかった。もしも1人のアラブが死に、その後女性だけしか残されなかった場合、彼の財産は彼らの伯父に与えられたのである。娘たち、母親たちは何一つ遺産を与えられなかったのである。そればかりでなく、妻もまた物質同様相続されうるものとされていたのである。

イスラームが登場すると、まずこの諸権利に関する差別待遇に注目し、社会の半分を構成する女性が非常な不正、圧迫をこうむっていることを重要視したのである。男子が生活の重荷を背負っているのと同じく、女性もまたおなじ重荷を負っている。それゆえ彼らが同じ責任を負っている以上、権利においても平等であるべきなのである。

ある日サアド・イブン・ラビーッの妻が預言者——彼に平安あれ——のもとにやってきていった。「アッラーの預言者よ、ここにサアド・イブン・ラビーッの2人の娘がおります。彼女らの父は貴方のためにウフドで戦い、戦死しました。そして彼女たちの伯父が財産を取ってしまい、彼女らには何も残っていません。しかし財産がなければ、彼女たちは結婚もできないのです。」

聖なる預言者は、「アッラーがこのことを定めて下さるであろう」といい、その後につぎのようなクルアーンの1節が啓示されたのである。「アッラーは子供たちについてつぎのように申されている。男子の取り分は女子の2人分。」

それから預言者は彼女らの伯父に使いを出し、彼に命じた。「サアドの

2人の娘には遺産の3分の2を、彼女等の母には8分の1をやり、その残りをお前のものとせよ。」

イスラームにおいて娘が相続権をもったのは、この例をもって嚆矢とするのである。

このように、娘は男の兄弟の半分を相続しうると定めることによって、イスラーム社会主義は公正と平等を確立したのである。一見したところこの配分は公正ではなく、イスラーム社会主義は分配に関するかぎり正しくないと思われるであろう。しかし少し思いをはせてみるならば、損失と利益、義務と責任という観点から、イスラームのこの配分は正当だといえるのである。これは息子と娘に課される義務、責任の多寡について考えてみれば、すぐに明らかになることであろう。

彼女が結婚していない場合、娘は結婚するまでの生活の費用を相続の分け前からうることになるだろう。そして彼女が婚約した場合には、彼女の婚約者が彼女に結婚支度金を与え、結婚が成立する前に婚約者は彼女に贈物をしなければならぬことになっているのである。その後に娘は結婚の準備をととのえ、結婚が成立することになるのである。彼女の夫は、子供たちその他の心配をし、子供たちにかかる諸経費を含めて生活費を捻出する義務がある。結婚後妻は、何一つ支払う義務はないのである。

一方彼女の兄弟は、自分で生計をたてていく一方、婚約者に結婚支度金を払い、結婚の贈物をし、家の一切を準備し、妻子にかかる費用を調達しなければならないのである。彼はイスラーム法によってこれらの費用を調達すべく要求されているので、彼はこうした費用を払っていかなければならないのである。彼はこうした重荷をすべて背負っていかなければならないが、妻はこれに関係なく、1銭も支払う義務がない。

ここでわれわれは、すでに結婚し、何の支払いの義務もなく、自分の富から利益をあげるためにそれを投資している娘と、あらゆる重荷を背負い、すべての諸経費を支払わねばならぬ息子の立場を比べてみよう。比較の結果は

明らかなのである。公正な人間は、何の躊躇もなくイスラームのこの正当な配分法に従い、その社会主義が、危険と利益という基盤の上に公正な配分方式を確立していることを認めるであろう。

## 利 息

イスラームにおいては、あらゆる財産はアッラーのものである。アッラーは、社会にそれを利用するよう命じており、個人は集団の代理であって、社会の利益を保証するためにそれを投資し、増やすよう心がけるのである。彼はそれを貯めこんで流通を妨害するようなことをしないが、その理由はこうすることが集団の利益にならず、結局その集団を害することになって、アッラーの定められたイスラーム社会主義の主旨に抵触してしまうからである。アッラーは富を貯めおく者には、刑罰を与えるといってこの行為を戒めている。

「金銀を貯めおき、アッラーの道に使用せぬ者ども。彼らには厳しい刑罰が課せられるぞと伝えてやれ。地獄の火でこれらが熱せられたとき、彼らの額も両脇も背中もこれらで烙印が押されるであろうと。これこそまさしくお前たちが貯めこんだものを示す明らかなしるしなのだ。」

社会の必要、利益にかなうよう、神によって定められた金銭の使用法に準じなかった者の運命については、クルアーンはこのように怖ろしい光景を描きだしている。金銭なしには、これらの利益は実現されず、また生活も豊かにはならないであろう。アッラーのために金銭を使用するということは、或る種の人々が想像するように、それを貧乏人に分配することではない。それは金銭を、人々の必要を補なわせ、生活の妨げとならぬよう利用することなのである。

だがひとはいうであろう。われわれがこの金を所有しているかぎり、それを使用しようが貯めこもうが、われわれの自由にすることができる。さもな

ければ、所有権の意味がないではないか。

このような質問についての解答は、すでに私有権の章で与えられているはずである。つまり所有権とは、利用のための所有権であり、財産の所有者は、実はその被信託者なのである。彼は自分の職能を正しく果たすこともあるし、それを放棄しイスラーム社会の統制を乱すこともある。また彼は財産を正しく利用することもあるし、その社会的機能を損なわせることもある。富の所有者は、その使用に関して完全な自由を持っている訳ではなく、彼の自由は公共の利益に制限をうけているのである。

この場合ひとは、つぎのように問うことができるであろう。金銭の機能が、それを継続して使用することにある以上、この主旨にそって特別の使用法を行なうべきであろう。

さて私は金銭を所有し、それを他人が利用するためには彼に与え、それによって私自身の利益をあげることができる。私は金を投資のため他人に与え、その金が帰ってきたときに利益をあげうるであろう。これも集団によって金銭を利用させ、自分の金を増やす方法である。

このような場合イスラーム社会主義は十分な役割をはたすのである。なぜならばそれは、たんに効用の社会主義であるばかりではなく、努力の社会主義でもあるのだから。

イスラームにおいては、利息は違法であり、忌むべきものであって、特に悪しきものとみなされている。利息は、充分に労働し、生産をあげうる社会の成員を怠惰にしてしまうのである。

利息をあげる金貸し業に従事することは、クルアーンがかたく禁じていることである。

「お前たちが利息をあげるためにおもいをめぐらせ、財産をふやしたとしても、それは人間の間みのもの、アッラーのみまえて財産をふやしたことはない。だがアッラーの御心にかなうようお前たちが喜捨したものは、何倍もの真の利益をあげるのだ。」



「お前たち信者のものどもよ、金貸し業を行なって金を2倍、4倍にしようなどとしてはならぬ。ただアッラーへの義務を果たせば、お前たちは成功者となるであろう。」

「利息を喰らう人々は、（復活の日）ずっと立ち上がれず、悪魔になぐられた者のような（情ない）立ち上がり方しかしないだろう。それというのも彼らは、商売も利息取りも同じと考えているからだ。アッラーは商売はお許しになった。だが利息取りは禁じられたぞ。」

「アッラーは金貸しを卑しめ、喜捨をこそ栄えさしめるであろう。アッラーは感謝の念なき罪人を愛し給わないのである。」

「お前たち信者のものどもよ、アッラーへの義務を果たせ。そして正しい信者であるならば、金貸しによって得たものを手放すようにせよ。もしもこうしない場合には、アッラーとその御使いの挑戦をうけることになるだろう。だがもしもお前たちが後悔するようならば、元金だけはお前らのものとなるであろう。邪しなことをせぬかぎり、不当な仕打ちをうけることはないことを知れ。」

イスラームが嫌うのはこのような金の所有者のみではない。ジャビールはいつている。

「アッラーの使徒は金貸し人とその代理者、書記、証人をも非難してつぎのようにいわれている。『連中はみな同じ穴のむじなだ。』と。」

このようにイスラームは、人々に害を与え、他人が困窮しているときに、それを良い機会とばかりに利を貪ることを禁じているのである。ひとは医療費を必要とし、食べ物をもとめ、あるいは教育費、その他生計を立てるために金を必要とすることがあるであろう。これらすべてが無視される場合も考えられるが、金持ちが、金を必要とする者に少額の金を貸し与え、巨額の返済を要求する場合もあろう。ところで貧乏人は、返済期が来ても借金が返せず、借金は何倍にもかさんでゆき、結局少額の金の利子がかさみにかさみ、これを返すために彼は自分の持っているものを全部つかいはたし、それでも

借金が払えなくなることになることもありうる。金貸人が利益をむさぼり、それを不当に享受した場合、彼は金を所有しているという事実のみで、労働もせず、努力も払わずにこれらすべての利益をあげることになるのである。

イスラームは労働を神聖視し、預言者はつぎのようにいっているのである。

「激しい1日の労働のあと床につく者は、その罪をゆるされるであろう。」

イスラームは労働を、所有権と利益の基礎としているのである。この教えは、金持ちが働きもせず、怠惰な生活をして、自分の金を利用し、金に金を産ませることを認めてはいない。労働こそは所有と、合法的な獲得の基礎なのである。

利息をもとに生活しているものは、人格、良心を2つながら持ちあわせていない。利息は、社会の最も健全な原理、協力を破壊するものなのである。そしてクルアーンはつぎのように協力を呼びかけている。

「廉直さと慈悲においてはたがいに協力し、罪悪と侵略にさいしては力を合せてはならぬ。」

利息は、たがいの精神を高揚させ、心から羨望、憎悪の念を奪いさる、人民のよるべき基本的な関係、協力関係を破壊することになるのである。

金を利用することは、社会のすべての成員の権利である。そしてこれは富の所有者のみに限られた権利ではない。各個人は、もしも彼が金を所有していなくともこの権利を認めることができるのである。彼は利息なしに金を借りることができるのである。これこそは人々の間に善意と協力関係を作るものであり、富者と貧者の間に、有能な者と無能な者の間に連帯関係を確立するものなのである。

金銭それ自体にはいかなる美德も存在しないのであり、それを利用すること、それを獲得するために努力することにこそ美点が存在するのである。金を借りた者は、それを自分のものとするために努力を払うのであり、彼の努力が作りあげた利益は彼にこそ帰すべきなのである。そして金の所有者は、その貸付金が生産のためのものであろうが、消費のためのものであろうが、

利潤なしに彼の金を返済してもらうべきなのである。

もしもこの貸付が生産のために行なわれた場合には、金の所有者と借り手は協同して購入することが可能であろう。そのさい前者は彼の金で、後者は彼の労働で購入することになり、同時に彼等は2人で利益をあげ、また損失をカバーすることになるのである。

しかしもしも金の所有者が、借り手の損得を度外視して、彼の貸付金にたいし一定の利益を要求した場合には、イスラームと抵触することになるのである。なぜならばそれは、努力なしに得られた利益に他ならないのだから。イスラームは、貸借にさいしては利息をとってはならぬと規定しているが、これは借り手が金を増やし、それを投資するということによって金銭の社会的機能が果たされ、所有者の独り占めによる弊害をさけうという理由からなのである。

もしもこの金が消費のために、つまり私的な必要のために使用されるとするならば、この公共の金を利用するのは借り手の権利であって、彼は可能なさいに借金分だけを返せばよいのである。この点について聖なるクルアーンはつぎのように規定している。

「もしも（借り手）が困っている場合には、（返済が）容易になるまで待ってやれ。」

この問題について種々の法的規制を設けると同時に、イスラームは魂と良心に呼びかける心得を述べることを忘れてはいない。預言者はいつている。

「売り買い、あるいは貸付金を取るさいに寛大な態度をとる者を、アッラーの嘉し給わんことを。」

貸付金の取り立てにさいしての寛大な態度は、借り手の自尊心を損なわず、彼の心に貸付人にたいするふかい愛情を呼びおこし、結局この借金を返済するために彼を熱心な労働へとかりたてるのである。預言者はまた、つぎのように忠告している。

「最後の審判の日の苦業を逃れようとする者は、苦しめる者を助けてや

れよ。』

また他の伝承はいつている。

「貧しき人を助け、その苦しみを和らげた者は、審きの日に神から、その玉座の影の助けを施されるであろう。神の影以外に何のたよりもないその日に。」

金を貸し与えた者に、困った人々にたいする寛大な態度をすすめる一方イスラームは、貸与の美德に返済の美德をもってむくいさせ、個人間の取引にさいしての信頼感を強めさせるため、金の借り手に必ず借金を返すよう戒めている。預言者はいつている。

「必ず返済しようという覚悟で金を借りる者には、彼の努力が成就するようアッラーは助力をおしまれないだろう。しかし金を借りながらそれを使い果たしてしまうだけという人間は、アッラーにより滅されることになるぞ。」

預言者はまたつぎのような警告を発しているのである。

「支払いの延期は不正である。」

以上はすべて、金の借り手が全力をつくして借金の返済にあたるべきであることを示している。そうしない者は不正な人間であり、

「アッラーは不正を嘉し給わないのである。」

## 社 会 的 連 帯

すでにわれわれは、イスラームにおける金銭の所有の本性、ならびにその機能について論じた。そしてイスラーム社会主義の真の目的が、公共の利益に奉仕することであることは明らかであろう。つぎにわれわれは、利己主義ではなく、利他主義にもとづいて人類の豊かな生活を確保し、同時にすべての人間が良い生活をおくれるように集団的連帯感を作りあげるために、この社会主義がいかなる方法を用いているかを検討してみることにしよう。

イスラーム社会主義は、人間の本能におもねるような唯物的なものではなく、物質と精神を共に認めている。イスラームは、個人が各自の義務を守り、さもない場合には刑罰に処せられるような法的諸規定を設けている。この他にもイスラームはかずかずの心得を述べ、人々の良心に訴えかけ、彼らが刑罰を怖れてではなく、自ら善を求めて、一致協力して善行をなすよう呼びかけているのである。かくして精神は高貴なものとみなされ、その目的とするところは名誉に価するものだとして評価されているのである。そして少なくとも世界は、一時代に、公正と友愛的連帯、善と利他主義のための協力という要素が満ちあふれた社会をまのあたりにすることができたのである。クルアーンはこれについてつぎのようにいっている。

「よし貧困が彼らを襲うようなことがあっても、自分たち以上に（人々を）尊重し……」

イスラーム社会は、いかなる貧乏人も喜捨を与えられる権利を行使しなかったという段階を、かつて一度経験しているのである。このようにムスリム社会における社会主義的連帯というものは、一つの真実の、具体的な事実なのであり、その影のもとに人々は少なくとも多少の時を過ごしたことがあるのであって、実際その具体的な足跡をわれわれはいまなお見出すことができるのである。そしてイスラーム社会主義が適用された時代が永続しなかったとしても、それはこの社会主義の責任ではなく、むしろ政治的要職につき、この社会主義適用の任にありながら、事実上イスラームを弱体化せしめてしまった連中の責任だといえるのである。彼らはあらゆる機会を用いて金を貯え、土地をわがものにし、結局イスラームを卑しめ、その歴史と彼ら自身の歴史に泥をぬってしまったのである。しかし彼らはたんに、イスラームの外面的な様相を拭いさってしまったのみであり、永遠にして不朽の、そしてまたその中にこそイスラームの力がひそんでいる、イスラーム精神を破壊するまでにはいかなかった。われわれは新鮮な努力が、この精神を蘇生させようとするときにはいつでも、生き生きと光り輝く姿を見ることができるので

ある。現代においてもわれわれは、それが蘇生したさまを見うけるし、またその影響を肌で感じることができる。なぜならばイスラームの精神は永遠、不滅のものであり、誰かがその道から障害物をのぞくだけでそれは再び姿をあらわし、その建設的な力を発揮して、人類の福祉に至る道を照らし、繁栄と幸福と平和に満ちあふれた生活という、万人の希望を実現するのである。

イスラームは、社会の中に具体的な社会的連帯を実現させるべく種々の規制を設け、教訓を与えている。ここでわれわれはこの連帯に関する法則についてのとべることにしよう。その第1はザカート、つまり喜捨税である。

ザカートは一つの社会的権利である。それは富者から貧者にたいする贈り物といった性質のものではなく、社会的連帯達成のための一手段なのである。それはまた信仰の一形態であり、つまり言葉をかえていうならば社会的、宗教的義務なのである。

ザカートという言葉は、アラビア語で純粹、あるいは増加を意味する。それは義務を遂行することによって良心と責任感を洗い清め、同時に心、精神から貪欲さ、利己心を洗い流すのである。その中にはまた祝福の希望があり、精神の浄化と善行によるその強化が存在するのである。クルアーンはいつている。

「彼らの財産より喜捨を取れ。お前はそれにより彼らを洗い浄め、彼らを純潔にするのだ。」

ザカートの観念は、すべての人々が仕事に従事できる訳ではなく、ときには仕事のできる人が職を見出せぬ場合もあり、また職はあっても給料が諸経費を支払うのに足りないときがある、という原理にもとづいているのである。この場合彼らは、同胞であるムスリムが所有する余剰の金であり、それで彼らの必要を満たしてやるべきだと定められている金額をうけとる権利がある。クルアーンはいつている。

「そして彼らの富のうちには、乞食や好運に恵まれぬ者たちの取り分もあるのだ。」

これはつまり、年間の必要経費以上の収入にたいして、各個人が一定の割合で支払う義務である。これは住居、毎日の着物、食料、当人の使用する武器、交通手段、個人所有の図書、生計をたてるために用いられる道具といった生活必需品を除外している。ザカートは実際に行なわれている商取引、家畜、農業、婦人の宝石等から取られるのである。

初期イスラームにおいては、ザカートの義務はメッカにおいては自由であり、また支払われるべき金額の多寡も特に定められてはおらず、ムスリムの寛大さの個人的なセンスに委ねられていた。<sup>ヒジュラ</sup>遷都後2年になってザカートの明確な規定がなされ、あらゆる財産の細目についての定義が下されたのである。ザカートは、イスラームの5行のうちの第3番目に相当するものなのである。聖なる預言者はいつている。

「イスラームは5つの原理の上にたてられている。つまりアッラー以外に神はなく、ムハンマドは彼の使徒であることを認めること。礼拝を行なうこと。ザカートを行なうこと。ラマダーン月に断食を行なうこと。可能な者は聖なる家に巡礼に赴くこと。」

アッ＝タバラーニーは、アリー・イブン・アビー・ターリブよりの伝承としてつぎのようなムハンマドの言葉を伝えている。

「アッラーは富めるムスリムにたいして、貧しい者の必要を満たすに十分な金を彼らに与えるよう申しつけられている。ひとが着物も着ず、飢えにあえぐのは、富める者の怠慢によるのだ。神は彼らの態度を厳しく非難され、極刑を下されるであろう。」

もしもムスリムがザカートの支払いを拒んだ場合、政府はこれを力をもって徴収し、彼を罰するばかりでなく、彼の財産の一部を没収しうる権利をもつのである。預言者はいつている。

「アッラーの報奨を期待してザカートを与える者は誰でも、ひとしく祝福されるであろう。だがそれを拒む者からは私はそれのみでなく、彼の財産の一部をも奪い取るであろう。」

以上はすべて、イスラームがいかにザカートを重要視し、それを5つの信仰の柱の1つとしたかということを示しているのである。このためには戦いを挑むことすら許されているのである。初代カリフ、アブー・バクルは、ザカート拒否した者にたいして、イスラームを棄てた者同様の扱いをしている。彼はいつている。

「もしも人々が、以前預言者に支払っていたもののうちから1本の鉢巻分だけの支払いを拒んだとしても、私はそれを理由に彼らに戦いを挑むであろう。」

ザカートは財産に課された義務であり、それに相応しい人々の義務なのであって、彼らからの恩恵ではないのである。

ザカートの総額はアッラーによって規定されている。アッラーはその支払いの細目を定めているが、その処置についてはクルアーンのつぎの1節が詳しい定義を行なっている。

「(ザカートの)喜捨は貧しき者、困窮者、ならびにその仕事にたずさわるために雇われた者、(真実に)心が傾いた者、虜われの者を解放しようとする者、借金に悩む者、またアッラーの道を歩む者ならびにさ迷い歩く旅人たちのみのものである。」

貧乏人とは、彼の所有する財産がザカート支払いの対象とならぬ者。また借財のために何一つ所有していない者をさすのである。

困窮者とは無一文で、ザカートを当然受けとりうる者のことである。

ザカートの仕事にたずさわる者とは、それを徴収する人々をさすが、彼らはザカートをうる権利がある訳ではなく、むしろこの仕事の賃金としてこれから支払いを受けることになるのである。

真実(イスラーム)に心が傾いた者とは、新たにイスラームに改宗した者をさすのである。彼らは、彼らの心を強化し、他人を引きつけるためにザカートをうる。ただしこの措置は、背教者との戦いののちに廃止された。

虜われの者とは、奴隷たち、奴僕たちをさすが、彼らは自分たちの代価を



主人に支払うことによって自由を購うことができたのである。イスラームは、彼らが自由をかちうよう援助を与えていたのである。この措置も条件が変わって沙汰止みとなった。

借金に悩む者とは、合法的な借財を返済しえない者をさしている。

アッラーの道のための使用とは、各状況に応じて規定される一般的な措置である。これには聖戦のための装備、病人のための医薬品、貧乏人の教育、その他イスラーム社会の利益を実現するためのあらゆることがらが含まれている。この範疇に入る支出は、あらゆる事態、状況における、すべての社会的な仕事に充当されることになるのである。

さ迷い歩く者とは、財産を剥奪され、使用する金をもたぬ者、例えば戦争、侵略、圧政を逃れて避難してきた者のように、財産を残してきたまま、それを取り返す策もないような人々をさす。

ザカートの使用のためにイスラームが規定している、これらの諸範疇は、生活の多くの部門で社会的連帯を確立する力となっている。それにもかかわらずこれは、贈与ではなく、すべてムスリムに課された義務なのである。つまりこれは人々に、彼らが社会的連帯のための支出を分担し、困窮した同胞を救う義務があることを教えているのである。またザカートの総額は財産のごく僅かな部分、つまり基本的な必要経費を除いた余剰収入の40分の1にしかなかったらなのである。この程度の小さな額は、自発的に、喜んで支払われることであろう。しかしそれにもかかわらずこれは、一堂に集められると巨額なものになるのである。

ザカートはまた、富の配分と循環の一要因となっている。イスラームは、同胞が基本的な必要もみたしえないでいるさいに、少数の人間が財産を独占し、それを享受することを非難している。クルアーンのつぎのような指摘は、これに関する一般的原理について示唆を与えてくれるであろう。

「お前たちのうちの富める者が、それ（金）を独占してしまわないように……」

イスラームは貧困と困窮を非難しているのである。聖なる預言者はいつている。

「貧困とは不信に近い。」

イスラーム的見解によれば、可能なかぎり各人は自分自身の努力により生計をたてるべきであるが、何かの理由によりそれが不可能になった場合、彼は共有財からの補助を受けるべきなのである。ザカートを受ける権利のある人々にこの権利が実際に与えられるのは、彼らが人間の尊厳を維持するための諸必要をみたす手段を見出しえなくなった後のことなのである。ザカートは義務であり、贈与ではないが、預言者はつぎのように主張している。

「与える者は、受けとる者より名誉ある存在なのだ。」

彼はこのようにして、人々が無関心に陥らぬよう労働を勧めているのである。

あるとき1人の乞食が預言者の許にやってきて、金を恵んでほしいといった。預言者は少額の金を与え、彼に薪を束ねるための紐を買い求め、自分の仕事をたのみに生活するよう諭した。

「与える者あり、与えぬ者もある、他人から物乞いするよりは、1本の紐を買い求め、自らその背に薪を背負い、それを売の方が遙かに良い行ないである。」

ザカートはたんに富であるばかりでなく、財産に課された最低の必要額である。なぜならば人々は、その額のみで一応必要をみたすことができるのだから。

イスラームはザカート以外にも喜捨を求め、人々にこれを奨励している。喜捨を行なう人々は、良き報酬をうけることになっているのである。クルアーンはつぎのように規定している。

「アッラーの道のために富を捧げる者は、たとえていえば7つの穂を作りだす1粒の種子のようなもの。1つの穂には百の種子が稔るのである。アッラーは御心にかなう者を、さらに篤くもてなし給うのである。」

またクルアーンの他の1節はつぎのようにいっている。

「顔を東に西に向けることが正しいことではない。正しい者とはアッラーを信じ、審判の日、諸天使、聖なる書、預言者たちを信じ、アッラーの愛を求めて、富を縁者、みなし児、困窮者、さ迷い歩く者あるいは物乞いする者にあたえ、また奴隷の解放に費やす者のことである。」

クルアーンはまたいっている。

「アッラーとその御使いを信じ、アッラーがお前たちに与えた財を（正しく）用いよ。」

またクルアーンはつぎのように説明している。

「夜となく昼となく、私のためにも公のためにもその富を用いるものは、その報いとして主とともにいることが許される。彼は怖れることなく、悲しむこともないだろう。」「善行のために費やしたものは、必ずお前たちに良い果実をもたらすであろう。」

支出には2つの種類がある。つまり義務的なものと自発的なものである。

義務的支出にはまた2つの種類があげられる。つまりアッラーのための支出と、困窮者のための支出である。

義務的支出は、富の所有者の好悪の如何にかかわらず、為政者が取り立て、支出する権利を持つ富がこれに充当される。

自発的支出は、いかなる強制もなしに富の所有者が自発的に行ないうるものである。

預言者はいっている。

「ザカート以外にも富にたいする他の権利があるのだ。」

もしもザカートが充分でないときは、為政者は“公共の利益”という原理にしたがって社会的利益を確立し、同時に彼らが社会的福祉の実をあげようと考えたことを実行するために、それ以外の金額を徴収する権利を持っているのである。預言者の時代にはこうした必要がなかったので、これに該当する原典は存在しないが、この原理についてはほとんどのムスリム法学者が同

意しているのである。

この他にも「恵みに至る道をすべてふさぎ」、正しき道を歩ませるという、クルアーンと伝承によって規定された原理が存在するのである。この原理は、天から与えられた福祉を守り、悪を駆逐するという原理であり、これが広範囲に適用されるさいには、支配者たる者はあらゆる社会的害悪を阻止する一方、社会的公正、社会的連帯を成就するという目的で、絶対的な力が与えられる。私有権の原理は、国家が社会的要求によってのみ限定されうる、任意のパーセンテージの利益、資本を要求することを拒んではない。

この基本となる原理は、財産が社会のものであり、個人はその代理人であるという考え方であろう。社会は、社会の利益に反して金銭を独占したがる個人を無視して、これを利用する権利をもつのである。

イスラームは社会的連帯を達成するために、ザカート、富の利用のみで止まっている訳ではなく、個人のあらゆる過ちにたいする社会の側の他の矯正的権利を確立しているのである。神は人間を創りたまひ、人間の秘めたる意志を知りたまふ。神は人間の性が弱く、誤りやすいものであることを知っており、なおかつその恵みを人間の近くに用意したまうのである。アッラーは個人によって犯された罪を償うために、貧乏人、困窮者に衣食を与えるよう命じられているのである。ムスリムの良心はつねに目覚めており、敏捷であるが、彼とても人間である以上過ちを犯さぬことはないのである。彼は罪を犯したさいに、ただちに慈悲深く慈愛あまねき神の御許に急ぎ、悔悟し、宥しを乞わねばならない。こうすれば神は、必ずや彼の悔悟をうけ入れてくれるのである。イスラームは物質と精神とを結合させ、これを切り離してはいない。心弱きムスリムが過ちを犯し、後悔して神の御許に戻った時には、彼はこの過ちの代価を金で支払わねばならないのである。金とはとにかく貴重なものであり、過ちの代価を支払うことによってある種の人々が同じ罪を犯すことを防止しうるのである。イスラームは一々の罪について、悔悟のための代価を規定している。物質的、精神的な生活は、一方が他に優位を占めること

なく融合しており、誰もその一方を尊重し、他をないがしろにすることはできない。だが何ごとにも適度ということがある。クルアーンはこれらの刑罰について多くの個所で述べている。ある節は述べている。

「アッラーはお前たちが、仇な誓いを述べることを命じられてはいない。お前たちは慎重な誓いをすることが必要なのだ。それを果たすには、お前たちは自分の家族に与えている普通の食物の10人分、あるいは10人分の着物を提供するか、奴隷を1人解放せねばならぬ。」

他の節はいつている。

「お前たち信者のものよ、巡礼の途中で動物を殺してはならぬ。もしも意図してだれかがそれを殺したならば、2人の公正な人間が彼の殺したものに相当すると認める家畜をカアバの神殿に捧げるか、貧乏人に糧を与えて宥しをえなければならない。」

また断食についてクルアーンはいつている。

「病気であったり、旅の途中にあるものは、後に同数だけの日数、断食を行なえばよい。また断食が非常に困難な者の場合は、貧乏人に施しを与えることで代替される。」

巡礼時の清潔さについてクルアーンはいつている。

「捧げものを与えられるまでは、髪の毛を剃ってはならぬ。またお前たちが病気であったり、頭に痛みがある場合には、断食、喜捨、犠牲の奉納でこれを代替せよ。」

離婚の償いとしてクルアーンはいつている。

「妻を『背中云々』の文句で離婚したのち、ふたたび彼女らと関係を持つとうとする者は、たがいふれあう前に奴隷を1人解放しなければならぬ。お前たちはこのようにすることを勧められているのだ。アッラーはお前たちの行ないをすべて知り給うのである。しかしその手段をもたぬ者は、たがいふれあう前に2ヶ月間断食するか、それもしない者は60人の貧者に食を与えなければならぬ。」

イスラームは、ラマダーン月の昼間に性交にふけり、このようにして断食の掟を破った者は、その罪をつぐなうために奴隷を1人解放するか、2ヶ月間の断食をつづけるか、60人の貧乏人に食物を与えねばならぬと定めているのである。

悔俊に関する節は、個人が不可能なことをただの1つも定めておらず、むしろ彼が果たしうることを選択する余地を残しており、その利益が社会に還元されるような狙いを持たせているのである。奴隷を解放するということは、死体をよみがえらせるようなものなのである。なぜならば隷属は死そのもの、あるいは死のごときのものであり、自由こそは生命なのだから。また断食によって人の心は純化され、ひとはアッラーにたいする、あるいは人類にたいする義務の何たるかを知り、またそれを実行するようになるのである。貧乏人、困窮者に食料、衣服を与えることによって、社会は直接に利益をうけるのである。以上のすべては、これらの悔俊の行ないが社会的連帯のための種々の企ての大きな財源となることを示している。

しかしこれらが、イスラームにおける社会的連帯達成のための唯一の手段ではない。イスラームは働くことの不可能な者に多くの富を与えているのである。戦利品についてクルアーンは規定している。

「戦いでえたものの5分の1は、アッラーとその使徒、ならびに近親者、孤児、困窮者、さ迷える者たちのものであることを知れ。」

クルアーンはまたいっている。

「アッラーが町々の民からとりあげ、彼の御使いに授けられたものは何でも、アッラーとその御使い、近親者、孤児、困窮者、さ迷える者たちのものである。」

戦利品の一部は、社会的連帯のための費用として用いられているのである。これと同様のことは他の民のうちには見出されないのである。さらにイスラームは、各人がその遺言により、自分の財産の3分の1を慈善のため、あるいは彼が困窮していると思った親族に与えることを許している。ただしこの

種の慈善は、相続者が遺産相続しえぬ額に達してはならない。

遺産の配分については、クルアーンはいつている。

「分配にさいして親族や孤児、困窮者がいる場合は、彼らにも分け与えてやり、やさしい言葉の一つもかけてやれ。」

イスラームは社会的連帯を確立するために、社会全体に責任を持たせているのである。預言者はいつている。

「もしもある一団が、食糧も与えずに誰かを置きざりにした場合、アッラーはその1団を見捨て給うであろう。」

アブドッ＝ラフマーン・イブン・アブー・バクルはつぎのようにいつている。

「伝承の蒐集者たち（注 一生を預言者の伝承の蒐集、保持に捧げた預言者の助力者の一団）は貧しかった。だが聖なる預言者は伝えている。『2人分の食糧しか持たぬ者も、3人目の男に分けてやれ、4人分しか持たぬ者も、5人、6人で食事せよ。』

アブー・サイード＝ル＝ヒドリーは預言者のいった言葉として、つぎのような言葉を引用している。

「余分の馬や駱駝を持つ者は、それを乗りもののない者に与えるべきである。そして余分の食料を持つ者は、困っている者に与えるべきなのだ。」アブー・サイードはさらに付け加えていつている。

「預言者は財産について種々のカテゴリーを設けているが、結局われわれの誰しも余分のものを所有する権利を持たぬようになっているのだ。」またイブン・ハズムはいつている。

「あらゆる都市の富者は貧者の面倒を見る責任がある。そしてザカート、その他のムスリムの基金が十分でないときには、支配者たる者は、富者にたいして食料、夏冬の上服、雨、熱、太陽、通行者の眼をさけるための避難所を貧乏人に提供させる権利がある。」

このように社会は、そのすべての成員のために社会的連帯を確立する責任

をもつのである。

## イスラームにおける平等

アッラーは聖なるクルアーンの中でいっている。

「人類よ、たしかにわれわれはお前たちを1人の男と1人の女から創りだし、たがいに面識あるように部族や家族としてまとめた。たしかにアッラーにとって最も高貴な存在は、お前たちのうちでもっとも義務感の強い者である。」

アッラーはまたいっている。

「人々よ。お前らの主にたいする義務を果たせ。彼は1人の者からお前たちを創り、またその者から配偶者を創り、両親から無数の男と女を増やし広められた方である。」

預言者はいっている。

「丁度櫛の齒のように、どの人間も他と等しいのだ。ただ敬虔さにおいて、アラブは非アラブに勝っているのである。」

また預言者はいっている。

「イスラームにより、アッラーはイスラーム前のアラブの奢り、彼らの祖先にたいする自負心を取り除かれたのである。なぜならば人類はすべて、土くれから創造されたアダムの裔なのだから。神より最も高い榮譽をうける者は、最も敬虔な者なのだ。」

これらの文章によりイスラームは、いかなる制約、例外をも許さぬ、完全な平等を主張しているのである。この平等は、すべての者の上に課されているのである。いかなる個人、集団、種族、皮膚の色も、他より優れているということではなく、また支配者が被支配者より優れているということもない。これこそイスラーム的平等に他ならないのである。全人類は1つの源から発しているものであり、誰一人他より優れていたり、高級な存在であることはな



くすべて平等である。

クルアーンの多くの節がこの原理について述べている。

「われわれはお前たちを、普通の水から創りださなかったか。」

「それゆえひとは、自分たちが何から創られたか考えねばならぬ。人間は、腰から射出される精液から創られたのだ。」

「アッラーはお前たちをはこりから、そして生の胚種から創り、その後に対しし給うたのだ。」

各個人が同一の源からでている以上、差別や優位に関する正当性はどこにあるというのであろう。

すべての人間がイスラームの前では平等である。預言者はいつている。

「われわれは自分の奴隷を殺した者を殺し、奴隷を傷つけた者を傷つけ、奴隷を去勢した者を去勢するであろう。」

彼はまたこうもいつている。

「キリスト教徒がマリアの息子を崇めるように、私を崇めてはならぬ。私は神の召使いであり、したがって神の召使い、もしくは神の預言者と呼ぶべきなのだ。」

彼がある人々のところに赴いた時、彼らが彼にたいする敬意のしるしとして起立していたことがあった。その時に彼はいつている。

「人々が自分のために起立することを喜ぶ者は、確実に地獄に席を設ける者となろう。」

また預言者は自分の部族、家族によくいつていたものである。

「私はお前たちにとって、神に代るものではない。」

これこそすべての人類を包含する、完全なる平等なのである。

しかし平等の原理は多くの問題を孕んでいる。平等とは、いかにして制限なくありうるのであろうか。男と女との間に、また有識者と無知な者、勤勉な者と怠惰な者、頭の良い者と悪い者の間に差異は一切存在しないのであろうか。これらすべてのことは、いかなる社会にも存在しうることであり、何

人といえどもこのような人間的差異を否定しえないのである。しからばいかにして完全な平等は実現されうるであろうか。

イスラームの意図する勤勉とは、すべての人間が人間性を平等に分け与えられ、アッラーと法の前ではひとみなすべてひとしいという考えに準じている。法はすべての人々に適用され、富者と貧者、強者と弱者、有識者と無学な者との区別なく、各人があらゆる領域において他と同様の権利と機会をもちうるのである。こうしたすべての点において、平等は絶対的なものである。しかし個人の特殊な能力に相異があり、社会の側から要求される義務や任務の遂行に差異が生じた場合、優劣が生じてくるのである。このさい優れた者と劣った者、勤勉な者と怠惰な者、心善き者と悪しき者等々の区別があらわれ、平等は絶対ではありえなくなるが、これは絶対的平等というものが人間性と合致しないからである。クルアーンはいつている。

「いえ。知れる者と知らざる者は1つにあらず。」「ひとはみずから努力したものをするのみ。」

イスラームは努力と報酬、労働と賃金という観点から、有識者と無学な者が同等でありえず、各自その努力に応じて報酬をうくべきだとしている。このように規定しているのは公正さであり、この原理によりイスラームは個人を優越、鍊達へと向かわせ、最大の努力により最大の報酬をあげさせるよう自然の本性を統治するのである。これにより社会の利益と繁栄の実があがることは、いうまでもない。

またイスラームの平等理論で問題となるのは、男女平等の問題である。

イスラームは男が女より優れたものとしている。しかしこの問題を討議する前にわれわれは、イスラーム前とその後の年代の他の社会における女性の地位について論じることになろう。

アテネの人々は女性の地位をないがしろにし、彼女たちを人間扱いせず、他の動物同様売り買いできるものと考えていた。彼らは彼女から行動の自由の権利を奪い、家事と子供を産むこと以外何の役にも立たないと見なしてい

たのである。むしろ彼女は動物なみの清潔さもなく、不潔な、悪魔の手になる被造物にすぎなかったのである。

インドにおいては、マヌの法典は女性を1個の人格と認めず、彼女の父、夫、息子に従属するものと考えていたのである。もしもこのような近親者が存在しない場合、彼女は夫の親類の誰かと関係を保たねばならないのである。彼女は決して自分自身の主であることを許されないのである。彼女の生命は夫の生命と固く結び合わされており、夫が死ぬとその日のうちに彼女も死に、同じ火葬の火に焼かれなければならないのである。この醜い慣習は実は17世紀にいたるまで続けられたのであった。

バビロニアのハンムラビ法典では、女性は所有の対象となる動物にしかすぎなかった。

また古代ギリシャにおいては、女性は自由のみならず法的権利を用意するあらゆる地位から遠ざけられていた。ギリシャ人社会において名声をかちえていたのは、高級売春婦のみであった。

ユダヤ人は女性を、その兄弟より下のものと考えていた。彼らは彼女の地位を低め、奴隷同様にみなしているのである。彼女に兄弟がある場合には相続権がなく、娘がまだ子供か成年に達する前には、父親は彼女を譲り渡すこともできたのである。

アラブは娘の誕生を喜ばなかった。彼らはそれを一種の恥とみなしていたのである。しばしば父親は生まれたばかりの娘をつれて人里から離れ、穴を掘って彼女を生き埋めにし、窒息死させたのである。こうすることによって彼は、予想される恥辱、もしくは他人の陰口から免れることができるのである。男が死に妻が残されると、彼女は遺産同様相続されることになっていた。イスラーム前のアラブの、ごく初期の集団の間では、男が死ぬと彼の最も近い親族、あるいは相続者が自分の衣服を脱ぎ、「私こそ彼女にたいして最大の権利をもつものである」、といいながら死者の妻にその衣服を投げかけたものである。その後彼は、自分が望めば彼女と結婚でき、また好き勝手に彼

女を結婚させてその結婚の金を自分のものにもすることも、彼女が身代金を払うまで結婚を禁ずることもできたのである。

中世には、女が何であるかを究めるために会議が開催されている。彼女は単に肉体にしかすぎないのであろうか。彼女は男と同じ人間なのであろうか。彼女は不滅の魂を持っているのであろうか、それとも魂も、不滅性も持たないのであろうか。メーコンの会議は結局、女は救済を期待しうる魂を持たず、イエスの聖母マリアのみがこの例外であると決定しているのである。

他の人々は女性を、不潔さそのものであり、人々を悩ませる悪の根源だとみなしていた。もしもこれらの女性たち、つまりアダムをそそのかして彼の主人に反抗させ、男にあらゆる難題をもたらしたイヴの娘たちがいなかったらどうであろう。テルチュリアヌスは、女性に話しかけた説教の中でいっている。

「貴女たちは、その1人1人がイヴであることを知らないのですか。貴女がた女性にたいする神の意見は、今なお通用するのです。罪は必需品であるかのように、相変らず存在するでしょう。そして貴女がたは悪魔への戸口なのです。貴女たちは禁じられた樹から実をとって食べた、最初に神の掟を破った存在なのです。貴女がたはいとも容易に、神の絵姿をうちこわしてしまったのです。」

また聖書はいっている。

「寺院の中では、お前の女達は静かに黙していなければならぬ。彼女はそこで語ることができず、法で定められたように、ただ従うべきなのだ。」

イスラームが女性から、彼女がそれまでの世紀を通じて経験してきた圧迫を取りのぞき、彼女の地位を向上させ、生活における座を確保したときの女性の状況はこのようなものであった。イスラームは、人間性の観点から見て男女とも平等であると宣言しているのである。聖なるクルアーンの婦人の章の中で、男女に向かってつぎのようにいっている。

「人々よ、主にたいするお前たちの義務をはたせ。お前たちを1つのも

のから創りたもうた主にたいする義務を。」

男も女ももとは1つなのである。両性ともその善行が報われることは、クルアーンの述べているごとくである。

「男であろうが女であろうが、善行をなし、信者であれば、われわれはその者の生活を豊かにするであろう。」

女性といえども相続権をもっていることは、クルアーンが述べている如くである。

「男にも両親と近親者は残した財産の一部が、そして女にも両親と近親者が残した財産の一部が贈られるであろう。額の多寡はとわぬまでも一定の分け前が。」

彼女はまた男性同様、財政的問題をとり扱うこともでき、自分の富に関する全権を所有しうるのである。クルアーンは説明している。

「男には彼のかせいだ利益を、女には彼女のかせいだ利益を分け与えよう。」

イスラームは法的問題に関して、女性を証人として認め、彼女の指名権を尊重し、彼女の誓約を重要視している。預言者はある女性の助力者<sup>アンサー</sup>にいてる。

「ウナム・ハニーよ、われわれは貴女が誓約をとり交わした者との誓約を守り、貴女が保護した者を保護しよう。」

イスラームはまた、結婚問題に関する女性の意見を尊重し、彼女の同意なしには結婚が行なわれないようにしている。

「既婚の婦人については、彼女の同意なしに彼女をふたたび結婚させることができない。処女についても同様だが、彼女の沈黙は同意とみなされる。」

女兒を殺すことは禁じられた。クルアーンはいつている。

「貧困をおそれて女兒を殺してはならぬ。われわれは彼女らにもお前たちにも、必要なものを用意するであろう。」

少女たちの生き埋めは厳しく罰せられた。クルアーンはいつている。

「生き埋めにした場合、彼女がいかなる罪を犯して殺されたか問われるであろう。」

イスラームは、結婚した後夫が妻をよくいたわるよう勧め、妻が夫の生活にとりいかに重要であるかを説いている。クルアーンは述べている。

「彼女らはお前たち男性の衣裳であり、お前たちは彼女らの衣裳である。」  
またクルアーンはつぎのような忠告も与えている。

「彼女らを優しくいたわってやれ。もしも彼女らを嫌ったとするならば、お前たちはアッラーが多くの良きことを授けたもうたものを嫌うことになるのだ。」

また聖なる預言者はいつている。

「もっとも完全で確固とした信仰の持ち主にして、もっとも良き性格の持ち主は、自分の妻たちを優しく遇する者である。」

また他の伝承は伝えている。

「名誉ある男のみが女性を尊重し、欠陥のある男が彼女らを侮蔑する。」  
クルアーンは両親にたいする敬意を命じるさいに、母親にたいして特に注意を払い、彼女にたいする一層の孝養をうながすようことこまかに述べている。クルアーンはのべている。

「われわれは両親にたいする孝養をすすめた。母親はその子を産むにあたって多くの苦しみに耐え、分娩にさいしては激しい苦痛を耐えねばならないのだ。子を産み落とし、離乳させるまでには30カ月の月日が必要なのである。」

預言者は、もっとも好遇されてしかるべきは誰かという問題に答えて「それはお前の母だ」と答えている。彼はこの言葉を3度繰り返し、4度目に「そのつぎは父親だ」、といつている。

以上がイスラーム以前と以後の女性の状況なのである。これについては、議論、注釈の必要は少しもないであろう。イスラームは彼女を、たんなる動

物、社会的にいかなる価値も地位もない財産なみの地位から、自由と平等を享受しうる完全な人間のそれへと高めているのである。クルアーンはいつている。

「女性は、他の性とまったく同様の権利を与えられているのである。」

これは権利と責任における男性との平等以外の何ものでもない。しかし男と女の平等を確立する一方でイスラームは、一般的原理として、男を女より一段すぐれたものとしているのである。クルアーンはいつている。

「男は彼女らよりも一段すぐれている。」

この優越性を説明して、他のクルアーンの1節はいつている。

「男は女を支える者である。アッラーが男を女より優れた者としたものによって、また男が使わねばならぬ富によって。」

支えるということの原因としては、以下の2つがあげられるであろう。まず第1には、男性は本性的に生活上の種々の問題に対処し、責任を遂行し、社会的な必要、要求にこたえる点でより優れている。彼は子供を産む世話、心配をせずすみ、ことにあたって感情的でなく反省的であり、理性がつねに感情に勝っているのである。しかし女性の側は、体格、妊娠の問題、分娩、授乳等の関係上こうした人生の重荷に対処することができず、その結果彼女は男性に依存してしまうことになる。そしてさきにのべたような女性独特の諸問題が彼女を疲労困憊させ、彼女の感情的側面を助長し、その結果彼女の行動には感情的反応が色濃くうかがわれるのである。もしも感情が理性を克服したならば、生活は健全でありえない。以上が、男性が女性の監督者である第1の理由なのである。

第2の理由としては、男性は法的に家庭の支出にたいする責任があることがあげられるであろう。彼は家庭の必要とするもの、生活必需品等をすべて手に入れなければならないのである。経済的負担ということは、監督ということと大いに関係しているのである。監督することは、いわば支出によってえられる権利であり、責任をとることによってえられる権威である。家族の

社会的、経済的問題にたいする男性の責任は、とりも直さず家族の者に対する拘束力を持つべき責任でもある。預言者はいつている。

「お前たちは1人1人牧者であり、自分の群にたいする責任があるのだ。イマームたる者は彼の率いる一団の責任をもつ牧者であり、男はその家族の者を率いる牧者であって、彼らに責任があり、女は夫の家庭の監督者であり、彼女の任にあるすべてのことにたいする責任がある。」

監督という問題についてクルアーンは、男性がふさわしいとしているが、その論拠は彼が出費をまかなうということより、彼の肉体的能力を重視するところにある。女性が財政的に豊かであり、男性の助力をうける必要がなく、自活しうるとしても、これは男性の監督権という問題を否定する訳ではないのである。何故ならば彼は本性的に、人生の重荷に耐え、これに直面する能力を与えられているのだから。

不平等のいまひとつの例としては、証言の問題があげられる。クルアーンはいつている。

「証人としては2人の男を呼んでこい。男が2人いない場合には証人として男1人、女2人を選ぶことも可能である。2人のうち1人が誤りをおかした場合、他の1人がそれを訂正するために。」

クルアーンの言葉自体が、2人の女の証言が、1人の男のそれにあたることを説明しているのであろう。彼女の母性としての役割ゆえに、男性が瞑想的、省察的側面を助長されるのに反し、女性は感情的、情緒的側面が助長されるのだから。このゆえに1人の女性が事件について忘れてしまう可能性があり、他の女性がこれを訂正してやる必要があるのである。実際にはこれは男を女より優れた者とみなすことにはなるまい。むしろある人間の権利が、女性の本性的な傾向により失われないための措置だといえるのである。

以上によりわれわれは、イスラームが平等の権利を、人知のおよぶかぎりの広範囲な領域に適用しているとみなしうるのである。



## 第 4 章

### イスラーム社会主義の歴史的背景

イスラーム社会主義の原理は、社会的関係がいかにあるべきかを示すために、イスラーム法によって規定されたたんなる理想的なもの、想像上の理論ではないのである。それは实际的、具体的なものであって、人々は心の、良心の奥底からわきあがる信仰をもって、これを頼りに生き、これに深く影響を受け、これを信じたのである。イスラームは人間の態度、行動を、良心に律しせしめようとしたのである。これをするにあたりイスラームは、まず良心を覚醒させ、それを感性ゆたかな、繊細なものにし、ムスリムの心にイスラームが宗教的義務の1つと定めた責任観念をうえつけたのである。自分自身にたいする、あるいは社会全体にたいする責任観念は、もっとも基本的な個人の神にたいする責任から発するものなのである。個人は、大小のいかんをとわずあらゆる行為に関してアッラーにたいし責任があり、また行為の意図についても同様なのである。なぜならば意図とは、行為がアッラーにも人々にも知られうる具体的な表現だとするならば、アッラーにのみ知られうる心理的表現に他ならないのだから。また人間社会は、個人とまったく同様に、アッラーにたいして責任をもつものである。それはまた個人にたいすると同じくそれ自身にも責任をもつのである。社会がもしもこれらの義務の遂行を怠ることがあれば、それは必ずやその罰を受けることになる。

イスラームは人類の繁栄のために法を定め、諸規律を守り行なうことを個人の神聖なる義務としている。そしてすべてのムスリムはその義務を守り、それを放棄しないが、これは彼が責任感を持ち、彼の繊細な、感性ゆたかな良心がつねに彼にこの義務の遂行を命じるからである。このようにムスリムは、支配者、臣下のいかんをとわず、また偉大なもの卑少なものの別なくイスラーム社会主義を認め、また社会はその原理をもとに生き、そこに避難所を見出しているのである。

歴史は、ある人々が現在においても信じないような、イスラーム社会における社会主義の高度な適用例を見るのである。

つぎに筆者は、ムスリムたちが公正、平等、自由、同胞愛の影でいかに生

活したかについて、いくつかの実例をあげることにしよう。イスラームはこれらの原則をムスリム、非ムスリムの別をとわず、その社会内に住むすべての人々に適用したのである。

イスラーム社会主義の適用の基礎となったものは、まず内心の衝動であり、ついで良心のイスラーム的な訓練、ならびにこの良心をたえず覚醒させ、それを意識しつづけることであった。それゆえイスラームの歴史はこの種の覚醒、意識のすぐれた例を多々見出しうるのである。

ブラダは伝えている。マイズ・イブン・マリクは預言者のもとにやってきていった。

「アッラーの御使いよ、私を清浄にして下さい。」すると預言者はいった。「哀れな者よ。行ってアッラーに許しを乞え。そして神にむかって悔悟せよ。」マイズは立ち去り、暫くしてもどってきていった。「アッラーの御使いよ、私を清浄にして下さい。」預言者は前にいったことを繰り返した。これが4回続けられると、預言者はいった。「私は何からお前を清浄にしなければならぬのか。」マイズは答えた。「姦淫の罪からです。」預言者は尋ねた。「彼は狂人なのか。」するとマイズは狂人ではないと周囲の者が答えた。そこで預言者はさらに尋ねた。「彼は酒をのんだか。」1人の男が立ちあがり、マイズの口のあたりの匂いをかいだが、酒を飲んだ形跡はなかった。そこで預言者は訊ねていった。「お前は姦淫の罪を犯したのか。」マイズはそれを肯定した。そこで預言者は、マイズを石投げの刑に処すことを命じているのである。2、3日ののち、預言者は信徒たちに向かっていった。「マイズを許すために祈れ。彼の悔悛は、もしも広くわけ与えられたなら、この世の人々をすべて宥すにたりる程だったのだから。」その後アズドのガーミド族の女が預言者のもとに来ていった。「アッラーの御使いよ、私を清めて下さい。」すると預言者はいった。「哀れな女よ、行ってアッラーに許しを乞え、そして神にむかって悔悟しなさい。」すると彼女はいった。「貴方はマイズ・イブン・マリクの罪を認めようとしなかったように、私

の罪も認めようとなさらないのですか。私は姦淫の結果妊娠してしまいました。」そこで預言者はいった。「ああお前だったのか。」彼女は答えて、「はい」といった。すると預言者はいった。「腹にある子を産む迄立ち去れ。」そこで助力者<sup>アンサー</sup>(マディーナにおける預言者の支持者)の1人が、彼女が分娩するまで彼女の世話をした。ついで彼は預言者のところにやってきて、「ガーミドの女が子を産みました。」と報じた。すると預言者はいった。「われわれは、彼女の子供の世話をする者なしに、彼女を石投げの刑に処し、子供を放っておく訳にはいかない。」そこで他の助力者<sup>アンサー</sup>が立ち上がりいった。「私がその赤児の面倒を見ましょう。」その結果預言者は、件の女を石投げの刑に処するよう命じたのである。

またこの話についての他の伝承によれば、預言者は「お前が子を産むまで立ち去れ。」といったということである。その後彼女が子を産み落すと、彼はいった。「立ち去れ、そして子供が乳離れするまで面倒をみてやれ。」子供が乳離れすると、母は片手にパンの1きれをにぎったその子を連れて預言者のもとにもどってきていった。「子供が乳離れして食物をとるようになりました。」そこで預言者はその子を1人のムスリムの手に委ね、女のためには穴を掘るよう命じた。彼女は腰まで埋められ、石投げの刑で殺されたのである。ハーリド・イブヌル＝ワリードは彼女に石を投げたが、彼女の頭にその石があたりハーリドの顔に返り血がかかった。そこで彼が彼女に非難の声を浴びせかけた時、預言者はいった。「よいかハーリドよ。アッラーに誓っているが、彼女は自分の罪を十分に悔いたのだぞ。」預言者は彼女のために特別に礼拝を行ない、彼女を埋葬した。

自分たちの前にひかえている苛酷な死を知りながら、心身の浄化を願ってマイズ・イブン・マリクとその相手を預言者の許に急ぎ赴かしめたものは、他でもない良心の覚醒とその自覚であった。彼らはこの苛酷な死を怖れなかったが、それは分別をとりもどしてみると自分たちが大罪をおかしており、この世で彼らがかくしおおせていることもアッラーが御存知だということに

気付いたからである。彼らは急いで預言者のもとに赴き、罪を告白し、悔悟の念から定められた罪にみずから服したのである。良心の覚醒とそれにたいする自覚が、大部分のムスリムの間でどの程度にまで達していたかを知るには、この例は格好なものである。そしてハーリドがこの女を咎めたさいに、預言者はすぐにそれをやめさせているが、イスラーム法においては、ハーリド程の人物が罪を告白した女を侮蔑すること、つまり誰かが他を侮蔑することは許されないのである。

ムスリムの個人の感情と良心の覚醒を示すためには、これは格好の例であろう。イスラームは、その社会主義を適用するにあたって、書き誌された書物によりも、この良心、この自覚にこそより多く依存しているのである。

ついでわれわれは、社会生活におけるイスラーム社会主義の適用例をあげることにしよう。

絶対的平等は、イスラーム社会主義の根本であった。あらゆる社会において奴隷制が公認されていた時代に、イスラームは自由な者と奴隷、主人と臣下の間の差別を行なっていないのである。

<sup>ヒジュラ</sup>聖遷が行なわれてのちすぐに、ムハンマド・イブン・アブダッラーが<sup>ムヘージ</sup>移住者（注 預言者とともにマディーナへ遷都した者）と<sup>アンサール</sup>助力者との間に兄弟関係を樹立したとき、彼の叔父ハムザ・イブン・アブド＝ル＝ムッタリブと彼の被保護者ザイドは、アブー・バクル、ハルジャ・イブン・ザイド、ハーリド・イブン・ルフイヤ＝ル＝クサーミー、ビラール・イブン・ラバー等とともに、みな互いに兄弟同志であるとみなされたのだった。この兄弟関係はたんに名目的なものではなく、生活の全領域を蔽っていたのである。

預言者は彼の被保護者ザイドを、ムアッタの戦闘の指揮官に任じている。さらに彼はビザンツ攻撃のさい、ザイドの息子ウサーマを指揮官としているが、その揮下にはアブー・バクル、ウマル・イブヌ＝ル＝ハッターブ、サイド・イブン・アビー・ワッカーズ等々イスラームでも重要な、クライシュ族出身の<sup>ムヘージルーン</sup>そうそうたる移住者、<sup>アンサール</sup>助力者が含まれていたのである。預言者が死ん

ださいにも、アブー・バクルはウサーマを軍の長として派遣することを主張した。アブー・バクルはこの軍隊を見送るため、わざわざマディーナの外に出たが、この時ウサーマは馬にのり、預言者の後継者アブー・バクルは徒歩だった。年上のアブー・バクルが徒歩で歩き、若い自分が馬にのっているのを恥じてウサーマはいった。

「貴方に馬にのっていただくか、私が徒歩で歩くことにしましょう。」するとアブー・バクルは誓っていった。「神かけて、お前が馬から降りるともなく、私が馬にのる必要もあるまい。アッラーのために私の足が、しばらく砂の上を歩んで何が悪いのか。」またアブー・バクルは、イスラーム国家の重責を果たす上で、ウマル・イブヌル＝ハッターブに助力を仰ぐと思った。しかしウマルは、ウサーマの軍中にいたのであり、彼の指揮官の許可をうける必要があったのである。カリフはウサーマに尋ねている。「もしも私のためにウマルを手離すことができるならば、そのように取り計らって欲しい。」

ウサーマが騎乗しているさいに徒歩で歩くカリフ。預言者の代理としての諸責任を果たすため助手を必要とし、そのため彼の指揮官に許可を乞うカリフ。彼のこうした行為こそ、真にイスラーム的なものなのである。

アブー・ザッルとビラール・イブン・ラバーが喧嘩をしたことがあった。ビラールの母が非アラブであったため、アブー・ザッルが彼を侮辱したのがそもそもの原因であった。そこでビラールが預言者にこの問題を訴えると、彼はアブー・ザッルにいった。「アブー・ザッルよ、頭をあげて見てみる、もしもお前の行ないがお前自身を高めないならば、お前は皮膚の赤い者（注 アラブ特有の考え方による）、黒い者より優れているとはいえないのだぞ。」

あるときウマルは、メッカの町中を歩いていると主人たちが食事をしているのに、召使いたちが傍らに立っている光景を見た。彼は怒って主人たちを非難し、いった。「何故お前たちは、召使いよりも優れていると思う

のか。」そして彼は召使いたちを呼び、主人たちと同席で食事をさせたのである。

アムル・イブヌル＝アースがエジプトにいたさい、彼は競馬を催した。あるとき1頭の牝馬が勝った。人々がその馬を見つめているとアムルの息子ムハンマドが立ち上がり、「私の馬だ。」と叫んだ。しかしこの馬がその所有者のそばに来ると、所有者であるエジプト人が自分の馬であることを認め、「ちがう、私の馬だ。」といった。するとムハンマドは立ちあがり、このエジプト人を殴りつけていった。「馬をとれ、俺は最も高貴な者の息子だ。」このことがムハンマドの父アムルに知れると、彼はこのエジプト人が、カリフのウマル・イブヌル＝ハッターブに直訴することを恐れ、彼を投獄してしまった。しかし彼は牢から逃げだし、マディーナのウマルの許に赴いた。するとウマルは、アムルに息子のムハンマドを連れて即時マディーナへ帰るよう命じた。そして彼らが出頭するとウマルは、自分の答をそのエジプト人に与え、それで“最も高貴な者の息子”を打つように命じた。そこでそのエジプト人はいわれたとおりにした。それからウマルは、その男にウマル・イブヌル＝アースその人を打つように命じていった。「息子がお前を殴ったのは、父親の權威をかさにきてのことなのだ。」するとエジプト人は答えていった。「しかし私は、私を打った者を打ち返しました。」するとウマルはいった。「お前が彼を打ってもわれわれは仲に入らないだろう。お前が彼を離してやるまで。」それから彼はアムルに向かって、有名な言葉を述べた。「やあアムルよ、お前はいつから自由に生れた人々を奴隷にしたのか。」

ところでこのエジプト人はキリスト教徒であり、ムスリムではなかったということである。

カリフ、ウマル・イブヌル＝ハッターブは、あるとき人々に語りかけていった。「もしもお前たちが、私が正しい道から外れたと思ったときは、私を正道にもどして欲しい。」すると1人のムスリムが立ち上がって叫んだ。

「もしもわれわれが、貴方が正しい道から外れたことを知ったならば、われわれは剣をもちいて貴方を正道にもどしましょう。」これを聞いてウマルはいった。「剣をもちいてウマルを正道にもどそうという臣下を、ウマルに授けられたアッラーに讃えあれ。」

ひとは、これが初期イスラームのできごとにすぎぬというかもしれない。しかしこのような例は各世紀に見られるのである。

アブー・ジャアファル＝ル＝マンスールはアッバース朝の創始者であるが、あるときスフヤーヌ＝サウリーが彼のもとにやってきていった。

「貴方、カリフたる貴方は、人々の許しもなしに、アッラーとムハンマドの国家に属する金銭を使われたことにたいし、何と申しひらきされるのですか。ウマルは巡礼のさい、自分と自分の同行者のために16ディーナールを使ってしまったあとでいいました。『どうやらわれわれは、公金を誤った道に使ったようだ。』アブー・ジャアファルよ、貴方は預言者のこの言葉を知っていますか。『アッラーとその御使いの金を、意識的に濫費した者は、その翌日に地獄におちるであろう。』」すると宮廷で追従をこととしていたアブー・ウバイド＝ル＝カティーブがいった。「カリフ様がこのようなことを認められるだろうか。」これにたいしてスフヤーヌは鋭く反発した。「だまれ、ファラオはハマン（注　ファラオの宰相、彼はファラオに誤った献策を行なった）を滅ぼし、ハマンはファラオを滅ぼしたのだ。」彼は堂々と真実をのべて退去したのである。

裁判官アブー・ユースフは、平民がカリフ、アル＝ハーディー＝ル＝アッバーシーと庭園の問題で論争しているのを聞いた。アブー・ユースフは平民の主張が正しいといったが、支配者にも証人があった。そこで裁判官は支配者にいった。「この男、原告は、貴方がこの証人が正しいと誓言することを要求しています。」しかしアル＝ハーディーはそれを侮辱とみなしその庭園を所有者にかえしたのだった。

イスラーム社会主義について言及するさいには、当然イスラームの社会



的連帯、財政問題について論及しなくてはなるまい。イスラームにおける社会的連帯の例は数多く、それについて網羅することは至難のわざである。したがってわれわれは、そのごく一部を略述することにしよう。

マディーナ出身の男が預言者に聞いた。「イスラームにおいて最高の行為は何でしょうか。」答はつぎのとおりだった。「貧しい者を養い、知る人、知らざる人を問わず挨拶せよ。」

アブー・バクルが改宗したとき、彼は自分の商売から得た儲けを4万ディルハム貯えていた。改宗後も彼の商売は、相変らず利益をあげつづけていたのである。しかし彼が預言者とともにマディーナへ聖遷したときは、彼の貯えはわずか5千ディルハムになっていた。彼はその余りの金をすべて、イスラームに改宗し、主人たちに虐待されている奴隷たちを解放し、あるいはムスリムの貧者、困窮者を助けるために使ったのである。

ウマル・イブヌル＝ハッターブはハイバルに土地を買った。そして彼は預言者のもとにやってきて尋ねた。「私はハイバルに土地を買い求めましたが、これは私のこれまで手にした最も貴重な財産です。だが貴方は、私にこれをどうせよと命じられますか。」預言者は答えていった。「よかったらその土地の代価をとって、それを慈善のために提供したらどうか。」

そこでウマルはその土地を、貧乏人、親族の信託財とし、奴隷解放、客のもてなし、アッラーの道のための支出等々にあてることとした。ところで被信託者に任じられた者は、任意にこの信託財を使用したり、困った友を扶養することができたのである。このようにしてウマルは、自分の最も貴重な財産を放棄してしまったのである。

イブン・アッバースがウスマーン・イブン・アッファーンについて語っていることであるが、アブー・バクルの治世に人々が飢饉に悩んだことがあった。アブー・バクルはそのとき彼らに、神が彼らを夕方前に救って下さるであろうとつげた。その翌日1人の使者が、千頭の駱駝につまれた小麦と食料がウスマーンのところに送られてきたという吉報を伝えた。商人た

ちはウスマーンの家を訪れ、彼の家の戸を叩いた。すると彼は肩に衣をまとい商人たちのもとにあらわれ、「何がお望みか」と尋ねた。すると商人たちはいった。「われわれは千頭の駱駝が、貴方のところに小麦と食料を運んできたとききました。マディーナの哀れな人々を救うために、それをわれわれに売っていただけませんか。」そこでウスマーンはいった。「中に入りなさい。」人々は中に入ったが、家はほぼ千人の人で一杯になってしまった。「シリアからの運送費として、あなた方は私にどれほどの利益を与えてくれますか。」人々はいった。「12割でよいです。」すると彼はいった。「他にもっとよい条件を申し入れた人がいます。」そこで彼らはいった。「14割ではいかがでしょう。」彼はいった。「もっとよい口があります。」彼らはそこで申しでた。「15割ではいかがですか。」彼の答えは相変らず、「もっとよい口があります。」だった。そこで商人たちは驚いていった。「しかし一体誰がこれ以上払うといったのです。」するとウスマーンはいった。「1ディルハム分につき、10倍を支払ってくれることになっているのだが、それ以上払えるかね。」彼らは首を横にふった。

ウスマーンはいった。「よくききなさい商人のみなさん。これはこの町の貧しい人々のために、喜捨にささげられます。」このようにしてウスマーンは、クルアーンの中で「1の善行をなすものは10のむくいをうるであろう、」といっている神の御心に従い、千頭の駱駝が運んできた穀物や食料をすべてマディーナの貧乏人たちに喜捨してしまったのである。

イスラームとその社会主義が誇りとする例としては、メッカからマディーナへ遷都したさい、移住者<sup>ムハージルーン</sup>とマディーナの助力者<sup>アンサル</sup>との間に預言者が打ちたてた友情があげられるであろう。助力者<sup>アンサル</sup>は、移住者<sup>ムハージルーン</sup>を迎えるためにあらゆることをし、また他の社会では考えられぬほど彼らを尊重したのである。

アル＝ブハーリーの指摘によれば、移住者たちがマディーナに到着したとき、預言者はアブドッ＝ラフマーン・イブン・アウフとサイド・イブヌル＝ラビーウの間に兄弟関係を取り交してやった。サイドはアブ

ドッ＝ラフマーンに<sup>アンサー</sup>にっている。「私は助力者の中でも最も豊かな者です。私はこの財産を貴方と2つに分けましょう。私は妻を2人もっています。どちらか貴方の好きな方をお選び下さい。私はその女と離婚し、規定の時がたったあとで彼女と結婚なさるとよい。」

アブドッ＝ラフマーンは答えていった。「アッラーが貴方の富と家庭を祝福したまいますように。ところで貴方がたの市場はどこにあるのでしょうか。」

彼はバヌー・キンカーウ族の市場を教えてやった。アブドッ＝ラフマーンが市場からもどってきたとき、彼の手にはバターと小麦粉があった。

この話は、<sup>アンサー</sup>助力者の寛大さと、移住者の高貴さを示すに充分であろう。働か<sup>ムヘーグルン</sup>うるかぎりひとは、他人に依存してはならないのである。しかし移住者は助力者から遺産を相続しえ<sup>ムヘーグルン</sup>たし、その逆も可であった。相続権に関して、兄弟の誓いは、バドルの戦いのさい、

「アッラーの命により親族の関係を最も近いものとする。」  
というクルアーンの1節が哲示されるまで、親族の関係以上のものだったのである。

クライシュ族が3年にわたって、ハーシム家出身の預言者とその仲間たちと関係をたち、クライシュ族の不信仰者が救援をたつためにムスリムとの通商を一切たつたとき、ムスリム側の食料は底をつき、状況は非常に悪化した。この危機の間貧しい者たちは、裕福な兄弟からもっぱら援助を与えられていたのである。誰1人として返済について云々されたことがなく、一方富める者も自分たちの行ないにたいして、アッラーが豊かな報酬を授けて下さることを信じ満足していたのである。

またハーリド・イブヌル＝ワリードは、キリスト教徒であるヒーラの人々との和平交渉において、老人、病人、貧乏人にたいする社会的保証の原理をうちだしているのである。

この条約は、老齢で働くことができないとか、事故にあったり、富を失っ

て同じ宗教の者に依存したりしているような老人は、人頭税を支払う必要がなく、その家族はイスラームの領土に住んでいるかぎり、公共の財源から援助を受けると定めている。

ウマルは社会的連帯のシステムを、ムスリム、非ムスリムにたいして同様に適用している。

ある時彼は1人の盲人が、ある家の戸口で物乞いをしているのを見つけた。尋ねてみるとこの乞食はユダヤ人であった。そこでウマルは彼にきいた。「何故お前は物乞いをしなければならないのだ。」するとそのユダヤ人はいった。「年をとっているし、困っているからです。」ウマルは彼の手をとり自分の家につれてゆき、当座の必要品を与え、それから彼を財政担当官のところに送り、つぎのような命令を下した。「この老人、ならびにこの老人のような人々の面倒をみよ。若い時には彼を利用し、年をとったら見放すようでは、われわれが不正をおかすことになるぞ。クルアーンにあるではないか、『慈善は、貧しい者、困窮者のためのもの、』と。この男は、啓典の民の1人の困窮者なのだ。」

彼と、彼同様の者は、人頭税の支払いを免じられている。

シリアに赴く途中ウマルは、一団のキリスト教徒の癩病やみにあった。彼は公に彼らを財政的に援助し、1人1人に世話をしてやる召使をつけるよう命じた。

イスラームの財政政策は、社会の構成員の間に社会主義を適用するものであった。預言者の時代以来、公共の財源はつぎのごとくなのである。

#### (1) 喜捨（ザカート）

これは義務的なものであり、この性格は、つぎのクルアーンの1節から知れるであろう。「ザカートは貧しき者、困窮者、ならびにその仕事にたずさわるために雇われた者、（真実に）心が傾いた者、虜われの者を解放しようとする者、借金に悩む者、またアッラーの道を歩む者ならびにさ迷い歩く旅人たちのみのものである。」

## (2)土地税（ハラージュ）

土地に課税され、財産収獲高にたいし一定の率が定められる。『アル＝アフカームッ＝スルターニーヤ』の中でアル＝マーワルディーはいつている。「すべての土地は4種類に分けられる。第1はムスリムの土地であり、10分の1税の地であり、これにはいかなる地租も課せられない。第2は所有者がムスリムとなった土地であり、彼らはこの土地にたいする種々の権利をもち、シャーフィイー派の法典によれば、それは10分の1税の土地であって、地租はかからないことになっている。第3の土地は、武力により獲得された土地である。シャーフィイー派によればこの土地は、いわば戦利品の1部であって、征服者がこれを分配し、所有して、その土地からの収益の10分の1を支払うことになる。したがってこの土地は10分の1税の地であり、地租はとられない。第4は協約にもとづき、非ムスリムからとりあげられた土地であり、これにたいして地租が課せられることになる。

## (3)人頭税（ジズヤ）

1人あたりについて一定の金額を支払うものである。これはムスリムによって支払われる血税、ザカートに対応するものだといえるであろう。

## (4)アル＝ファイウ

ムスリムが不信心者から、戦闘をせずを得たもの。聖なるクルアーンはこの配分の方法について、つぎのようにいつている。「アッラーが町々の民からとりあげ、御使いのために貯えられたものは、アッラーとその御使い、その近親者、孤児、困窮者、さ迷える者たちのものである。」

## (5)戦利品

ムスリムが不信心者から戦闘によって得たもの。バドルの戦いののち、ムスリムは戦利品の分け前を要求するようになった。なぜならば戦利品を集めている者は、それらが自分たちのものだと主張したし、敵を潰滅させるまで追撃していったものも、自分たちの努力がなければ前者とて戦利品を集めることができないのだから、自分たちもそれに関して権利があると主

張したからである。また預言者の保護にあたっている戦士たちは、自分たちも戦い、敵を殺し、彼らの財産を奪うことができるが、多数の敵から預言者を守るためにそうすることができないといただいたのである。そこで預言者は、すべての戦利品を集めておき、彼か、アッラーがこの問題を決定するまでとっておくように命じた。そしてすぐにつぎの1節が啓示されたのである。「お前たちが戦いでえたものの5分の1は、アッラーとその御使い、その近親者、孤児、困窮者、さ迷える者どものものであることを知れ。」これによると戦利品の5分の1は、ファイウ同様これらの人々のために用いられ、5分の4が戦士たちに分配されることになるのである。

以上が財源であるが、この社会主義の研究においてわれわれは、その配分がイスラーム社会においてどのように行なわれたかを探る必要があると思われる。

もっとも普及したイスラーム理論によれば、富は社会に属するものであり、またいかなる支配者も、個人的、法的手段のいかににかかわらず、正しい名目なしにその一部をわがものにしたり、相応しくない者にそれを分け与えたりできない。

以上のことは、イスラームからの逸脱が行なわれる以前の出来ごとである。金銭は、クルアーンに示されたごとくに使用されなければならないのである。戦利品を分けるにさいしては、「各人にその努力に応じて」という原則にのっとり、預言者は歩兵1、騎兵2、あるいは他の説によると3の割合で配分している。また彼は、「各人にその必要に応じて」という原則にのっとり、未婚者1、既婚者2という分割方法をも定めている。また戦利品の5分の1は、既定の方針により配分された。

アブー・バクルもひとびとに平等を要求するにさいして、預言者の轍をふんだ。そしてザカートは国庫に集められることになったのである。ザカートその他の喜捨、戦利品は国家的な見地から支出され、軍隊その他の改善のために使用されたのである。その後に残されるものがあれば、それは平等にム

スリムに分け与えられたのである。それは初期の改宗者、後期の改宗者、自由人、奴隸、男女の分けへだてなく平等に分け与えられたのである。

アブー・バクルは尋ねられたことがあった。「何故貴方は、その立場に応じて、初期改宗者を優れた者とししないのですか。」すると彼は答えていった。「彼らはアッラーのためにイスラームの教えを信仰したのです。アッラーは来世において彼らをあつくもてなすでしょう。この世の中は、ただ教えを拡めるためだけのものです。」

ウマルは、アブー・バクルと意見を異にしていた。彼は初期改宗者が優れていると考えていたのである。彼はよく口にしていた。

「私は預言者に刃向かった者と、彼と共に戦った者とを同一に取扱わぬぞ。」

しかしこの平等は相変らず尊重され、富は収入の増加とともにムスリムを潤おしていったのである。しかしムスリムの中にはこの平等をよしとせず、優待問題を提起する一般的風潮がおこった。ウマル・イブンヌール＝ハッターブはアブー・バクルの後を継ぐと、平等の問題については、イラク征服が終るまで前任者の政策をうけついだ。ついで彼は優待問題について人々にひろく意見を求めたところ、それが一般的意見であることを知ったのである。そこで命令が与えられ、バドルの戦いに参加した移住者、助力者には毎年年金5千ディルハムが与えられることになった。そして彼らのうち、バドルの戦いに参加しなかった者には4千ディルハムが給与され、預言者の妻たちには1万2千ディルハムが与えられた。また預言者の伯父アッバースにも1万2千ディルハム、アル＝ハサンとアル＝フセインはそれぞれ5千ディルハム、<sup>ムハーヅルーン アンサール</sup>移住者と助力者の息子たちには2千ディルハムずつが与えられることになった。彼らより位が下の者たちには、6百、4百、2百と異なった金額が支給されている。

アブー・ユースフは<sup>キターブ＝ル＝ハラージュ</sup>「税制の書」の中でいっている。

「あるマディーナの長老は、イスマーイール・イブン・ムハンマド＝サイブ、ザイド、彼の父と遡る伝承を伝えている。ザイドの父はウマル・

イブヌ＝ル＝ハッターブがいうのを聞いた。『唯一なるアッラーにかけて、誰も、それを与えられようが拒まれようが、公共の金銭にたいする権利をもっている。それにたいしては、誰1人として奴隷以上に権利をもっている者はいないのである。そして私も、お前たちのうちの1人なのだ。しかしわれわれはアッラーの聖なる書と、預言者にたいするわれわれの誓いに従って、位階を持っているのだ。イスラームにおいてはそれ以外の場合、不幸に出会った者、早期のイスラーム改宗者、富める者、貧しき者のすべてが、皆等しい地位にいるのである。』」

アブー・バクルとウマルは配分方法について意見を異にしていたが、それにしてもこの相違は彼ら自身のために生じたものではなく、各自がそれぞれの自説をもっていたことにより現れたのである。しかしウマルも、土地問題についてはアブー・バクルの説をとっており、これが人々の間で配分されるべきではないと考えていた。イラク征服ののち、アブドッ＝ラフマーンはウマルに、この地をムスリムの間で分割するよう提案した。この意見はアリー・イブン・アビー・ターリブ、タルハ等の反対にあい、またウマル自身も土地の分割には反対したのである。ムスリムたちの間で協議が行なわれ、土地はそのままにされることになったのである。サイード・イブン・アビー・ワッカースに送った手紙の中で、ウマルは命じている。

「土地と川を、その働き手に残しておけ。もしもお前が現在いる人々の間で土地を分けてしまったならば、彼らの後にやってくる者には何一つ残らなくなってしまうだろう。」

ウマルの考えによれば、もしも戦利品として征服者たちが土地を分割した場合、誰1人としてそこから利益をあげる者がいないことになる。だがもしもこれをそのままに残しておけば、それに地租がかけられ、全ムスリム社会がその利益にあずかることができるのである。

ウマルは、すべてのムスリムが平等であるとは考えていなかったが、彼の治世中に、すでにこれの悪い結果があらわれてきた。この政策は一部のムス



リムの、他にたいする怒りを呼びおこしたのである。金が一方にのみ貯り、他方に行き届かなくなってしまうのである。そこでウマルは、自分の意見を修正しなければならなかった。彼は知っている。

「私が背をむけてしまった方に目をむけていたら、きっと金持ちの余剰の金をとりあげ、それを貧乏人に分け与えていたであろう。」

しかしウマルは、これを実行する前に殺されてしまった。彼のあとを継いだウスマーンはこの優待政策を継続し、金持ちの手に富が集中する傾向は増大する一方となり、その結果ウスマーンを倒し、全イスラーム国家の体制を崩してしまうような災厄が到来してしまったのである。

アリー・イブン・アビー・ターリブがウスマーンの後を継ぐと、彼は預言者と2人の教友たちの時代に存在していた、完全な平等を再現させた。なぜならばそれは、イスラームの精神、公正さにより相応しいものなのだから。

彼の最初の公の演説でアリーは知っている。

「すべての移住者<sup>ムハージルーン</sup>と助力者<sup>アンサル</sup>は、自分たちと一般の人々との相異は、彼らが預言者の教友であったということだけだということを知るべきだ。優待は来世において、神とともにあるし、報酬も刑罰も神から与えられるものである。われらの国民に忠実であり、われらの宗教に改宗し、われらのキブラ（注 イスラームの礼拝の方向。メッカの方角を指す、）に顔をむけることにより神の呼びかけに答える者は、誰でもイスラームの権利、刑罰をうけることになるのである。君たちは、誰彼をとわず平等に分け与えられるべき、すべての富の所有者アッラーの下僕である。誰1人として、他より優待されるべきではなく、ただ敬虔なる者のみがアッラーよりの最高の報酬をうけるのである。」

このようにアリー・イブン・アビー・ターリブは、イスラーム、社会主義の2つが認める公正な手段を再現したのである。だがこれは、優待的分配にあずかった貴族階級の意にかなったであろうか。

優待政策が作りあげ、土地、家屋、金を所有し始めた富裕階級が、この平

等を喜ぶはずがなかった。この階級はアリーに反抗し、イスラーム国家とその社会主義に致命的な一撃を与えたのである。アリーとムアーウィアの間  
の抗争の、主要因はここにあったのである。

だが一般市民は、こうした差別、傲りに満足したであろうか。否である。  
ウスマーン・イブン・アッファーンがアフリカからの地租の5分の1を、マ  
ルワーン・イブヌル＝ハカムに与え、またアル＝ハーリス・イブヌル＝  
ハカムに20万ディルハムを、サイド・イブン・サービトに10万ディルハムを、  
また他の人々にこれと同様の贈物をしたときいて、アブー・ザッル＝ル＝ガ  
ッファリーはイスラーム社会主義の大義の下に乱を起こしたのである。

アブー・ザッル＝ル＝ガッファリーは、こうした問題に異を唱え反抗し  
たのである。彼は人々に呼びかけていっている。

「かのたえて見慣れぬ行ないがなされた。神かけていうが彼らは、聖な  
るクルアーンにも、また預言者に関する伝承にも、いかなる論拠をも持ち  
あわせていないのである。アッラーに誓っていうが、真理の光は消え、誤  
りが堂々とまかり通っている、真理は否定され、敬虔さを失った利己心だ  
けがわがもの顔に振舞っている。汝ら富める者よ、貧しき者を助けよ。金  
銀を貯めこんでアッラーの道に使用せぬ者にたいして、彼らの額も、両脇  
も、背中も劫火で焼かれるのだと、いってやれ。ああお前ら蓄財に汲々た  
る者よ、富にあずかる3人の者について知るべきであろう。運命は死か破  
滅をつかわして、善財、悪財のいかんをとわず、それを破壊するさいにお  
前たちに相談したりはしないぞ。つぎにはお前たちの相続人だが、彼らは  
お前らの頭ががっくりと垂れるのを待って、お前たちの富をとり合いする  
ことであろう。ところで第3番目がお前たちなのだ。もしもお前らがこの  
3人のうちで一番弱い者にならぬ算段ができるというなら、やってみるが  
よい。アッラーはクルアーンの中でいっておられるぞ。『自分の執着する  
財を使わずに、正しい道に至ることはできない。』」

「お前たちは絹のカーテン、金欄の敷物を用い、はてはアズラビー毛の

上に寝て苦情をいっている。しかし聖なる預言者は、マットの上にやすまれたのだぞ。お前たちは、種々の食物を口にしたいといっている。しかし聖なる預言者は大麦のパンを食べただけで、しかも腹一杯は食べなかったのだぞ。」

新興貴族階級の王座をこのように激しく動揺させたこのような呼びかけを、彼らがいみ嫌ったことはいうまでもない。この結果彼は、アッ＝ザバーダの地に流刑されたのである。

しかしイスラーム精神は、このようなことで脅迫されはしなかった。偏向は、これを破壊しつくしえなかったのである。それは永遠のものであり、イスラームの本性の中に内在するものであって、善意の人の中に必ず存在するものなのである。イスラーム社会主義はその黄金時代、つまりウマル・イブン・アブド＝ル＝アジーズの時代にふたたび開花したのである。

ウマル・イブン・アブド＝ル＝アジーズは、スライマーン・イブン・アブド＝ル＝マリクの後をついでカリフの座にすわった。最初の公の演説で彼はいっている。

「私はカリフの問題について発言する機会がなく、またそれを望んだ訳でもなく、またムスリムたちもこれについて相談をうけなかったような状態で、カリフの地位につくことをよしとしない。諸君らが私に忠誠の誓いをたてねばならぬ義務はないことにしよう。君たち自身でもう一度選んでほしい。」

ウマル・イブン・アブド＝ル＝アジーズが最初に行なったことは、ムスリムの長の選挙任命制を復活し、聖なる預言者のすぐ後をついだカリフたちが従った民主的原理を採用しようとしているのである。彼は人々にまたつぎのようにいっている。

「私以前には、君たちが彼らの圧制から身を守るため追従しなければならぬような支配者たちがいた。しかし創造者にそむく人間に従順である必要はなかろう。アッラーに忠実なる者にこそ従順であるべきであり、アッ

ラーに逆らう者に忠実であってはならない。君たちの問題について私がアッラーに忠実である間は、私に忠実であってほしい。しかしもしも私がアッラーに逆らったならば、私は君たちに忠実であってほしいという権利はないのだ。」

それから彼は、「まず自ら率先してことに当たらなければならない、」といって、自ら不正の一扫を始めたのであった。彼は自分の土地、財産をすべて返上し、自分の指にはまった指環の石を見ていったものである。「これはアル＝ワリードが、マグリブから手に入れたものを不正な経路から私に与えたものだ。」彼はこういってそれを返してしまった。

ウマルはヤマーマ、ミカイダス、イエメンのジャバル＝ル＝ワルス、ファダクのすべての土地をムスリムたちに返上している。彼の手に残されたのはスワイダの井戸だけだったが、それは彼が自分で見つけたものであった。ところでこの井戸からあがる年収は、約150ディーナールであった。

彼はすべてのものを返上するまえに、ひとびとに呼びかけ、モスクで祈るようにいった。そして彼は聖壇の上に昇り、いつている。

「これらの人々は、われわれがとるべきでなく、また彼らが与えるべきでなかった贈物をわれわれに与えた。そして私自身にもこのようなことが起ったのである。これについては私は、神にたいしてのみ責任があるのだ。だが私はこのような不正な贈物を返上した。こうしたことは自分自身、自分の家族の者から始めなければならないのである。」

そして彼の召使いのムザーヒムが、このような贈物の証書を大声で朗読し始めた。だが彼がその1枚を読みあげるやいなや、ウマルはそれを取りあげ、切り刻んでしまったのである。それからウマルは、アブド・ル＝マリク・イブン・マルワーン（マルワーン）の娘である妻のところに赴いた。彼女は父から、数え切れぬ程の宝石を貰っていたのである。そこでウマルは彼女にいった。

「貴女の宝石を国庫に返すか、私にそれを取りあげさせてもらいたい。私はこのダイヤモンドのある家に住みたくないのです。」

彼の妻は答えた。

「どうぞカリフ様、私がそのようなものをもっていますなら、どうぞダイヤにせよ、それ以外のものにせよお取り上げ下さい。」

そこで彼はダイヤをとりあげ、それを国庫に返還したのである。ウマルの死後、ファーティマの兄弟であるヤジード・イブン・アブド＝ル＝マリクがカリフの地位についた。そして彼は彼女にいった。

「もしよかったら、ダイヤモンドをお前に返してやろう。」

だが彼女は答えていった。

「私はウマルの生前にあれを返しました、そしてそれで幸福でした。私は彼が死んだからといってとり返そうとは思いません。」

これをきいてヤジードは、それを自分の家族、息子たちに分け与えてしまったのである。

ウマルは、戦争をせずに不信者からえたものを何一つ自分のものとはしなかった。ところで彼はつぎのようにいわれたことがある。

「貴方はウマル・イブヌ＝ル＝ハッターブがとった分だけ（注 日に2ディルハム）おとりになるがよい。」

するとウマル・イブン・アブド＝ル＝アジーズはいった。

「ウマル・イブヌ＝ル＝ハッターブは貧乏だった。しかし私には自分の財産がある。」

ウマル・イブン・アブド＝ル＝アジーズは、バヌー・マルワーン族の人々に、所有する権利のないものをその正当な所有者に返還することを強要した。ヒムス出身の非ムスリムが彼のもとにやってきて、つぎのようにいったと伝えられている。

「ああカリフ様、アッラーの聖なる書を尊重して下さいよう貴方をお願いいたします。」

そこでウマルはその男に、一体何を望んでいるのかと尋ねた。するとその非ムスリム（ズィンミー）はいった。

「アル＝アッバース・イブン・アブド＝ル＝マリクが、私の土地をとりあげてしまったのです。」

ウマルは、丁度そこにいあわせたアル＝アッバースに尋ねた。

「お前はこれについて何と答えるか。」

するとアル＝アッバースはいった。

「カリフ、アル＝ワリード・イブン・アブド＝ル＝マリクがその土地を証書と共にくれたのです。」

そこでウマルがこの非<sup>ズインミー</sup>ムスリムのいい分をきくと、彼は答えていった。

「私は貴方さまが、アッラーの聖なる書を尊重して下さることを望むばかりです。」

するとウマルはいった。

「たしかにアッラーの書の方が、アル＝ワリード・イブン・アブド＝ル＝マリクの証書よりもはるかに正当性がある。アッバースよ、彼にその土地を返しなさい。」

そしてアル＝アッバースは命に服したのである。

ある時アンバサ・イブン・サイード・イブヌ＝ル＝アースが、友のウマル・イブン・アブド＝ル＝アジーズのもとにやってきた。彼はスライマーンが彼に与えると約束しながら、死んでしまったために貰えなくなってしまった2万ディーナールの贈物が用件で、ウマルのもとにやってきたのである。アンバサは、友達の間柄を利用して、ウマルに担当支払官に命令を下すよう依頼にきたのであった。しかしウマルは尋ねた。

「一体いくらなのだ。」

アンバサが、

「2万ディーナール。」

と答えると彼は即座に答えた。

「2万ディーナールあれば、4千のムスリムの家族を豊かにできるではないか。神に誓っていうが、私にはそのようなことはできない。」

ヤフヤー・イブン・サイードは知っている。

「私はウマルの命をうけ、アフリカから喜捨の贈物をうけとりにいった。仕事を終えて私は、貧乏人に喜捨を与えようとしたが、1人の貧乏人も、また喜捨をうける資格のある者もいなかった。何故ならばウマルが、人々を困らせないようにしていたから。そこで私は奴隷を買い、彼らを自由にしてやった。」

ある時ウマルのイラク総督アブー・イブン・アルタアが彼に便りを送った。

「非常に多くの人間がイスラームに改宗し、税収が激減するものと思われます。」

これに対してウマルは答えている。

「神かけていうが、私はすべての人々がイスラームに改宗し、私もお前も自ら働いてえたものを口にする農民となることを望んでいる。イスラームに改宗した者は誰にせよ、人頭税を支払う必要はない。アッラーがムハンマドを遣わされたのは、指導者としてであって、収税者としてではないのである。」

諸カリフ、諸王の困難な時代を経た後に、ウマルはその治世にこのようなイスラーム社会主義を再現させたのである。すでにのべたように、イスラームの永遠の精神は、その体系の背後に常にかくされているのであり、誰かがそれに道をあげ、公正と繁栄、平和を築くように努力しさえすればよいのである。この数世紀の間、社会の内部に完全なかたちで姿を現してはいないが、この社会主義の諸特質は永い歴史を通じて失なわれず、いまだに存在しつづけており、ムスリム諸国の社会生活の諸相にはっきりとした特徴をもってあらわれているのである。われわれはいまやそれが明らかに現れ、輝きださんとしている姿を見、それが新しい社会の中に実現されていく姿を見るのである。

## 第 5 章

結

論



われわれは社会主義理論の最も重要なものを取りあげ、そのすべてが人類の繁栄を意図していることを確認した。諸理論の間に認められる相異は、この繁栄を実現するための手段の相異なのである。この書の結論を述べるにあたり、ここで西欧の社会主義理論とイスラーム的社会主義の原理の、一般的な比較を行なう必要があると思われる。

西欧の社会主義理論はこぞって私有権が人類の不幸の原因だとしている一方、イスラームはこれに反し私有権の原理を正しいものとして確立している。

哲学者は、私有権の原理についてさまざまな議論を展開している。例えば17世紀の哲学者グロティウスによれば、事物は元来各個人により集団的に所有されていたのであり、この状態は各個人が単純さ純粹さを享受していた原始時代を通じて維持されてきた。しかし人類が繁栄、進歩するにつれ、新しい欲望、必要が生まれ、これらの欲望、必要によって一般的所有が相応しいものではなくなってきたのである。また人々の行動、生活享受の様式が異なり、個人の性格、道德観が腐敗してくると、このような所有形式は理解も及ばぬものとなったのであった。個人はみな、自分の生存を確保するために機会をうかがい始めたのである。私有権はかくして初めて姿を現すことになったのであった。グロティウスによれば、私有権は資源が増加せぬ一方、人口が増加したこと、人間性の腐敗、人々の利己心といったことに存在の源を持つものなのである。

ルソーは、社会内のすべての腐敗を私有権に帰している。

トーマス・モアはその書『ユートピア』の中でいっている。

「所有制度が私有となり、富があらゆるものの尺度になると、社会に公正な政府を用意し、また社会に繁栄を享受させることは困難、否ほとんど不可能になる。」

サン・シモンは、社会的地位、富というものが、個人が社会に対してなした真摯な努力の報酬であるかぎり、私有権とある種の特権を認めるようにと主張している。

私有権に関する最も極端な理論は、無政府主義の祖プルードンのそれである。1840年に彼は、『所有権とは何か、所有権とは泥棒なり』と題した小冊子を発行した。この中で彼は所有権を激しく批難し、それこそ資本主義を支える柱であると主張したのである。彼は人為的な法が、この腐敗した主義を防衛するという理由からこれを攻撃した。論拠の1つとして、彼はベンサムのおつぎのような言葉を引用している。「人為的な法が存在するまでは、私有権は全く存在しなかった。もしもわれわれがこの法を撤廃すれば、私有権制度はたちどころに消滅するであろう。」

プルードンはおつぎのように攻撃の火蓋を切っている。

「大地と、その上にある森羅万象を創ったのは誰だろう。この所有権を要求しうる者は、神々以外にないのではないか。それならば誰1人として所有権を要求し、法によって何かを所有しようという権利をもつ者はいないはずである。」

土地所有後の地価の値上がり、地代の値上がりは、すべて社会的な原因、状況によるものである。それゆえこれらの利潤獲得手段は社会に属すべきものであり、いわゆる所有者のものであってはならない。なぜならば後者は、地価の創造に何一つ関与していないのだから。

以上が、彼が土地所有者たちを泥棒と呼ぶ理由である。なぜならば彼らは、社会のものであるべき土地を不正な手段、悪辣な仕業によって盗みとり、多くの人々からそれを利用する機会を奪ったのであるから。

私有制は悪であり、救済の道における障害物であると主張し、共有こそ本来の所有のあるべき姿であるという原理をもたらしたのは、初期キリスト教であった。キリスト教が私有制を認めたのは、これこそ当時の既成システムであり、人間社会の大部分が古来これを採用し、維持してきたため、これを改変しえなかったからだという以外に、何の理由もない。ただしキリスト教は、それが一般的利益のために用いられ、個人の必要を満たしうるという限界内でのみ所有権を認めているのである。

マルクシズムにとっては、私有権こそが諸階級を産みだす原因であるが、これら階級は撤廃され、人間社会の最良の期間だった、最初の共産主義的段階に返らなければならないのである。

以上が私有権に関する西欧の哲学者、社会主義者たちの見解である。

イスラームは私有制に固執するが、それは個人と社会を切り離さず、結合させておくためである。イスラームは自然の本性を考慮するが、決してそれを放置しはしない。所有欲は自然の本能であり、悪い結果をもたらさぬ限り否定されるべきものではない。イスラームは所有権の上に諸規制を設け、それを具体的なというより理論的所有に近いものとしているのである。これによって一方では社会の利益が守られ、他方で個人の自然の本能が満足されるのである。

私有権に関する前述の見解からわれわれは、グロティウスが所有権の増大を個人の利己心、悪しき性格に帰していることが解かるであろう。しかしイスラームは良心を陶冶し、心のうちに同胞愛、協力の精神を植えつけるのである。

聖なる預言者はいつている。

「自分の兄弟を自分なみに愛せぬ者は、真の信者とはいえない。」

イスラームにおける個人は、利己心、憎しみではなく、愛他心、同胞愛に訴えかけられたのち、価値ある何ものかを所有するにいたるのである。

私有権、土地所有者に関してプルドンは最も極端な意見の持ち主であった。この過激な考えは、彼の社会にたいする羨望、憎悪に端を発しているのである。彼は労働者階級に生まれ、この階級が味わっている貧困の何たるかを知っていた。彼はこの社会に生きるすべての個人にたいして極端な羨望と憎悪の眼ざしをむけ、無政府主義の主張を行なったのである。「宗教も、国家も、法律も存在すべきではない。」という主張を。

カール・マルクスは、私有権が搾取と腐敗の原因であると考えていた。マルクシズムは、実際には1917年のボルシェヴィキ革命後、ロシアで適用され

た。革命後私有権は実際に破棄されたが、1921年に再びとり入れられ、1926年に撤廃されたが1932年にはまたこれが復活している。

私有権の廃棄とその復活は、時をおいて何度かくり返されたが、結局ソヴィエト憲法はこの制度を保護しているのである。これは私有権廃止の実験が、実際に失敗したことを物語る以外の何ものでもあるまい。なぜならばそれは、人間性内部に存在する自然の本能に逆らっているのだから。

サン・シモンは、私有権というものが個人の社会奉仕の努力の結果であるとして、それを認める立場にある。しかし彼の議論の背後には、何か個人的な要素がうかがわれるのである。サン・シモンは貴族の出身であり、したがって当然自分の享受している階級の特権を守りたいと念じているのである。

以上の考察から、イスラームは理想的な体系であるということが明らかにされるであろう。イスラーム社会主義は理念的ではなく、あくまでも現実的であり、功利的ではなく人道的である。

相続の問題についても、イスラームと西欧社会主義には相違がある。後者は私有権を認めない関係上、相続も認めていない。サン・シモンは私有権を認めているが、相続は認めていない。マルクシズムは、理論的には相続を認めていないが、実際にはこれを認めている。ソヴィエト憲法はこれを承認しているのである。相続は、イスラームによれば、私有権の自然の結果である。同時にそれは両親をして、生きている間にできうる限りの努力を払い、可能な限りの報酬を受けとるようにしむけるのである。彼らは子孫たちが生活に困らぬよう遺産を残すために、働きつづけるであろう。そしてこの場合、利益にあずかるのは社会そのものである。

西欧社会主義理論は、男女の平等を説いている。これにより西欧社会主義者は、労力と賃金の平等、つまり物質的平等を誇りとしている。なぜならば女性も男性同様に働き、男性同様に自活しているのだから。だがこれらすべての社会主義理論は生産とその増加をのみ意図し、女性の本性、彼女の生活における役割、彼女の肉体的特長について考慮していないのである。彼女も

消費する以上、生産しなければならない。実際この種の平等はすでに西欧の男性によって認められ、支持されているが、これはこうすることにより男性が、家庭を支えていく重荷から解放されるからなのである。だがこれは、たんに物質的なもののみを考慮に入れた見解であろう。マルクシズムにとっては、経済的要因こそは生活のすべての基礎である。換言すれば物質とは、その上に道徳、行動、関係が生ずる根本的基礎に他ならないのである。

しかし女性は、一体何ゆえに自分の本性に反するこの平等を守るため慌てているのであろうか。その答えはすでに述べたように、西欧において女性は、何の価値もなく、動物同然にとり扱われ、むしろ動物ほども純粹でないと思なされ、ないがしろにされてきたからである。それゆえ彼女は、心の奥底から自分の人間性が男性のそれより劣ると考えてきたのである。そして機会を見出すや彼女は、自分自身感じとり、また事実何世紀も彼女を圧迫してきたこの欠陥の代償を慌てて手にしようとしたのである。この平等のために苦しまなければならぬものがあるにもかかわらず、彼女は過去の生活にあともどりすることを恐れ、この平等のもたらす重荷について考えようとしないのである。

女性についてのイスラームの見解は、人間的なものである。イスラームは彼女を屈辱と無視から救い、彼女に人間的尊厳にかかわる限りの男性との平等を与え、結局彼女を人間的水準に高めているのである。またそれは女兒の生き埋めを廃し、結婚についての女性の意見の自由を認めている。ついでイスラームは、物質的に男性が女性にたいして責任があると規定しているのである。彼女は真の必要に迫られぬ限り、外で働く必要はない。これは人間的な平等であり、労働と賃金において男女を平等にし、女性も消費者であるという理由から彼女を生産に従事させるような、物質的平等ではないのである。

マルクシズムは歴史の説明に当たって物質的な見解をとる。つまり経済的要因こそがあらゆる人間関係の基礎なのである。この関係は結局美望と憎悪に基づく階級闘争へと帰結していくのである。つまり人間の歴史は、すべて

の人間の間、の羨望、憎悪に満ち溢れており、これまで達成されたあらゆる発展の基礎は、すべて神聖ではないとしているのである。

しかしどうしてこのようなことがありうるものであろうか。一体古代文明は、いかにしてこの世界に登場したのであろうか。それらは羨望と憎悪に基礎をおいていたのだろうか。そのようなことは不可能であろう。それらは2つながらに破壊的な力であり、創造的な力ではないのである。

ドイツの哲学者ベルンシェタインは、マルクス、エンゲルスの後期の著作に反論し、経済的要因のみが社会主義的發展に寄与するものではないといっている。ベルンシェタインによれば、歴史の正確な評価を行なうためには、当時の優位にたつ法的、道徳的理念、宗教的伝統、当該社会の文化的性格、その地理的環境その他の自然的諸要因が考量されなければならないのである。彼も経済的要因が優位に立つことは認めている。しかし人間社会の進歩とともに、道徳的、知的要因がしだいに独立的な地位を占め、その結果物質的条件の力を弱めることになっている、と彼は主張した。

人間的関係が責任感、義務感に基礎をもつイスラームとこれとを、一体何如にして比較しうるであろうか。この責任感、義務感は良心を陶冶し、精神を訓育して、個人がアッラーの御心にかなうという以外のいかなる報酬も期待せず善行をなし、自分の良心のやすらぎをえ、責任を遂行するよう促すのである。クルアーンはいつている。

「われらはこの天の啓示を、諸天、大地、山々にさしだしたが、それらはこれを受けとることを拒み、みじろぎした。(それを受けとることの重みに耐えかねることを怖れて。)しかし人間はこれを受けとったのである。」人間には義務が課されており、これを着実に実行しなければならないのである。

ところで西欧社会主義における社会的連帯とは、一体何であろうか。

革命的な社会主義であるマルクス主義は、持たざる者、労働者をかりたてて、一致協力してすべてのもの、自分たちが働いている工場までをも破壊してし

まうような、破壊的革命に従事するよう呼びかけているのである。このような破壊的革命によってのみ彼らは権利を獲得し、彼らにふさわしい良き生活が可能になるというのである。この目標は、搾取階級である資本主義者たちを滅すことによってのみ成就される。また穏健社会主義者の見解によれば、労働者たちのために良き生活を保障するためには、まず議会内の議席をふやし、政府内に閣僚を送り、現存する政府に甘言を弄する必要がある。この段階を過ぎたのちに権力は労働者の手中に入り、彼らは貧困階級に名誉ある生活を準備するような法的決定を下すことができる。西欧社会主義はこのような見解をとっているのである。

しかしイスラームは、破壊的革命、甘言、欺瞞を用いずして人類のために名誉ある生活を確保したのである。ザカートはイスラームにより義務とされ、その1つの柱と見なされたのである。イスラームは、外的圧迫なしに、ひとが自発的に善行を行なうよう従容している。カール・マルクスは、イスラームにおけるザカートのシステムについていっている。

「これは各人が支払わなければならない宗教的義務である。この宗教的性格により、ザカートは一般的な社会的システム、つまりイスラーム国家が専政的、圧制的、あるいは気まぐれで、いい加減なものでない組織的、国家的方法により貧者を助け、支えるための基金源となったのであった。人類の歴史の中で、このような特異なシステムを採用したのはイスラームが初めてである。土地所有者、金持ち、商人たちは、困窮者、知的、肉体的障害者を救うために国家が利用するザカート税を支払わなければならなかった。これは一国家内の各集団を仕切る柵をこわし、社会をただ1つの社会的集団にまとめあげる上で大いに力があつた。このように、このイスラームのシステムは、それが忌まわしき利己心に基づくものではないことを立証しているのである。」

他の思想家、レオ・ドロシュはいっている。

「私はイスラームの中に、世界が課せられてきた2つの問題の解決を見

出した。第1の問題はつぎのような言葉により解決される。『信者たちは兄弟同胞である。』これは社会主義のもっとも高貴な原理である。第2の問題は、富める個人にザカートを課すことによって解決されるのである。」

だがイスラームは1つの宗教である。ところで宗教にたいする西欧社会主義の見解はどのようなものであろうか。西欧は宗教を生活から切り離している。それは具体的な生活とは何の関わりもない、個人と神との関係なのである。そして宗教のための場所は、教会の壁の中にしかないのである。神を崇めようとする者は、自分の精神的要求を満たすために特定の日に教会に行かなければならず、それから教会の中で彼が感じた心の昂まりは再びつぎの機会にゆずり、これを空にして物質的な生活にもどっていかなくてはならない。この宗教の生活からの分離は、西欧の人々が耐えなければならなかった恐怖を想起すならば、当然宥されるべきものであろう。キリスト教聖職者のある者は道を誤まり、人民の敵、封建主義者、資本主義者を支援して、キリスト教固有の寛容を尊ぶ原理から逸脱し、自分たちの利益、欲望を追求することに専心したのである。また市民的な権威と宗教的な権威が永らく抗争したのち、結局は前者が勝利をうることになり、宗教は日常生活から切り離されてしまったのである。この傾向はまた宗教自体ではなく、聖職者にたいする一般的な憎悪からさらに助長された。

マルクシズムは宗教を人民の阿片だと考えており、これをとり除くために絶えまなく戦いが挑まれねばならぬといっている。

マルクシズムは、それが資本主義と戦うと同様の革命精神をもって宗教に敵対せねばならぬと主張し、宗教を除去し、そのすべての残滓を社会から摘出しなければならないとしている。

カール・マルクスはいっている。

「神などは存在しない。生活とは物質なのだ。」

宗教にたいして、彼はつぎのような見解をもっている。

「それは人々をして、たやすく自己の存在を奪いさられるようにする阿



片である。宗教とは、国家が経済的従属のための手段であるとするならば、精神的従属のための手段に他ならないのである。」

レーニンは宗教についての労働党の立場をのべている。

「マルクスは、宗教が貧者に与えられた阿片だといった。この言葉こそ、宗教に関する全マルクス主義哲学の基礎である。マルクスシズムはすべての現代宗教、教会、あらゆる種類の宗教機関を、労働者階級に麻薬を与え搾取をはかるブルジョワジーの反動の道具だとみなしているのである。」

このような宣言が行なわれる理由は、ツァーの統治下において、正統派教会とツァーの専制政治が同盟を結んだ結果ロシア人たちが経験しなければならなかった酷い体験にもとづいている。教会は自由の抑圧に力を借し、ツァーの専制政治を支持したのである。マルクスによれば、教会はつねに資本家と結んでいたのである。

誤りはこの場合宗教にあるのではなく、キリスト教の目的から逸脱した聖職者たちにある。

私見によれば、マルクスの宗教にたいする憎悪は、彼がユダヤ教の聖職者の家族に生まれたことにあると思われる。彼の父はユダヤ教を捨て、キリスト教に改宗した。彼はしたがって不確かな、居心地の悪い宗教的環境に育ったのである。もしそうでないとしたならば何故彼の父親は、聖職者の後裔でありながら自分の宗教を捨て、他に走ったのであろうか。

マルクスシズムは宗教とたたかい、ロシアでそれを破壊したが、この政策の具体的適用例を見ると、常のことながら理論通りにはっていないのである。スターリンは、宗教というものがその信者に勇気、献身、果敢さを与えるといている。1943年にヒトラーとロシアの間に戦争が勃発すると、スターリンは宣言している。

「ロシアは現在それを認め、訂正しようと望んでいる誤りのかつて犯した。ロシアは宗教を認め、神の存在を認めるものである。」

放送はふたたび宗教礼讃を始めたが、これはヴァチカンとカトリック教会

の勢力と対抗させるために、ロシア正統派に内在する精神的力を人々の中から目覚めさせようと意図してのことである。なぜならば特にバルカン諸国の中には4,000万人の正統派キリスト教徒がいたからである。

スターリンは1943年9月、ボルシェヴィキによって廃棄された神聖教義会を復活させているのである。彼はロシアにイスラームの権威を代表する裁判官と、キリスト教のそれを代表する司教をおき、共産党の自分の直接息のかかったものを各村々、地域に派して信仰を拡めようとしている。宣教活動は東西を問わず行なわれ、ロシアはふたたび宗教を持つようになったのである。

エジプトに派遣された外交官の1人であるスルタノフ氏は、自らイスラームに改宗している。

このようにマルクシズムは、私有権、相続権等々の本能的、本性的な問題についてと同様、宗教の問題についてもそれまで行なってきた政策から後退しているのである。なぜならば生活は物質のみではなく、物質と精神からなりたっているのだから。イスラームは、その体系の中にこの2つを結合させており、これらを切り離したり、一方を他より重視するといったことはしていない。それゆえこれは、人間にとって何が相応しいかを最も良く知りたもう唯一の方であり、また人類の創造者でもあるアッラーにより定められた理想的な体系であると、いえるのである。これは社会にたいし羨望、憎悪をもっている存在によって定められたものではない。クルアーンにつきのような1節がある。

「アッラーは自然を創り、その中に人間を創られた。アッラーの創造には改変はない。それはまさに正しい宗教なのである。」

ここにいま1つ、当然解答が与えられなければならない問題がある。果たしてイスラームは階級制度を支持しているのであろうか。これについては聖なるクルアーンが明確な解答を与えている。

「アッラーはある者より、他の者に豊かな生活手段を与えたもうた。」

「そしてアッラーはある者の地位を他より高められた。」

イスラームは西欧世界に知られているような階級制度を認めてはいない。

ヨーロッパ社会は中世において、もっぱら階級制度に支配されてきた。貴族階級と権威ある僧職者階級が上にたち、その下に平民階級があったが、これらの階級的特色は非常に明らかだったのである。貴族は称号、名誉を相続しうのみでなく、尊く生まれ、尊く死ぬと考えられていた。貴族は、法で定められた種々の特権を持っていたのである。僧職者にしてもこれと同様であり、彼らは王、皇帝にたいして悪意を抱き、彼らにたいする支配権を手にとろうと躍起になっていた。彼らもまた彼ら特有の特権をもっていたのである。

平民はといえば、彼らの上に君臨する2つの階級の諸特権に悩まされ、苦しみ抜いてきたのである。

ヨーロッパにおける階級制度とは以上のようなものである。富と権威と立法の力を握っていた階級は、自らを守るに都合のよいような法を作り、人々をその権威に服させ、支配階級の欲望を満たすために彼らから基本的な多くの権利を奪っているのである。

一方イスラームにおいては、聖なるクルアーンが協力、愛情、同胞愛に立脚した法を定め、社会生活の規範を与えるのである。そこには一特殊階級が、他の階級の利益に反してまでも自分たちの利益にかなう法を制定する、といったことは存在しないのである。天啓の法がすべての問題を、いかなる偏見、圧迫なしに統べているのだから。このようにイスラームには階級は存在しない。自ら自分の利益をのみ追求する者に立法が委ねられぬ以上、階級が存在することはできないのである。

先に引用したクルアーンの文句に明らかなように、人間の本性の中には、実際に優劣が存在するのである。すべての人間が同様の知的、肉体的能力をもつということはいえぬのである。したがって彼らが同じ量の仕事を行ないうる訳がなく、努力の結果には開きがでてくるのである。

アッラーは、生活に関してある者を他より優位におかれたが、これは彼ら

の努力の結果に帰因することなのである。アッラーはこのように優劣をつけられているが、これは生活が豊かになり、人々がみな自分にかなった仕事に精を出し、生活を維持していくように仕向けるためのものなのである。

すべての人が一定の智力をもち、例えば技術者といった1つの職業につくということが望ましいことであろうか。

このようなことは、本来不可能である。これらの技師たちのプランを実行する人々は、一体どこにすることになるのであろうか。

この種の優劣は、普通いわれている階級差別とは別のものである。これはむしろ人々に生活を維持させていくことを可能にする、個人の本性の相違といわれるべきものであろう。

以上がイスラームであり、その社会主義である。これは神聖、崇高なものであり、愛情、同胞愛に基礎をもち、正義と平等を確保し、あらゆる人間に人間らしい生活を許すものであり、これを採用する人々に不滅の、最も高い地位を与えるものである。未来はこのイスラーム社会主義のためのものであろう。クルアーンはいつている。

「これらはアッラーの（完全な）道をとっているものであり、アッラー以外に完全な者は存在しない。したがってわれわれはアッラーを崇うのである。」